寺院名	富貴寺		寺院番号	①
所在地	大字田染蕗			
居住状態	有住			

指定文化財		各種文化財員数	種別	個数
富貴寺大堂(国宝) 木造阿弥陀如来坐像(国有形) 大堂壁画(国有形) 笠塔婆(県有形) 木造阿弥陀如来坐像(県有形) 木造仮面(県有形) 富貴寺板碑(県有形) 富貴寺石殿(県有形)	富貴寺石幢(県有形) 富貴寺国東塔(市有形) 其ノ田板碑(県有形) 富貴寺境内(国史跡) 富貴寺十王石仏・奪衣婆石仏及び地蔵石仏(市有形) 富貴寺地蔵石仏(応安)(市有形)		木造建築	5
			礎石跡等	3
			石造物	36
			仏像	4
			美術品	4
			古文書	1
			その他	1

特筆すべき文化財			
・白山社(写真№21)	・本堂(写真№22)	・妙蔵坊五輪塔群(写真№28)	・蕗政所跡(政庁部)(写真№31)
・蕗政所裏板碑(写真№32)	・蕗政所跡(山城部)(写真№33)	・富貴社(写真№35)	・堀口地蔵尊(写真№37)
・南之坊石造物(写真№38)	・平野薗板碑(建武)(写真№46)	・富貴寺文書	・経筒及び丸瓦
・石造仁王像			

寺院管理状況

〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉

・現在、住職により境内などの管理が行われており、大堂内陣・大堂周辺（夜間）では対人・防火センサーが作動している。センサーが反応すれば、受付・庫裡・蕗薹に通報される。本堂内陣でも同様のセンサーが作動している。
・大堂周辺の揚水ポンプは平成26年度に取替えをしている。避雷針については、腐食が進んでおり、平成28年度に補助事業での付け替えを予定している。
・大堂は雨天観覧を中止し、普段は正面を開放しないなど、日光・雨水による建物及び壁画の劣化を防いでいる。
・出土物や木造仮面については、本堂（客殿）のキャビネットに入っており、鍵がかかっている。
・白山社については、管理が地元住民であるが、本殿・拝殿ともに風化が著しい。
・本堂については、江戸時代中期の建築であり、国東半島の坊建築の中でも特に古い様式を見せている。
・参道の入口にある石造物群は、やや西にある富貴社から持ってきたものであるといわれている。
・富貴寺の末坊に関しては、坊建築としては大門坊、妙蔵坊がある程度古い建物を残している。南之坊、谷ノ坊は石造物を残し、中之坊、東之坊にいたっては殆ど残っていない。
・政所周辺の管理は、柏木隆二氏ら住民の協力によってある程度はなされているが、山城部では藪化が進んでいる。
・平野薗板碑は、南北朝時代の大型～中型の板碑が密集しているものだが、近年管理者が死亡しており藪化が始まっている。

寺院史概略

・創建について詳細は不明であるが、安貞目録には高山末寺として登場し、到津文書や木造仮面の墨書銘などによって、宇佐神宮神官の菩提寺として平安中期頃に開かれたと考えられている。
・建武注文では調氏によって押領されていると見えるが、大堂棟木には寄進者として「調幸實」の名が見える。他にも周辺に設けられた田染荘を管理するための武家方の拠点「蕗政所」の跡が残されているが、古文書に見える範囲では、初期には曽禰崎氏が、その後田原氏・吉弘氏へと支配が移っていく。
・富貴寺は院主坊と呼ばれる本坊と、６つの坊によって形成されていたが、寛延四年（1751）の『寺院差出帳』によれば、南之坊のみが宗教活動を行い、大門坊・妙蔵坊は百姓屋敷、谷之坊・東之坊・中之坊は水田になったとされる。
・大堂には大正時代まで鞘堂（覆屋）が設けられていた。その後、戦時中の爆撃の影響によって屋根が飛ばされるなどの被害に遭っている。
・其ノ田板碑や大堂内地蔵石仏の銘などから、南北朝時代初期より時宗の信仰が盛んになっていったことも分かっている。

寺院現況及び変更点

〈A地点〉(図版②：境内地図面参照)
・南北朝時代～室町初期の石造物が集中している。富貴社や周囲の坊跡から集められたものである（写真№.１）。
・参道については、いつ頃からその位置であったかは不明であるが、『寺院差出帳』では既に仁王の存在が確認される。
・仁王門については、『寺院差出帳』以後にできたと考えられ、昭和53年の発掘調査によれば、現在のものよりも小さく、茅葺きのものが立っていたと考えられている。（写真№.５）

〈B地点〉(図版②：境内地図面参照)
・仁王門の先についても、大堂までまっすぐの参道が付いている。脇には石造文化財も散在する。（写真№.６）
・大堂手前には、笠塔婆１基（写真№.７）と石灯篭が存在する。

〈C地点〉(図版②：境内地図面参照)
・国宝の大堂は、現在では内陣へ入っての観覧をしておらず、年1回の特別観覧以外は正面を開けない措置をとっている。セキュリティも十分になされている。（写真№.８）内部には国宝棟木や国指定木造阿弥陀如来坐像などが安置され、長押や内陣には国指定の大堂壁画がある。（写真№.９）

〈D地点〉(図版②：境内地図面参照)
・大堂外周には浄土思想に関わる石造物などが密集している。内訳としては、逆修祈願の笠塔婆５基（仁治～文永）（写真№.10）、国東塔（南北朝～室町初期）（写真№.13）、十王石仏、奪衣婆石仏（写真№.12）、各種墓塔・墓碑などである。

〈E地点〉(図版②：境内地図面参照)
・歴代住職の墓地が並んでいる。無縫塔が主であるが、近世の位牌型墓碑も並んでいる。（写真№.17）

〈F地点〉(図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照)
・戦後の調査の時に経筒が出土した場所。（写真№.18）出土経筒は、現在本堂の西側の部屋のキャビネットの中に安置されている。

〈G地点〉
・富貴寺の奥の院。現在では龕内に薬師如来の石像が収められている。（写真№.19）

〈H地点〉(図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照)
・他の六郷満山寺院では、六所権現などと呼ばれるが、富貴寺の場合は白山社と呼ばれる寺院附属の神社。拝殿・本殿が残されており、保存状態はあまりよくない。特に本殿は昭和末の改修の際に、トタン製の覆屋を設置しているが、それによって風通しが悪く、建物自体を傷めている可能性があるという。管理は蕗集落になる。（写真№.20・21）

〈I地点〉(図版②：境内地図面参照)
・富貴寺本堂で建物自体は寛文六年（1666）に造られたものを、正徳五年（1715）に再興したものである。以前は茅葺であったことが分かっているが、現在は瓦葺きである。（写真№.22）内部には県指定木造阿弥陀如来坐像（写真№.23）、県指定木造仮面（写真№.24）だけでなく、古瓦・経筒・古文書類が安置されている。隣が生活空間（庫裡）であるが、防犯・防火対策はなされている。（写真№.25）

〈J地点〉(図版②：境内地図面参照)
・大門坊跡であり、寛延四年（1751）の『寺院差出帳』の段階では既に百姓屋敷となっていたことが分かる。現在は茅葺の屋根をトタンで覆った家屋が建っている。（写真№.27）

〈K地点〉(図版②：境内地図面参照)
・妙蔵坊跡であり、寛延四年の段階では大門坊と同じく百姓屋敷となっていたことが分かる。

〈L地点〉(図版②：境内地図面参照)
・妙蔵坊跡との関係が深いとされる墓地。中世の五輪塔や、板碑が密集している。上人の墓という異称で知られる。（写真№.28）

〈M地点〉(図版②：境内地図面参照)
・清音寺跡付近である。清音寺跡は蕗薹駐車場下の桜の木のあたりであると伝えられる。（写真№.29）蕗薹の裏側には近世墓地に加えて、最近になって中世・阿弥陀種字板碑２基を含めた墓地が発見された。

〈N地点〉(図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照)
・蕗村の庄屋屋敷があった場所であり、現在も庄屋の子孫である柏木氏が住んでいる。家の裏手には、庄屋柏木氏の墓地が並んでおり、龕内石仏なども安置されている。（写真№.30）

〈O・P地点〉
・蕗政所と呼ばれる城郭跡が存在する。O地点（写真№31）は最西部に円形の郭を持ち、東側にかなり長い堀を持っているが、P地区の遺構との関連から平時の館と言われている。P地区も円形の郭を持ち、二重の土塁によって囲まれた遺構が残っている。山城としての機能を持っていたとされる。P地区の山城遺構の上には妙見社（写真№33）が存在している。二つの城郭遺構、特に山城遺構については藪化が進んでいる。

〈Q地点〉（図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照）
・県指定其ノ田板碑が所在する。その他、修行岩・五輪塔などが散布する。（写真№34）

〈R地点〉（図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照）
・富貴社がある。富貴寺参道脇の中世石造物の一部は富貴社から来たといわれている。（写真№35）

〈S地点〉（図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照）
・堀口地蔵堂がある。地蔵堂には中世阿弥陀種字板碑のほか、磨崖石仏があり、時宗による信仰との関連性が高いといわれている。（写真№36・37）

〈T地点〉（図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照）
・南之坊跡であり、現在も中世石造物などが残る。（写真№38）阿弥陀種字板碑は南北朝期と推測され、磨崖五輪塔（写真№39）は戦国期とされる。寛延四年（1751）の『寺院差出帳』の頃にも、仏事を存続させていた唯一の坊跡。立地からして、石造物の位置は比較的安全。

〈U地点〉（図版②、③：境内地図面・境内詳細図参照）
・中之坊跡。現在は水田や河川となっており、坊跡の名残はない。（写真№40）

〈V地点〉（図版②：境内地図面参照）
・谷之坊跡。現在は民家となっている。東側に墓地があるが、近代墓が中心。一部五輪塔・宝塔部材に近世のものが混在している。（写真№41）

〈W地点〉（図版②：境内地図面参照）
・東之坊跡。現在は水田や河川となっており、坊跡の名残はない。（写真№42）

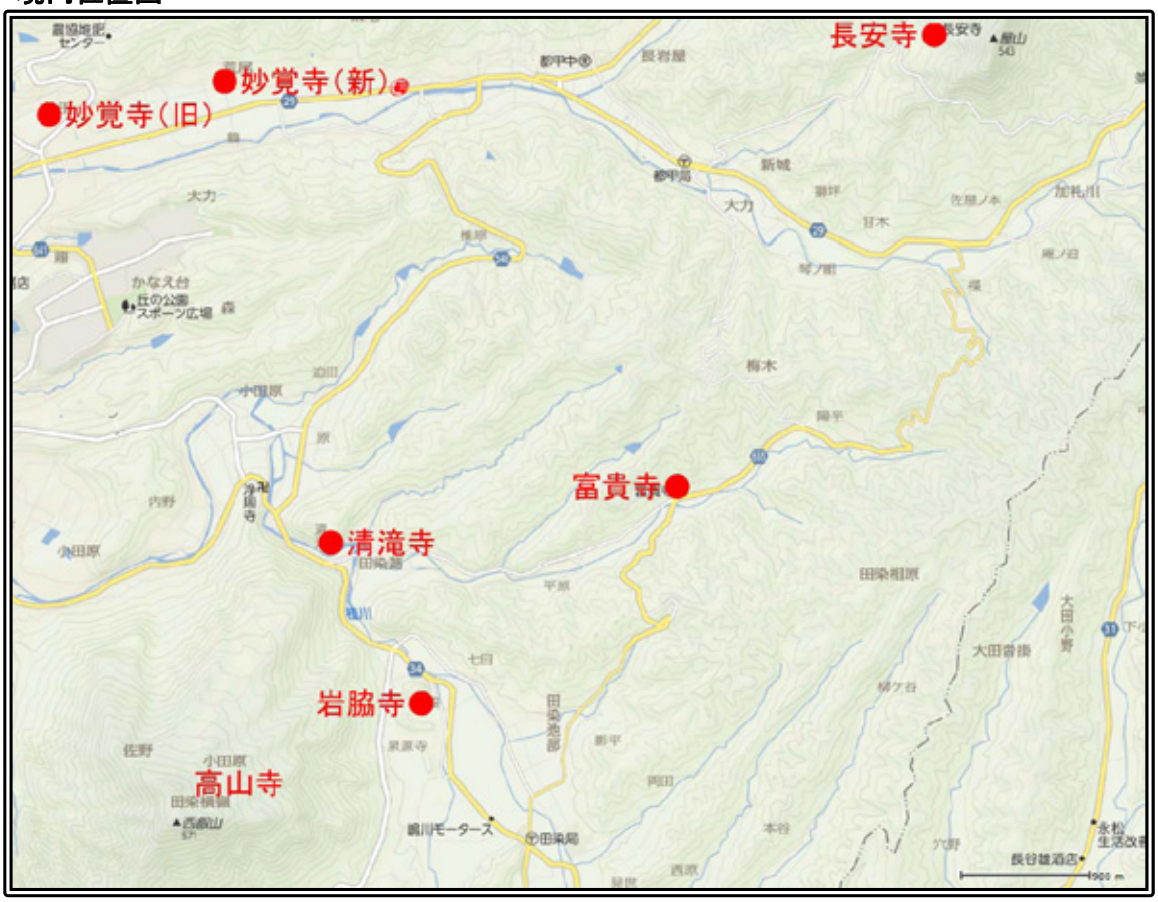
〈X地点〉（図版②：境内地図面参照）
・陽平神社がある。参道脇には近世初期以降の石造物が並んでいる。（写真№43）

〈Y地点〉（図版②：境内地図面参照）
・平野薗板碑がある。『豊後国田染荘の調査』によれば、３つの板碑が報告されているが、実際にはそれ以上の板碑が確認できる。また板碑によっては状態が悪く、剥離してしまっているものもある。周辺には宝篋印塔部材や一石五輪塔、種字入り五輪塔など中世石造物が密集している。管理していた方が亡くなってしまった為、急速に藪化が進む可能性がある。（写真№44・45・46）

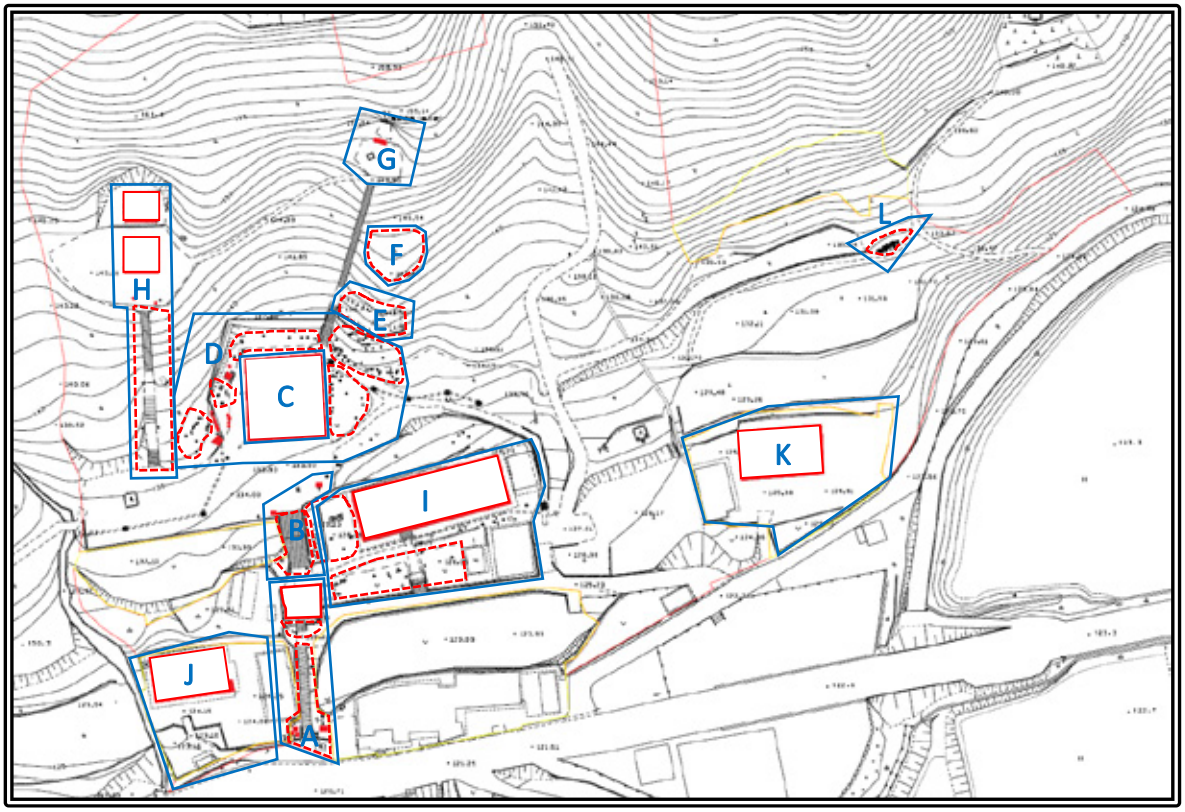
≪主要参考文献≫

・『豊後国田染荘の調査』
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書』
・『くにさきの世界ーくらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996

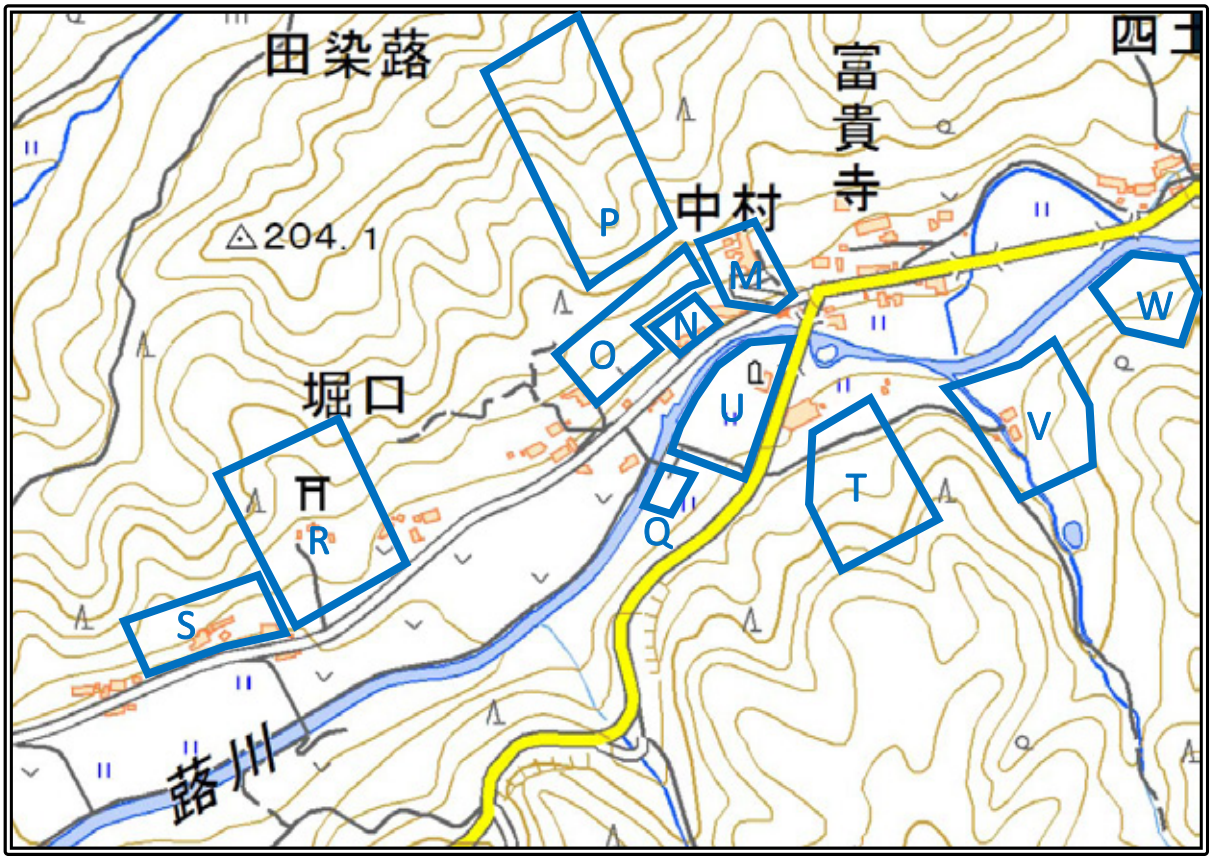
境内位置図



境内拡大図

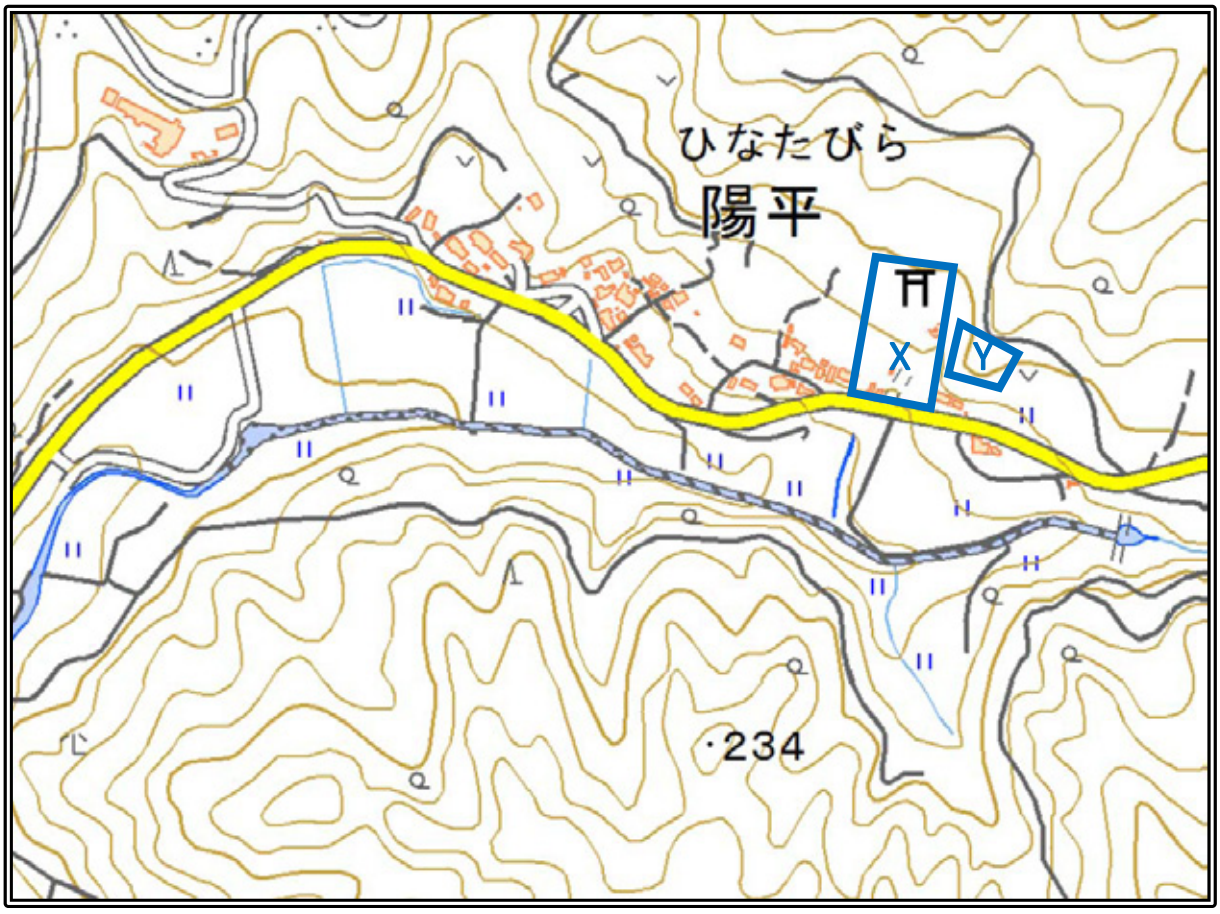


境内周辺図（境内周辺　及び　西側）



（国土地理院地図より引用）

境内周辺図（境内東側）



（国土地理院地図より引用）

文化財の現況・詳細（1）

1：参道

境内地図面：A地点／時期：－

・大堂へと直線的な石段があるが、いつ頃からこの参道を使っていたかは不明。
・中世石造物が多くあるが、地蔵堂から集められたものとされている。
・仁王門は昭和の建物であるが、石造仁王は江戸後期のもの。
・仁王門前にも江戸中期の石造物が数点ある。

2：富貴寺板碑

境内地図面：A地点／時期：延文6年（1361）

・祐禅大徳の七回忌の板碑。
・銘「右志者祐禅大徳／延文六年七月廿五日　敬白／七季忌造立如件」。
・基部が外れ、立て掛けているのみ。
・祐禅大徳は、大堂棟木にも学頭として名前が見られる。

3：十王石殿

境内地図面：A地点／時期：南北朝時代

・正背面に3体ずつ、側面に2体ずつの十王を刻む。桧皮葺・入母屋造を表し、軒口は二重・棰や懸魚までを詳細に造る。十王は浄玻璃鏡・人頭幢まで彫られており、南北朝後期のものと推定される。
・地蔵堂から移設されたと考えられている。

4：六地蔵石幢

境内地図面：A地点／時期：室町初期

・完形の石幢の中では、極めて古いものであると評価される。
・笠の軒口の緩やかな稜線や、蓮弁の彫口から見て、室町初期と推測されている。
・地蔵堂から移設されたと考えられている。

5：石造仁王及び仁王門

境内地図面：A地点／時期：仁王は近世、門は昭和53年

・参道入口から大堂までの中間に江戸中期の作とされる仁王像が存在している。（『寺院差出帳』より）。
・仁王門は建設前の発掘調査で旧仁王門の痕跡が確認された。現仁王門より小さく江戸中後期（『寺院差出帳』に見えない）とされている。
・元禄～宝暦期の石灯篭・供養塔などの石造物が数点確認できる。

6：参道

境内地図面：B地点／時期：－

・大堂へと続く参道の続き。
・石殿や石灯篭などの近世石造物が点在している。

文化財の現況・詳細（2）

7：笠塔婆１　境内地図面：B地点／時期：仁治２年（1242）

・境内の５基で指定をされており、１基は別府市美術館の屋外に移設されている。
・全ての笠塔婆に仁治の銘があり鎌倉中期の作であることが分かる。
・願主は阿仏坊広増で其ノ田板碑と同じく時宗の影響を受けた人物である。
・「右志者極楽浄土也」等の銘から逆修祈願の為の造立である。（『豊後国田染荘の調査』）

8：富貴寺大堂　境内地図面：C地点／時期：平安後期

・富貴寺の信仰の中心。
・宝形造の屋根に、行基葺きの瓦を施す。
・六郷満山の最盛期である、平安時代の様相を今に伝える貴重な遺産の一つ。
・柱や長押・棟木を除けば、多くの部材は創建当時ではなく、差をつけた管理が必要か。

9：富貴寺大堂内部　境内地図面：C地点／時期：平安後期

・全域に壁画（国重文）が描かれ、内陣中央に阿弥陀如来坐像（国重文）が安置される。
・大堂壁画は一部が指定漏れしているとの事である。
・現在、内陣奥に入っての観覧はできない。また、側面の扉のみを開放しており、日光・過度な湿気を防いでいる。
・内陣左奥に調幸実の銘がある棟木と壁画を復元した時のサンプルが置いてある。

10：笠塔婆２～５　境内地図面：D地点／時期：鎌倉中期

・大堂西には、４基の笠塔婆がある。
・いずれも笠塔婆１と同じく、鎌倉中期（仁治～文永）願主広増である。

11：種字石　境内地図面：D地点／時期：鎌倉時代

・大堂西側に位置する巨石に阿弥陀の種字が施される。
・笠塔婆と同じく平彫りで種字を彫り出し、鎌倉時代のものと推測される。

12：十王石仏及び奪衣婆石仏　境内地図面：D地点／時期：南北朝時代

・大堂西側に小型の十王石仏と、そのすぐ隣に奪衣婆石仏が並んでいる。
・参道脇の十王石殿とともに、富貴寺の浄土信仰と深い関わりがあるとされる。

文化財の現況・詳細（3）

13: 国東塔（大小2基）　境内地図面：D地点／時期：大→南北朝～室町初期、小→慶長

・大型の国東塔（市有形）は、蓮弁の彫り方や、屋根の形状から、南北朝期～室町期のものと推定される。
・小型の国東塔は、慶長の墨書があり戒名に禅定門が付すことから武士階級の墓塔として機能していたと推測される。（『豊後国田染荘の調査』）。
・天沼俊一博士の国東塔命名のきっかけにもなった国東塔である。

14: 宝塔・五輪塔部材　境内地図面：D地点／時期：中近世

・種字石背後には宝塔部材や五輪塔が散在している。

15: 弁才天祠など　境内地図面：D地点／時期：近世

・国東塔一帯には、様々な種類の石祠などが散らばっており、富貴寺大堂の多様な信仰を物語っている。

16: 大堂東側の五輪塔群　境内地図面：D地点／時期：中近世

・大堂東側には富貴寺大堂への結縁を求めた人々の五輪塔が大量に分布される。
・場所によっては、部材が固められて安置され、元の様態が分からない。
・一部石祠・石殿のようなものも見られるが、殆どは墓碑として機能したものであると考えられる。

17: 歴代住職の墓　境内地図面：E地点／時期：近世～現代

・五輪塔群の上にある平場には、歴代住職の墓（無縫塔等）が並んでいる。
・位牌型墓碑（元禄11）が最も古く、他の墓碑・墓塔に関しても、ほぼ全てが有銘である。

18: 経筒出土地　境内地図面：F地点／時期：－

・戦後の調査で経筒が出土した場所。
・12世紀の中国北宋の越州窯系の製品を陶製経筒としている。

文化財の現況・詳細（4）

19：奥の院（薬師岩屋）
境内地図面：G 地点／時期：－

・経筒出土地より更に石段を登ると奥の院が存在する。仏像４体（１体は薬師如来、あとは風滅が著しく尊名不詳）を龕に入れ、仏事を行っただろう範囲が直線的な区画をされており、煤のようなものも確認できる。

20：白山社拝殿
境内地図面：H 地点／時期：近世

・富貴寺附属の神社。管理は地元住民になる。
・拝殿天井には、近世に地元の絵師：柏木盛正によって天井絵が描かれる。

21：白山社本殿
境内地図面：H 地点／時期：宝暦 11 年（1761）

・寛延四年の「寺院差出帳」から、当時の覆屋は茅葺で、板壁はなく吹き放しであったと考えられる。
・現在の覆屋は近年の補修により、瓦葺である。
・本殿自体の老朽化は著しい。

22：本堂
境内地図面：I 地点／時期：正徳５年（1715）

・阿弥陀如来坐像（県有形）や木造仮面などの指定文化財が安置される。
・天保八年の「蕗村故事録」から、正徳五年の再建の後より大きく改替がなされていないと考えられる。

23：本堂仏像
境内地図面：I 地点／時期：平安後期

・県指定文化財に指定されている木造阿弥陀如来坐像などが安置される。
・対人・対火センサーがあり、防犯対策がゆきとどいている。

24：木造仮面
境内地図面：I 地点／時期：久安３年（1147）

・本堂キャビネットの中に安置。
・３点で県指定文化財に指定される。
・うち２点（追儺面）には墨書があり、「御修正会」の為に久安年間に作成されたことが分かる。

文化財の現況・詳細（5）

25：庫裡

境内地図面：I 地点／時期：－

・現在は住職家族の居住スペースとなっている。
・「寺院差出帳」における「厨」は、五間三間の建物であるといい、現在の敷地から考えれば、本堂とL字を成していたと考えられている。
・「蕗村故事録」によれば、寛延三年(1750)に建立、天保三年（1832）改修と推定される。

26：本堂前石造物

境内地図面：I 地点／時期：－

・石仏など小型の石造物が配置してある。

27：大門坊跡

境内地図面：J 地点／時期：－

・富貴寺に付随する坊跡。
・茅葺きにトタンの屋根を張った建物が現在も残っている。
・『寺院差出帳』によれば、寛延四年（1751）には、既に百姓屋敷になっていたという。

28：妙蔵坊跡裏五輪塔群

境内地図面：L 地点／時期：中世～

・到津文書の中に、応永期の妙蔵坊下作職に関する記述が見える。
・『寺院差出帳』によれば、寛延四年（1751）には、既に百姓屋敷になっていたという。
・比較的大型で、種字を各輪毎に施した五輪塔を中心に多くの五輪塔が密集している。周辺には３基の板碑も存在する。
・一帯は「上人の墓」との異称でも呼ばれている。

29：清音寺跡

境内地図面：M地点／時期：－

・蕗薹の駐車場入口の桜の木の付近に所在していたとされる。現在ではそれを伝える遺物は存在しない。

30：蕗村庄屋柏木家墓地

境内地図面：N地点／時期：近世～

・蕗政所が所在した辺りが、蕗村庄屋柏木家の庄屋屋敷であり、現在でも子孫の方が暮らしている。
・政所の前面、横長の区画に近世墓が並んでいる。
・西側半分には、蕗村庄屋柏木家の墓碑が集まっており、奥側の龕には石仏が安置される。
・東側には僧名の人物が混ざっているが、柏木家の人物の墓碑が並んでいる。

31：蕗政所

境内地図面：O地点／時期：室町時代～

・蕗村庄屋屋敷跡の裏手に東西に長く堀状遺構が見られる。その最西部には、円形の郭が設けられており、城郭の中心部であったとされている。
・蕗政所は、建武注文などに登場するが、城主は、大堂改修に活躍した調氏や、曽祢崎氏・田原氏などが歴任したと考えられる。
・郭中央には享保銘の石祠が安置されており、伊予国風早郡北条辻小川氏が願主となっている。

32：蕗政所裏板碑

境内地図面：O地点／時期：室町時代

・タケノコを収穫するために一帯の山林を整備したところ、平成25年に発見された板碑・五輪塔。
・坊集落の墓地の形式をとり、板碑は中世である事が確定的である。表面にはキリーク（弥陀）の種字が彫られているが、下部の銘の内容については調査を行い確定させる。

33：妙見社

境内地図面：P地点／時期：－

・蕗政所には山城部があり、妙見社の参道下の辺りに円形の土塁が残されている。
・妙見社は鳥居・石祠などが残されており、現在でも年に１回の祭を行っている。

34：其ノ田板碑

境内地図面：Q地点／時期：建武３年（1336）

・蕗分校の裏手の橋を渡ると２基が立っている。建武三年銘と、願主の名が記されており、時講による信仰が早い内から富貴寺周辺に取り入れられた事が分かる。

35：富貴社

境内地図面：R地点／時期：－

・蕗谷のほぼ中央に位置する。蕗村の村社である。

36：堀口地蔵堂

境内地図面：S地点／時期：－

・巨石を覆う堂である。愛宕勝軍地蔵堂とも称される。

文化財の現況・詳細（7）

37：堀口地蔵磨崖仏

境内地図面：S地点／時期：室町期

・巨石に比丘尼坐像・地蔵菩薩坐像・比丘尼坐像の３体が陽刻される。室町期と想定される。
・板碑は墨書が残るも不明である。

38：南之坊跡

境内地図面：T地点／時期：－

・富貴寺周辺に残る坊跡。
・『寺院差出帳』には、寛延四年（1751）の段階で、南之坊だけが坊の機能を残していた。
・中世石造物が残されており、中世段階の名残も見せる。

39：南之坊跡石造物

境内地図面：T地点／時期：南北朝～

・南北朝期の阿弥陀種字板碑、戦国期の磨崖五輪塔が中世石造物とされる。
・近世では賢清の正徳の一石一字塔などが見られ、宝暦までの坊歴世の墓碑も並ぶ。
・時代はやや降るが、周辺にも墓地が数箇所存在している。

40：中之坊跡

境内地図面：U地点／時期：－

・現在、水田や河川であり、河川改修時の発掘調査の内容でしか当時の様子を知ることはできない。

41：谷之坊跡

境内地図面：V地点／時期：－

・現在は民家となっている。
・裏手には財前一族の墓が並ぶ。小型五輪塔・宝塔部材を除いては、近代のものである。
・民家付近の石垣による区画は坊建築時の様相を今に伝える唯一の素材である。

42：東之坊跡

境内地図面：W地点／時期：－

・富貴寺周辺の坊跡。
・現在では水田や河川となっており坊跡の様子を知ることは難しい。
・五輪塔部材などが数点残されている。

文化財の現況・詳細（8）

43：陽平神社

境内地図面：X地点／時期：－

・富貴寺の東側の陽平集落に所在する神社。
・参道脇には近世初期の石造物が並んでいる。

44：平野薗板碑

境内地図面：Y地点／時期：建武年間～

・陽平神社参道入口より東側の農道から少し登った場所に中世石造物が密集する区画がある。
・『田染荘の調査』で平野薗板碑として３点の中世板碑が報告されているが、一石五輪塔・宝篋印塔部材・五輪塔など中世石造物は多い。
・宝篋印塔部材が残されている付近は四角く区画されており、坊集落の墓の様相を見せる。
・一帯の管理をしていた方が亡くなった為、管理上の問題が近々発生する可能性がある。

45：平野薗板碑

境内地図面：Y地点／時期：建武２年(1335)

・『田染荘の調査』で、平野薗板碑１として報告された板碑。
・地面から離れているが、状態はよく、建（武）二（年）の銘もはっきりしている。

46：平野薗板碑

境内地図面：Y地点／時期：建武４年（1337）

・『田染荘の調査』で、平野薗板碑３として報告された板碑（右）。
・非常に大型の板碑だが、表面が剥離して割れている。
・その他の板碑は、彫刻面が上を向いておらず、銘が読み取れない。

寺院名	伝　乗　寺		寺院番号	②
所在地	大字田染真木			
居住状態	無住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財	木造阿弥陀如来坐像（国有形） 木造四天王立像（国有形） 木造不動明王及び二童子立像（国有形） 木造大威徳明王像（国有形） 真木大堂仁王像（市有形） 真木大堂庚申塔（市有形） 龍泉寺国東塔（市有形） 朝日岩屋・夕日岩屋（国文景）		木造建築	1
			礎石跡等	
			石造物	7
			仏像	5
			美術品	
			古文書	
			その他	1
特筆すべき文化財	・大堂（写真№3）	・板碑（写真№26）		
	・五輪塔（写真№27）	・石幢（写真№28）		
	・宝篋印塔（写真№29）	・石塔（写真№30）		
寺院管理状況	**〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉** ・平成25年度の調査では、宗教法人真木大堂の代表役員である藤本弘治氏にご協力頂いた。藤本氏の協力により、閻魔堂や黒草堂、喜久山岩屋と思われる道路沿いの岩屋跡などの踏査を行った。 ・国指定仏像については、平成19年に国の指示の下で建設した収蔵・観覧施設の中に安置されている。ガラスの仕切りがあり、観覧者は仏像の安置されている部屋には入室できない。 ・古代公園には、周辺の寺院・墓地等で管理ができなくなった石造物が集められており、中には中世石造物も散見される。 ・大堂より金毘羅宮へは参道が整備されているが、手スリや階段の一部に腐食している箇所がみられる。			
寺院史概略	・仁安三年（1168）の「六郷二十八山本中末寺目録」に「馬城山伝乗寺」と記載されるが、この史料の成立は18世紀頃の可能性が強いとされている。 ・安貞二年（1228）の「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録」に記載される「喜久山　本尊丈六ノ金色阿弥陀如来、丈六ノ不動尊、同大威徳、種々勤等中絶云々」が相当すると考えられている。この段階で、すでに「種々勤等中絶」の状況であったことがうかがえる。 ・建武四年（1337）の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」では、「馬城山　限東赤石辻　限西ハエホシ嶽　限南六太郎美尾　限北光広」「近年曾禰崎十郎入道押領」、「良醫岩屋　朝日岩屋　夕日岩屋　聞山岩屋　稲積岩屋　日野岩屋　烏目岩屋　馬城寺末寺也」として記載されており、末寺として７ヶ所の岩屋を知ることができる。 ・元和八年（1622）の『豊後国国東郡人畜改帳』に、真木村に寺ではなく禅門（堂祠）と記載されており大堂が符合すると考えられている。 ・元禄二年（1689）に作成し、天保七年（1836）に書き写した「真木村絵図」には、大堂や桜馬場が描かれている。この絵図に添付された村明細には「寺　壱軒　保寿房　禅宗」との記載が残る。また、『豊州御領覚書』には、真木村に「保寿庵　禅宗　豊後杵築領上沓掛村宝陀寺末」とある。これにより真木村に保寿房（庵）と号する禅宗寺院の存在が知られる。絵図には、寺として大堂が描かれ、明細には「寺一軒」と記載されており、大堂自身が禅宗の保寿房（庵）として存続していた可能性がある。もしくは、別位置に保寿房（庵）は所在しており、その寺院によって大堂は維持されてきたとも思われる。			

寺院現況及び変更点

・平成25年度の調査では、安貞二年（1228）の「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録」に記載がある「喜久山」と呼ばれる現真木大堂からみて北西側の尾根を調査対象として設定した。また、合わせてこの真木大堂を中心に残る各堂跡の現況確認調査を行った。
・平成26年度の調査では、真木大堂の収蔵庫・大堂・金毘羅宮を中心としておこなった。
・伝乗寺の末寺については、日野岩屋（岩脇寺）・烏目岩屋（愛敬寺）・稲積岩屋（慈恩寺）・良醫岩屋・聞山岩屋・朝日岩屋・夕日岩屋である。
・真木大堂に安置される阿弥陀仏・不動明王・大威徳明王は、渡辺文雄氏によると11世紀に遡る可能性が指摘されている。建武四年の注文案に見られる「馬城山」・「馬城寺」と安貞二年の目録に見られる「喜久山」との関連は、喜久山が廃絶したので新しく建立した伝乗寺に移したか、伝乗寺の前身であったと考えられている。富貴寺が浄土信仰を反映した宇佐一族の安寧の場所として建立された寺院であったとすれば、喜久山は天台教理の実践道場として建立されたのであろうと推測されている。
・「馬城山」と「喜久山」の関連について飯沼賢司氏は、「馬城山」から「喜久山」、再び「馬城山」という道筋が考えられるのではと指摘されている。11世紀の造立と考えられる大堂の仏像を安置した「馬城山」は宇佐大宮司家によって建立されるが、治承・寿永の乱や承久の乱によってその援助を失うことで、安貞二年の目録に見える「種々勤等中絶也」の状態となったとみられる。鎌倉幕府によって関東祈祷所となった六郷山は、安貞二年の目録を作成する際に、六郷山寺院として再編した「馬城山」を院に関係した名として憚り「喜久山」と記載したとしている。その後、鎌倉幕府が滅亡し、建武四年の注文案を作成する際には憚る理由が無く「馬城山」と記載されたのではと考えられている。

〈大堂〉（図版③：境内拡大図参照）
・大堂（写真№３）は昭和41年の収蔵庫建設時に現位置に移動したもので、その際に東面していたものを南面としている。正面３間×側面５間の建物で、安永十年（1781）銘の棟板や同年銘の大堂再建に関する角塔婆が残されている。現在、大堂が建つ位置は、昭和初期には畑や溜池が存在していたとされる。また、移築した後で、茅葺きから瓦葺きに葺き替えられている。

〈金毘羅宮〉
・真木大堂西側の馬城山頂には、金毘羅宮（写真№６）が祀られている。文化十五年（1818）に真木村・菊山村・陽平村・薗木村・田ノ口村・大曲村・観音堂村・上野村の氏子によって造立された石祠（写真№８）が残されている。この石祠の前面には、拝殿と考えられる礎石（写真№７）が残されている。また、中腹には安政四年（1857）に寄進された鳥居（写真№５）がみられる。

〈六所権現〉
・金毘羅宮の鳥居の北側に六所権現（写真№９）が隣接している。６基の自然石が祀られているが、昭和43年頃に真木大堂案内所の位置する地点より移動したものである。移動の理由は不明であるが、案内所付近での写真が岩野勝氏によって報告されている。
（豊後高田市における六郷山寺院の信仰と経済的考察について 地図並写真　岩野勝　1970）

〈桜馬場〉
・真木大堂の東側には、桜馬場と呼ばれる直線的な参道（写真№11）がみられる。その東端の北側端に板碑（写真№26）、南側端に石幢（写真№28）が位置していたが、現在は大堂内の古代文化公園に移転されている。2000年に刊行された六郷山寺院遺構確認調査報告書では、板碑・石幢は他所から参道端へと移転したと考えるべきであると指摘されている。

〈喜久山岩屋〉
・真木大堂付近から間戸や小崎へと抜ける道路沿いに岩面が露出している箇所がある。ここに、岩面が抉れている部分があり、この地点が藤本氏によると以前岩屋（写真№12）であったとされる箇所である。岩屋は道路の造成工事によって、やや埋没しているようである。以前は岩屋へ至る細い階段があったという。岩屋内には、板状の自然石が３点程置かれているが、詳細については不明である。
・喜久山岩屋にて祀られていた石造仏（写真№13）は、現在真木大堂内にて保管されている。岩屋の周辺や裏側の山腹を踏査したが、石祠や石造仏は確認できなかった。
・岩屋の背後に岩屋状の抉れを確認した。
・道路の造成工事の際に、十数基の墓碑が出土したということである。現在、岩屋から南側を流れる河川沿いに、寛政二年（1790）や明治期などの墓碑が多数まとめられている。（写真№14）

〈黒草堂〉
・現在は畑地であり、お堂の基礎部分及び不明石造物が２基位置している。（写真№15）

〈閻魔堂〉
・現在、畑地の一角に立地しており、多数の五輪塔部材が集積されている。お堂の礎石等は確認できなかった。（写真№16）
・『田染荘の調査』には、閻魔像・奪衣婆像・地蔵像（写真№17）があり荒木氏墓地に移転していると記載される。荒木氏墓地は随願寺に近接しており、３像を確認することができた。また、山伏が両子に向かってホーラン貝を吹いたという灯明石は確認できなかった。

〈随願寺〉
・真木大堂より県道655号線を300m程南下した地点に位置している。（写真№18）元禄二年（1689）頃の状況を伝えているとされる天保七年（1836）の真木村絵図にも随願寺と思われる堂が描かれている。
・現在、堂の周囲には一石五輪塔や宝篋印塔の笠部材の残欠等が集積されている。
・現在の堂は平成15年に再建されたものである。
・本尊は石造地蔵菩薩立像で、柱には文化十四年（1817）、天保八年（1837）の峯入り銘が墨書される。
・南側隣接地には、板碑型墓碑が一基残る。「当寺中興広修実渭首座禅師　宝永七庚寅年（1710）十二月初八日」とみられる。

〈朝日岩屋〉
・岩屋内に覆屋と石祠が残されている。（写真№19）
・覆屋内には観音立像・坐像（焼仏）・千手観音像（石造）が、石祠内には弘法大師像（石造）が安置されている。（写真№20）

〈夕日岩屋〉
・岩屋内に地蔵菩薩坐像（石造）・地蔵菩薩立像（石造）・尊名不詳立像（石造）・尊名不詳立像（木造）・観音菩薩立像（石造）が、安置されている。（写真№21）

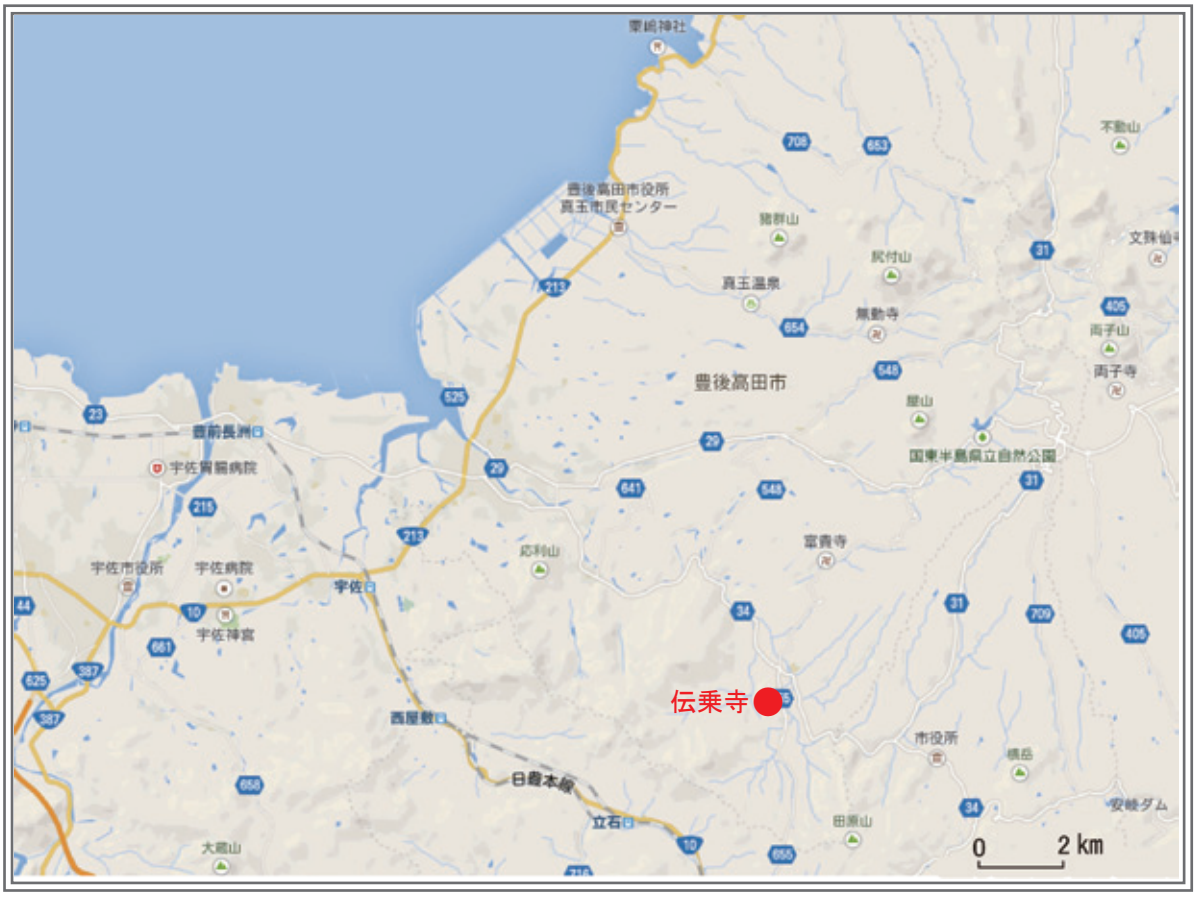
〈良醫岩屋〉
・小崎地区の最奥部に位置する空木集落に「リョウさんが岩」と呼ばれる場所があり、その付近の岩屋と考えられている。この岩屋では、昭和30年代まで木造仏が数体存在していたと伝えられている。（写真№22）

〈古代文化公園〉
・真木大堂の一角において、周辺地区の墓地や寺院などで管理が行えなくなった石造物が移設されている。横嶺の龍泉寺から移設された南北朝期の作とされる国東塔（写真№24）や市指定有形民俗文化財である庚申塔（写真№25）、天正二十年の銘が残る五輪塔（写真№27）などが見られる。その他、天正六年銘の宝篋印塔（写真№29）や中世段階に制作された可能性が考えられる大型の板碑といった様々な石造物が確認できる。

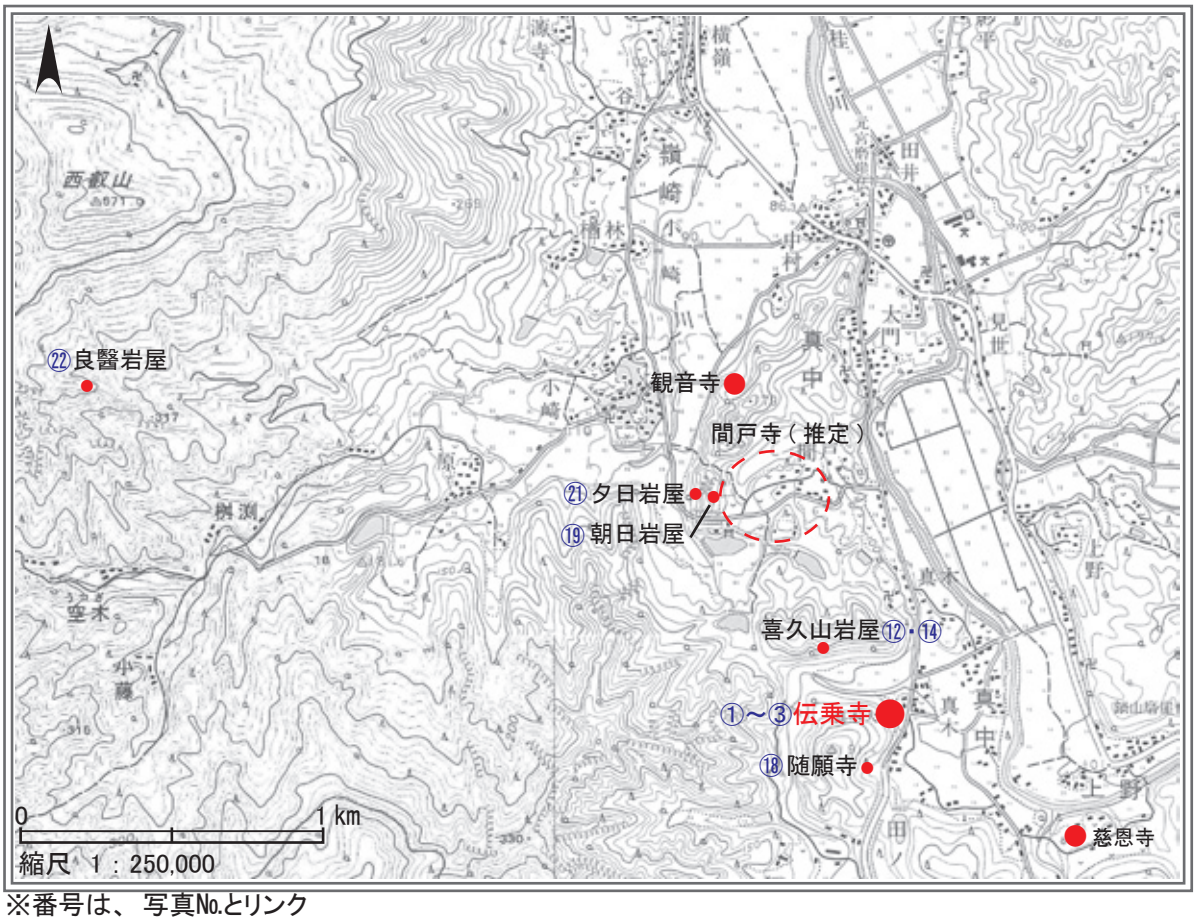
≪主要参考文献≫
・『豊後国田染荘の調査』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第３集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 17 集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1996
・渡辺文雄　1996 「真木大堂とくにさきの仏たち」『くにさきの世界』 豊後高田市
・飯沼賢司　2015 「中世六郷山の組織の成立と展開」『国東六郷山の信仰と地域社会』 同成社

図版①　伝乗寺　位置図

市域位置図

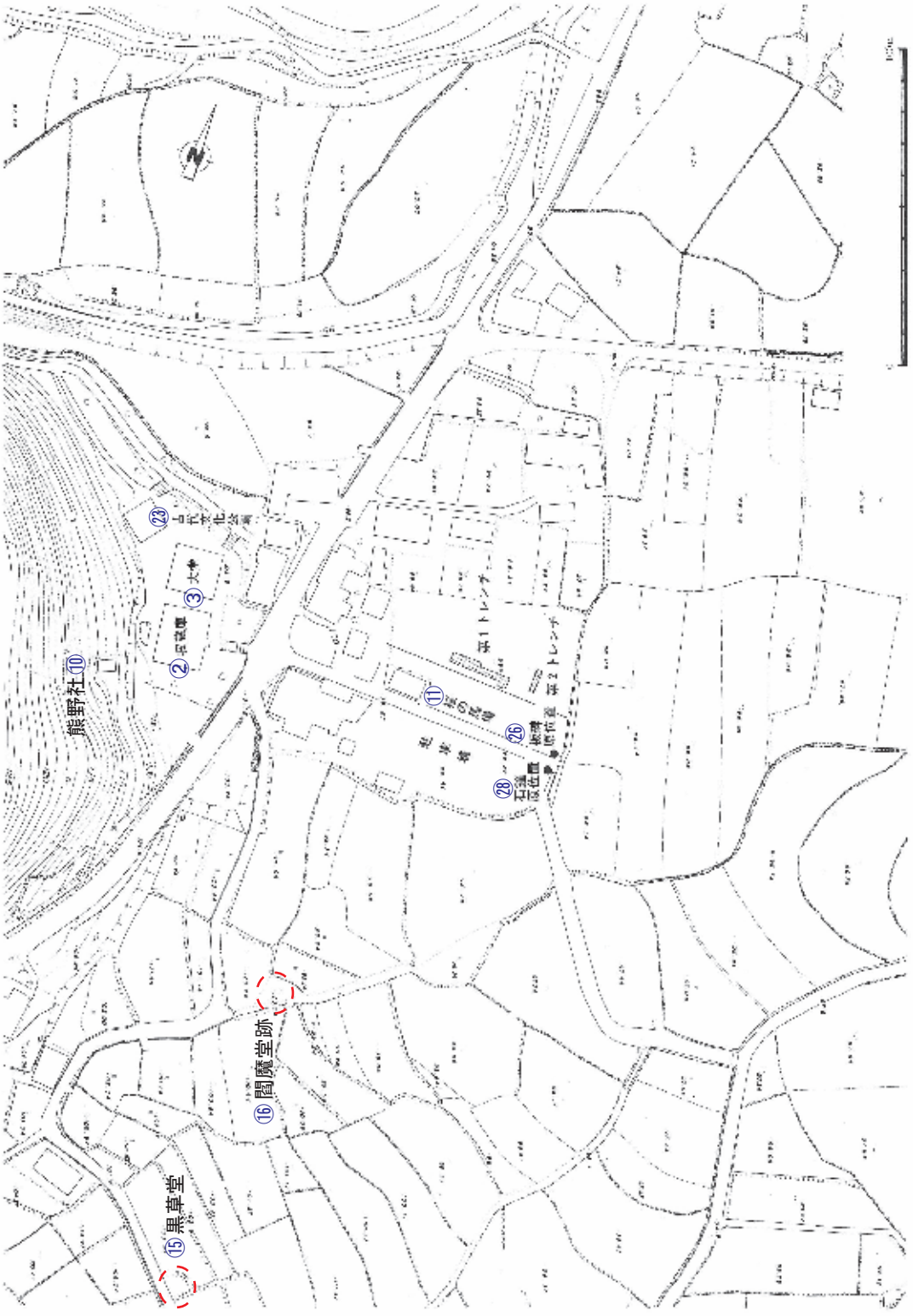


詳細位置図



※番号は、写真№とリンク

図版②　伝乗寺周辺図



伝乗寺周辺図

※番号は、写真No.とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：現真木大堂全景

図版②参照／時期：現代

・収蔵庫及び大堂、鐘楼・熊野社がみられる。

2：収蔵庫

図版②参照／時期：昭和41年

・昭和41年に建設され、平成19年に整備された。
・国指定重要文化財である木造阿弥陀如来坐像・木造四天王立像・木造不動明王・二童子立像・木造大威徳明王像が安置されている。
・いずれも11世紀後半の造立と考えられている。

3：大堂

図版②参照／時期：安永10年

・昭和41年の収蔵庫建設に伴い現位置に移築されている。
・移築時に東面を南面としている。
・移築後に茅から瓦葺きとしている。
・堂内に残る棟板や木造角塔婆から安永十年（1781）に建てられたと考えられている。

4：金毘羅宮参道

図版①参照／時期：現代

・背後の山頂に金毘羅宮、中腹に六所権現が鎮座しており、その参道として整備されている。

5：金毘羅宮鳥居

図版①参照／時期：安政４年

・中腹に安政四年（1857）銘の鳥居が残る。
・寄進者として金高佐平の名が残る。

6：金毘羅宮全景

図版①参照／時期：－

・山頂は平坦面となっており、拝殿の礎石が残る。
・平坦面の左側には手水鉢が残る。

文化財の現況・詳細（2）

7：金毘羅宮拝殿跡

図版①参照／時期：－

・自然礫を使用した礎石が残る。

8：金毘羅宮石祠

図版①参照／時期：文化15年

・山頂に石祠が鎮座し、その前面に狛犬がみられる。
・石祠の右面に文化十五年（1818）の銘が残る。
・寄進者として上野村・真木村・陽平村・薗木村・田之口村・大曲村・観音堂村・菊山村の銘が残る。

9：六所権現

図版①参照／時期：昭和43年

・金毘羅宮鳥居の北側に隣接する。
・本来は案内所の付近に位置していたが、昭和43年頃に移動したものである。

10：熊野社全景

図版②参照／時期：現代

・熊野磨崖仏に隣接する熊野社の御旅所である。

11：桜馬場

図版②参照／時期：現代

・真木大堂より、直線状の参道が残る。
・参道の端部右側に板碑、左側に石幢が位置していたという。

12：喜久山岩屋

図版①参照／時期：－

・近年の道路建設により大きく改変されており、喜久山岩屋として該当するか不明な点が多い。
・昭和61年発行の田染荘の調査で記載されている菊山堂に該当するものであろうか。

文化財の現況・詳細（3）

13:喜久山岩屋石造仏

図版②参照／時期：近世か

・喜久山岩屋の石造仏で、現在真木大堂内に移動している。
・弘法大師像や観音像が残る。

14:近世墓地

図版①参照／時期：近世

・道路建設に伴い集積されたものである。
・寛政二年（1790）～明治期にかけての墓地である。

15:黒草堂

図版②参照／時期：中世

・堂の基礎及び石塔部材が残る。

16:閻魔堂

図版②参照／時期：中世

・堂跡には五輪塔の部材が多量に寄せ集められている。
・閻魔像・奪衣婆像・地蔵像は荒木氏墓地に移動している。

17:閻魔像・奪衣婆像・地蔵像

図版②参照／時期：近世

・閻魔堂に安置されていたが、現在では随願寺に近接する荒木氏墓地に移転している。
・石造で、３体ともに近世であろうか。

18:随願寺

図版①参照／時期：現代

・堂は近年、建て替えられている。
・以前の堂内の左右の柱には峯入りに伴う墨書が残る。左柱に天保八年、右柱に文化十四年である。
・屋外に一字一石塔・一石五輪塔等の石造物が残る。

文化財の現況・詳細（4）

19:朝日岩屋

図版①参照／時期：南北朝期初期

・岩屋内に覆屋と石祠が残る。
・建武注文に馬城寺末寺也と記載される。

20:朝日岩屋石造覆屋内

図版①参照／時期：中世か

・覆屋内には坐像（焼仏）・観音と思われる立像・観音菩薩立像がみられる。

21:夕日岩屋

図版①参照／時期：南北朝初期

・岩屋内に尊名不詳立像（木造）や石造仏が残る。
・建武注文に馬城寺末寺也と記載される。

22:良醫岩屋

図版①参照／時期：南北朝初期

・地元住民が一帯を「りょうさんが岩」と呼んでいる事から、建武注文に記載される「良醫岩屋」の有力な比定地とされた（『豊後国田染荘の調査』）。本尊は薬師如来（『霊場記』）。
・小字「タガイ」に位置することからタガイ岩屋とも呼ばれている。

23:古代公園

図版②参照／時期：－

・真木大堂の一角を古代文化公園としており、近隣の石造物を集積し公開している。

24:国東塔

図版②参照／時期：南北朝期

・横嶺の龍泉寺より移転したものである。
・南北朝期の作と考えられている。

文化財の現況・詳細（5）

25：庚申塔

図版②参照／時期：享保３年

・青面金剛像、鶏２羽、猿３匹が残る。市指定有形民俗文化財に指定されている。

26：板碑

図版②参照／時期：中世

・本来、桜馬場の東端の北側に位置していたものである。
・高さ83cm、幅64cmの安山岩製で、頂部を欠損しており、銘文などは確認できない。
・中世段階まで遡るものであろうか。

27：五輪塔

図版②参照／時期：天正20年

・塔身に「和雲　天正廿壬辰六月一日（1592）」と刻まれる。
・嶺崎の泉源寺に残された位牌に「元寂和雲順公座元禅師尊霊天正廿年壬辰六月一日」と記載された人物と同一と思われる。

28：石幢

図版②参照／時期：室町

・本来、桜馬場の東端の南側に位置していたものである。
・幢身部を欠いている。

29：宝篋印塔

図版②参照／時期：天正６年

・上野の為家家墓地より移転されたものである。
・塔身に「橙粧妙慶禅尼　捐館紹益公禅定門　天正六戊寅」と刻まれる。
・1578年の造立である。

30：石塔

図版②参照／時期：永禄10年

・上野の櫃樋口からの移転である。
・塔身に「経叟笑過　於筑前闘死施主敬白　永禄丁卯八月十五日」と刻まれる。
・1567年の造立である。

寺院名	胎蔵寺		寺院番号	③
所在地	大字平野			
居住状態	有住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財	熊野磨崖仏（国有形・国史跡） 胎蔵寺懸仏（県有形） 石造宝塔（国東塔）（県有形） 胎蔵寺墓地国東塔（市有形）		木造建築	
			礎石跡等	
			石造物	4
			仏像	
			美術品	1
			古文書	
			その他	
特筆すべき文化財	・石造物群（写真№19.20）			
寺院管理状況	**〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉** ・平成25年度の確認調査では、県道に隣接した鳥居より胎蔵寺への旧参道周辺において踏査及び聞き取りを実施した。 ・現在、胎蔵寺へと至る参道に沿うように右側に河川が北流しているが、鳥居付近の入口より下ることができるという。河川に下ると禊場と呼ばれる場所に行き着く。この禊場は、川の中に１名程が座れるやや平らな石があり、峯入り前の僧侶達が身を清める場所であったという。 ・禊場の入口より参道を少し上った地点に、峯入りの僧侶達がホラ貝を吹く際に使用するホラガ石と呼ばれる石が存在している。 ・熊野墓地Ⅰ-C区や熊野墓地Ⅱにおいて、現代の累代墓が新設されている。それにより近世墓碑の配置にかなりの改変が認められる。			
寺院史概略	・養老二年に仁聞菩薩によって開基された伝承がある。 ・安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』には、現在の熊野磨崖仏についての記載がみられる。同目録には「大日ノ岩屋　本尊大日　五丈石身　深山　同尊種子岩切顕給也」「不動ノ岩屋　本尊不動　五丈石身　深山　真明如来ノ自作」と記載される。 ・胎蔵寺の初見は建武四年（1337）『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』中の「本山末寺　今熊野寺」「今熊野岩屋」との記載である。また、同注文案には「限東コケラ佛　限西赤岩　限南尾立　限北稲積不動堂」とその四至も記載されている。 ・近世の作とされる仁安三年（1168）の「六郷二十八山本寺目録」には「本山分末寺　今熊山胎蔵寺」との記載も残る。 ・胎蔵寺の坊跡については、『六郷山定額院主目録』に「今熊山胎蔵寺院主明王院ノ徒八房」と記載されており、坊跡が８ヶ所存在したことが伺える。2000年の調査では、西妙善坊・東妙善坊・六太郎坊・鍛冶屋坊・ミョウゲン坊について、地元にその名称が伝えられ、跡地が報告されている。しかし、明治二年の『満山寺院明細簿』の胎蔵寺の項には、「当山退転之坊中」として「法泉坊・妙現坊・導常坊・中之坊・感応坊・岩本坊・東妙善坊・西妙善坊」と８ヶ所の坊名が記載されている。六太郎坊・鍛冶屋坊は記載されておらず、その差異の要因については不明である			

寺院現況及び変更点

・平成25・26年度の調査成果について、以下①磨崖仏・熊野社周辺、②旧参道及び坊跡、③松本家墓地、④熊野墓地Ⅰ、⑤熊野墓地Ⅱの五つに大別し報告する。

〈①磨崖仏・熊野社周辺〉（図版①、②：詳細位置図、胎蔵寺現況図参照）

・磨崖仏受付より石段までは、整備された参道となる。石段の入口には、神額に「三社大権現」、左柱に享保七年（1722）銘の鳥居がみられる。（写真№６）鳥居の右柱の正・背面の両面に「奉寄進　鳥居一宇」と刻まれている。石段の参道は熊野社へと直線的である。（写真№５）

・現在、胎蔵寺蔵の懸仏や本堂前に位置する仁王像（写真№１）は、明治時代の神仏分離令の際に熊野社から降ろされたものであるという。仁王像の旧位置には、記念碑（写真№７）が残存しており、そこから文久三年（1863）に造立されたことが分かる。

「記念碑銘文
前胎蔵寺　大阿闍梨法印
日音院覧秀
胎蔵寺当住　聖運房仙良
于寺庄屋　生地斉十良俊□
于寺組頭　後藤太左衛門久□
于寺世話人　同　金六久金
同　同　俊三郎久俊
同　同　政四良久成
同　弥四良光久
発起世話人　同　惣左衛門久国
願主常州真壁郡高島村
飯島弥助久末
氏子中
文久三年亥八月　毅旦建」

・懸仏は、如意輪観音・阿弥陀三尊・阿弥陀独尊の三面が残る。その中でも阿弥陀三尊の懸仏には、建武三年（1337）及び「六郷本山今熊野御正躰也」の刻銘が残る。（写真№３）

・熊野社への参道中腹の左側、安山岩の岩肌に大日如来・種子曼荼羅、不動明王・二童子、神像が刻まれている。大日如来は高さ約７ｍで製作年代は平安時代中期と考えられている。種子曼荼羅は大日如来の頭部上面に刻まれているが、追刻と考えられている。不動明王は高さ約８ｍで製作年代は12世紀後半と考えられている。（写真№８・９）

・峯入り行は、磨崖仏前にて開白護摩行を行い開始される。

・熊野社の本殿（写真№11）は、参道を上り詰めた南側の岩肌がやや抉れて岩屋状を呈している部分を方形状に加工し建てられている。本殿の西側には岩肌に沿って石祠や灯篭が配置されている。

〈②参道及び坊跡〉（図版②：胎蔵寺現況図参照）

・県道655号線の熊野社旧参道の入口から、真木大堂側へと約100ｍ程移動した右側にミョウゲン坊跡推定地（写真№12）がある。現在は、駐車場となっており、すぐ南東側には溜池が存在している。周辺を踏査したが、石造物などは確認できなかった。

・参道入口には昭和九年の銘が残る鳥居が位置する。（写真№13）

・鳥居の左側には４基の自然石を利用した庚申塔が存在している。その内２基には、銘文が残る。
①「寛永元年（1624）甲子暦霜月、奉住巌庚申霊塔□宝安置事、右□切□当生戊辰相隆善根現世安穏」
②「寛永十二年（1635）正月八日、奉念待庚申一字如意祈所、我等与衆生皆成仏道、願以比功徳普及於一切」

・参道に沿うように右側には小川が流れているが、鳥居付近より小川へと下ると禊場と呼ばれる場所がある。禊場には、川の中に１名程が座れるやや平らな石があり、峯入り前の僧侶達が身を清める場所だったと聞きとれた。聞きとりでは峯入りであるが、修正鬼会に伴う禊場とも考えられる。（写真№15）

・禊場入口より参道を少し登った地点に、峯入りの僧侶達がホラ貝を吹く際に使用するホラガ石が存在している。平成22～25年の間に、法面より崩落したと思われる。（写真№16）

・ホラガ石から参道を登ると左手に一軒の宅地跡が存在しており、その敷地内で石祠を１基確認した。祠には、「荒熊大明神」と銘があり、祠の側面には昭和五年の銘を確認することができる。（写真№17）

・宅地跡から約40m程参道を登ると、左手側に三軒ほどの宅地が密集している地点がある。その中でも一番奥側の宅地付近で宝塔の塔身と台座と思われる部材を確認した。（写真№18）

・宝塔部材より東側の山腹へと登る道が存在しており、そこで宝塔１基・五輪塔20基程・一石五輪塔３基などが集積されている地点を確認した。（図面：石塔群①で表記）五輪塔内には梵字が彫られているものも確認

できる。（写真№19）
・石塔群①のすぐ上段には、宝篋印塔１基・宝塔５基・宝塔か無縫塔か区別がつかないものが１基の計７基が存在している。（図面：石塔群②で表記）（写真№20）
・参道を入口より約200ｍ程登ると左手側に屋敷の石垣のみが残されている地点がある。地元では、庄屋屋敷と呼ばれており、以前から鍛冶屋坊跡と伝えられている。（写真№21）現在は井戸跡等が確認できる程度である。
・胎蔵寺前の社務所裏において、板碑型墓碑を１基確認し、図面上に追加した。（写真№22）

〈③松本家墓地周辺〉（図版②：胎蔵寺現況図参照）
・地元住民の方の話によると、社務所の南西側の尾根の先端付近に墓地群が形成されており、松本家の墓であるという。よって、今回はその名称を使用し、松本家墓地①・②として報告する。

〔松本家墓地①〕
・現在、大型バス用の駐車場から、道に沿って胎蔵寺へ移動すると、南西の山腹に登る山道が存在している。その尾根の先端付近において元和四年（1618）銘の大乗妙典供養塔１基、時期不明の石殿１基、享保三年（1718）銘の石塔１基、五輪塔１基、石祠１基、板石状の自然石３基を確認した。（写真№23・24）

〔松本家墓地②〕
・松本家墓地①のやや南側の下段に位置しており、６基程の墓碑と石像仏などを確認することができた。墓碑については、笠塔婆型や板碑型である。その銘文は笠塔婆型墓碑が宝暦六年（1756）、板碑型墓碑では延宝七年（1679）とみられる。墓地は全体的に奥まった地点に立地しているためか、やや荒廃している印象を受ける。（写真№25）
・松本家墓地②から北側へ下ると、現在の駐車場がある場所に出る。そこで、石像仏を１基確認し、図面上に追加した。（写真№26）

〈④熊野墓地Ⅰ〉（図版③：熊野墓地実測図参照）
・熊野墓地Ⅰは、県道655号線から胎蔵寺に向う車道に入り、約350ｍ程移動した南側の山腹に立地している。以下、A～E区に大別してその現況を報告する。

◎Ａ区
・1700年代以降の墓碑が集中している。以前と比較しても大きな変更点はみられない。（写真№27）

◎Ｂ区
・A区同様に1700年代以降の墓碑が存在している。（写真№28）B区のやや上段の斜面部に⑥延宝五年（1677）銘の地蔵浮彫型墓碑が立地している。（写真№29）
・B区については、他の区と比較すると荒廃している印象を受ける。

◎Ｃ区
・以前の図面と比較すると大きく変化している。⑦の位牌型墓碑が立地していた場所に、現代墓が新しく立地している。また、C区の全体がｺﾝｸﾘｰﾄで固められており、周辺の石造物に関しては集積され、整然と並べられている。（写真№30）
・整然と並べられた中に、⑦元禄四年（1691）銘の位牌型墓碑（写真№31）と⑨元禄十年の（1697）銘の板碑型墓碑（写真№32）が立地している。

◎Ｄ区
・中央の逆三角形状の高まり部分に、墓地内で最も古い中世段階の墓碑が展開している。（写真№33）
・①応安八年（1375）銘の国東塔（写真№34）は、その中央部に位置している。この国東塔の周囲に以後の石造物が確認されることから、墓地として国東塔を起点として展開したものと考えられている。現状は、以前の写真や図面と比較しても大きな変更点はみられない。
・①国東塔の北東側に③天文六年（1537）銘（写真№35）と④天文十年（1541）銘（写真№36）が確認できる石殿型墓碑が２基位置している。この２基も移動や倒壊などの変更点はみられない。また、周辺には五輪塔を中心に40基ほどの石塔物が密集して位置している状態である。

◎Ｅ区（胎蔵寺墓地）
・Ｄ区南側の一段高くなった地点に胎蔵寺墓地が立地している。（写真№37）
・Ｅ区のほぼ中央に②大永七年（1527）銘の胎蔵寺国東塔（写真№38）が位置している。目立った欠損や位置の移動等はみられない。
・②国東塔の南西側奥に⑤天正十五年（1587）銘（写真№39）を含む３基の国東塔と石殿１基が確認できる。また、そのすぐ東側に⑧元禄十五年（1702）銘の位牌型墓碑（写真№40）が位置している。
・E区東側においては、宝篋印塔や近世段階の無縫塔・五輪塔など多数の石塔物が集中している。全体的にみても大きな変更点はみられない。

〈⑤熊野墓地Ⅱ〉(図版④:熊野墓地実測図参照)

・熊野墓地Ⅰより胎蔵寺へと至る道路を挟んで北西側に位置している。こちらもA～F区に大別し、現況を報告する。

◎A区

・熊野墓地Ⅱは北端であり、南北約20m×東西約20m程の高まり部分に立地している。1700年代以前の位牌型墓碑等も確認できるが、基本的には近世～現代の墓碑によって形成されている。また、北側の斜面地においては、墓石の台座部分が傾くなど荒廃している。

◎B区

・A区西側の一段下がった地点に立地している。近代～現代の墓碑が主体であるが、中には近世段階の位牌型墓碑などが確認できる。また、近年建て替えられたと思われる現代墓が1基存在している。

◎C区

・B区の西側下段に南東から北西方向に細く延びる平坦面が形成されており、その平坦面に墓碑が４基ほど存在している。享保十一年（1726）銘が確認できる笠塔婆型墓碑や享保七年（1722）銘の位牌型墓碑などがみられる。また、B区から倒壊・落下したと思われる墓碑もみられる。（写真№41）

◎D区

・A区の南側下段に位置しており、以前の図面と比較するとやや配置の変更が認められる。寛政二年（1790）銘や享保六年（1721）銘が見られる位牌型墓碑や石像仏などが確認でき、時期としては近世段階が主体である。（写真№42）

◎E区

・以前はE区全体に、位牌型墓碑・胴型墓碑・天蓋付地蔵浮彫型墓碑等が存在していたようである。しかし、現在は現代墓がF区～E区の間に２基、E区自体に３基の現代墓が建てられている。以前、広い範囲に展開していた墓碑などは、一箇所に集積し並べられている。

◎F区

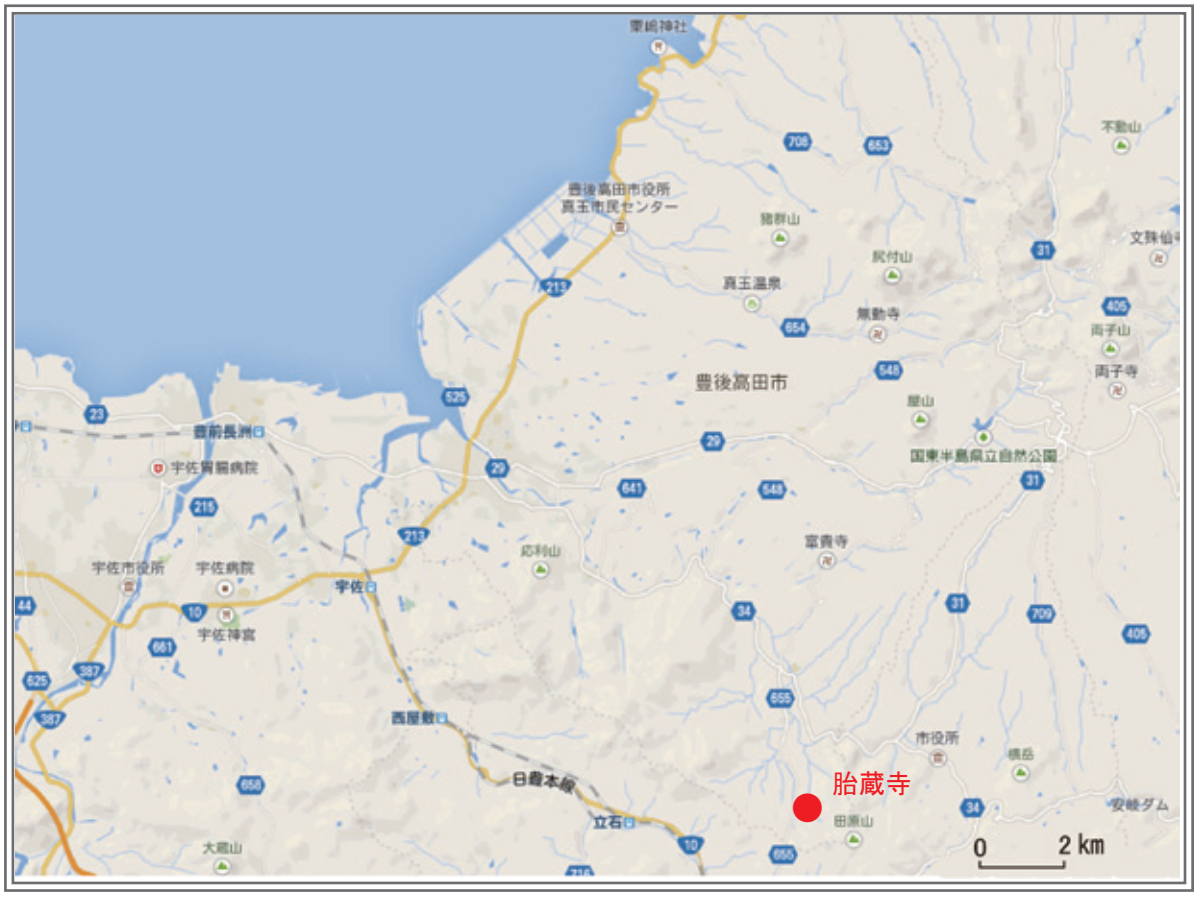
・以前からある位牌型墓碑や地蔵型墓碑などには大きな変更点はみられないが、熊野墓地Ⅱへの入口付近に現代墓が１基建てられている。

≪主要参考文献≫

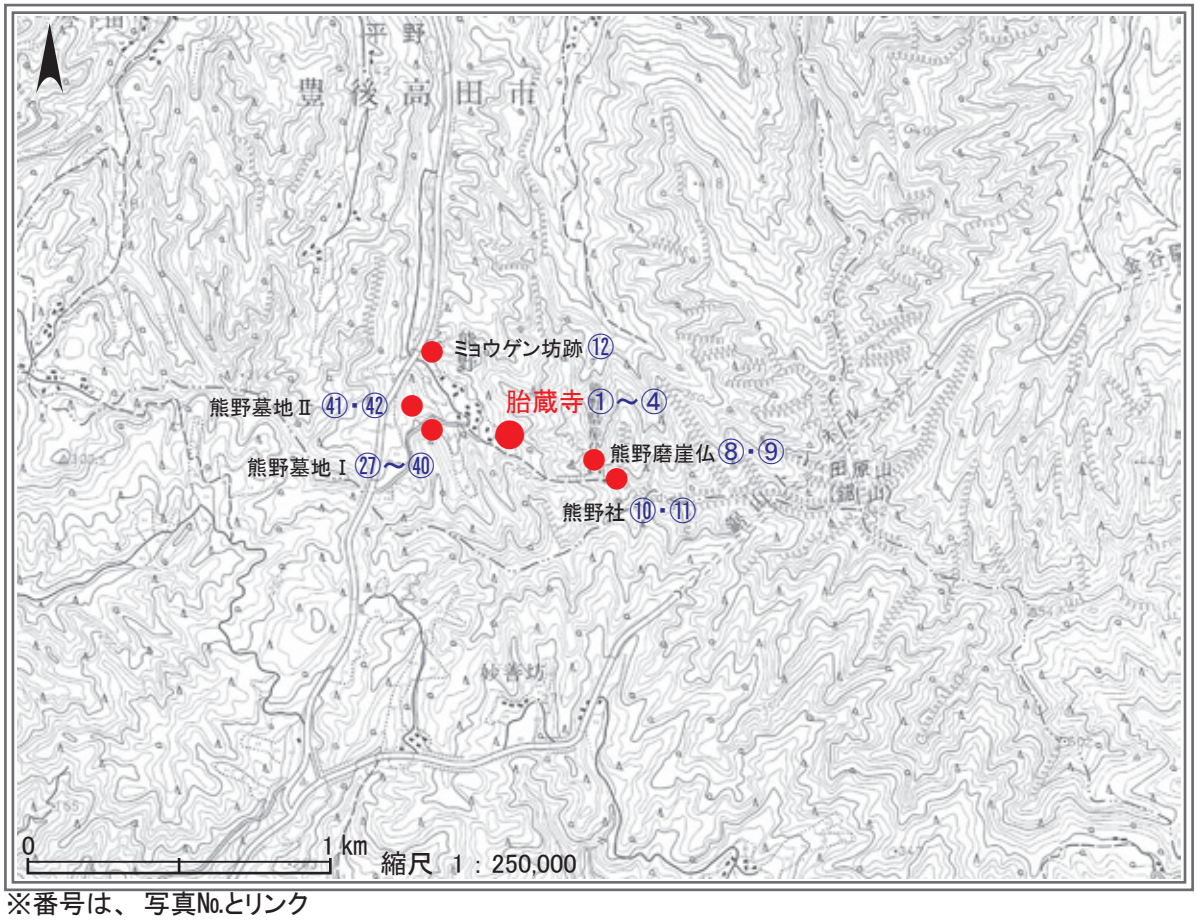
・『豊後国田染荘の調査』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第３集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅴ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 19 集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1997
・『くにさきの世界ーくらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996
・『六郷満山関係文化財総合調査概要ー豊後高田市・真玉町・香々地町の部ー』 大分県文化財調査報告書　第 37 輯　大分県教育委員会　1976

図版①　胎蔵寺 位置図

市域位置図

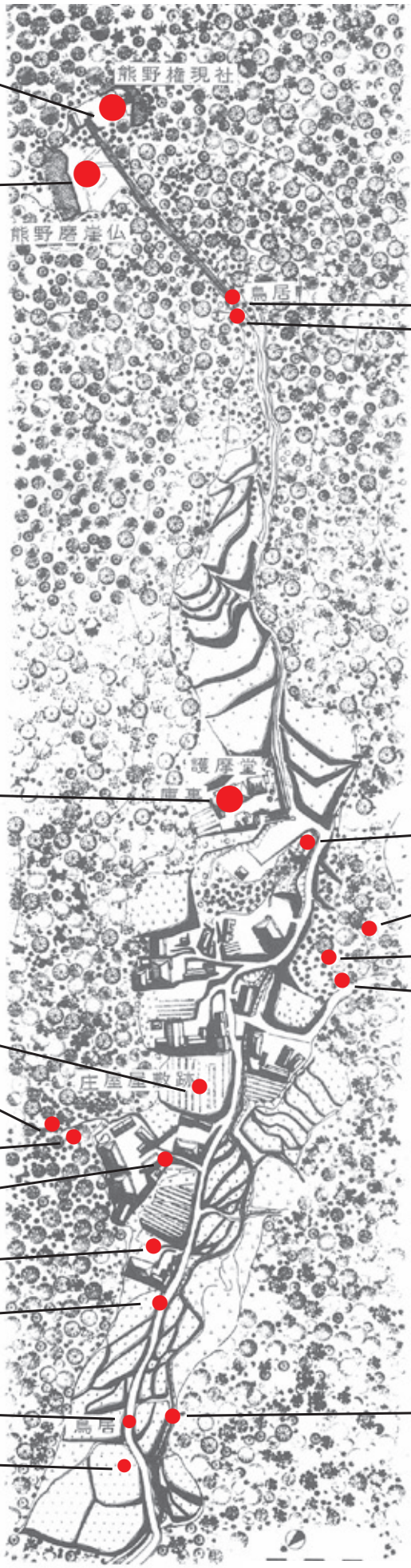


詳細位置図



※番号は、 写真No.とリンク

図版②　胎蔵寺現況図



熊野権現社 ⑩・⑪

熊野磨崖仏 ⑧・⑨

鳥居 ⑥

記念碑 ⑦

胎蔵寺 ①～④

板碑型墓碑？ ㉒

松本家墓地② ㉕

松本家墓地①㉓～㉔

石造仏 ㉖

庄屋屋敷（鍛冶屋坊跡）㉑

石塔群② ⑳

石塔群① ⑲

宝塔残欠 ⑱

石祠 ⑰

ホラガ石 ⑯

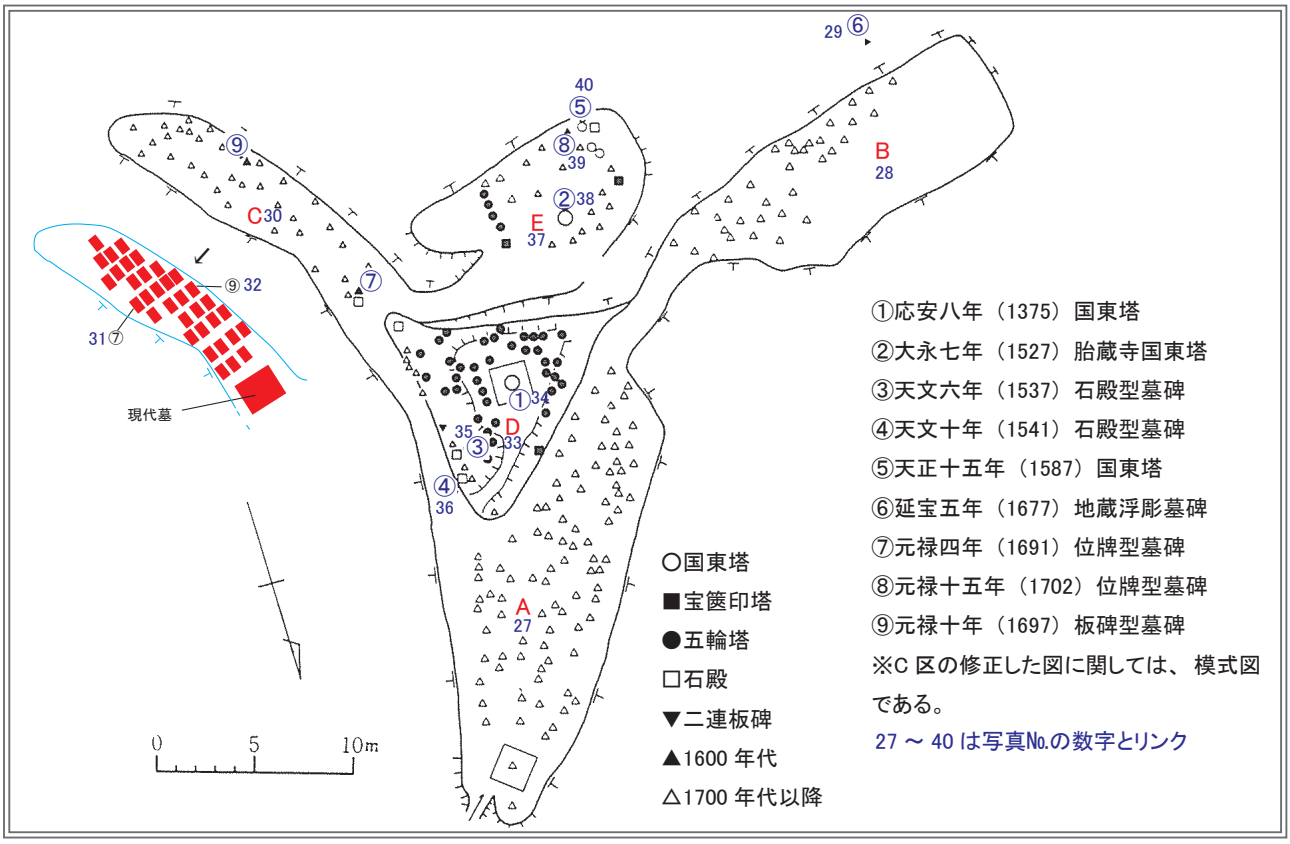
鳥居 ⑬

庚申塔群 ⑭

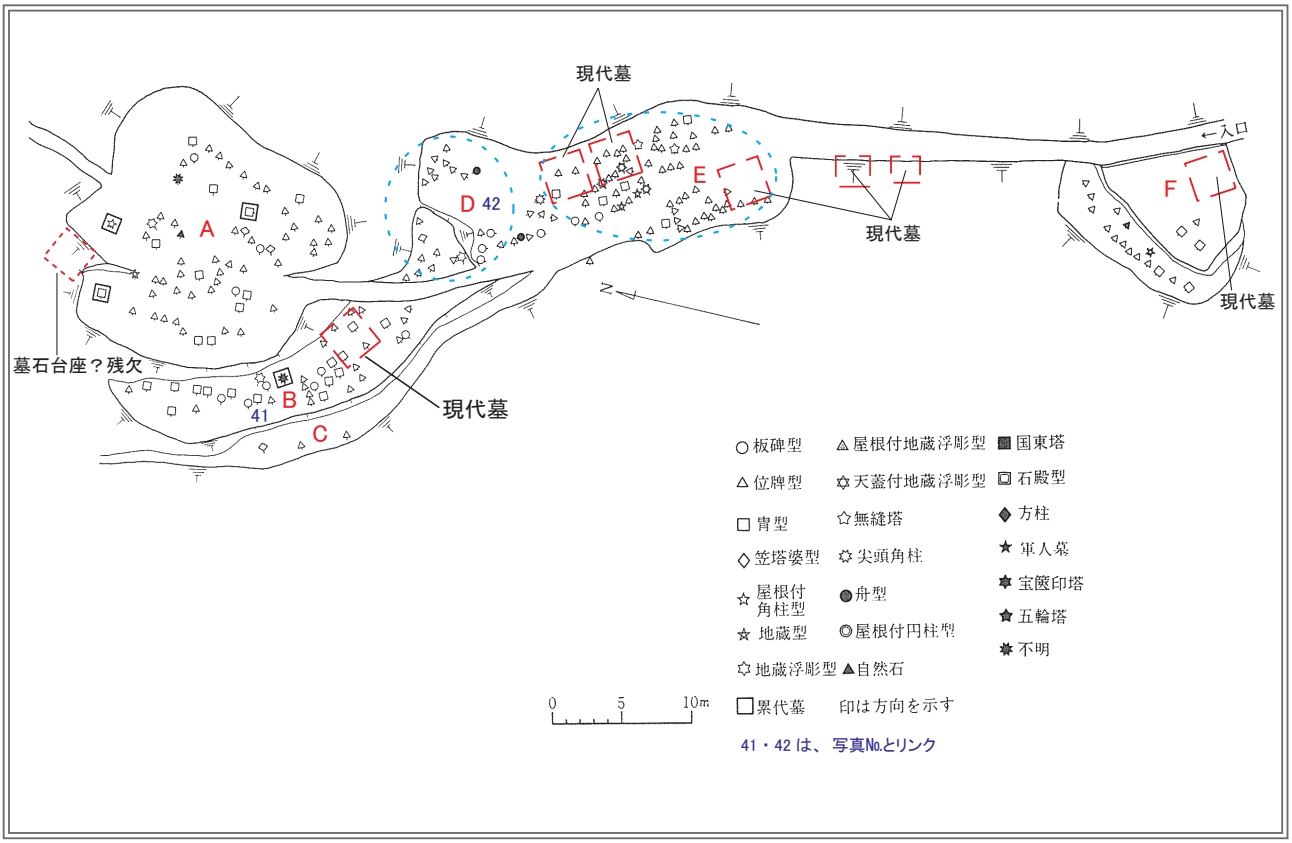
禊場 ⑮

※番号は、写真No.とリンク

図版③ 熊野墓地Ⅰ　実測図



図版④ 熊野墓地Ⅱ　実測図



文化財の現況・詳細（1）

1：胎蔵寺全景

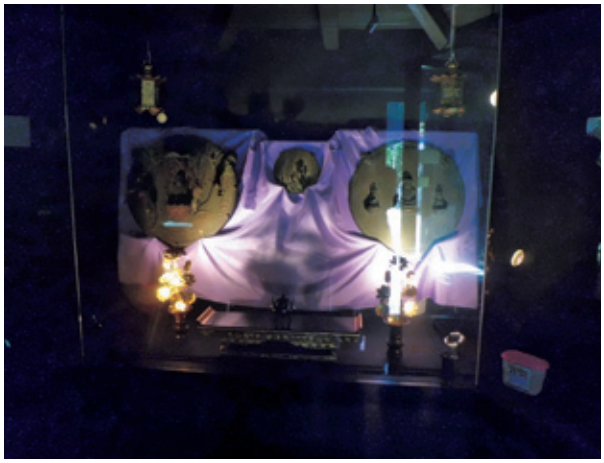
図版②参照／時期：現代

・本堂・護摩堂がみられる。明治15年の「寺院明細牒」には、本堂以外に阿弥陀堂と記載されている。現在阿弥陀堂は存在しておらず、その跡地に護摩堂が建てられたと考えられている。
・仁王像については、神仏分離令の際に熊野社参道より降ろされており跡地には記念碑が残る。

2：本堂全景

図版②参照／時期：－

・本堂・庫裡が一体化している形式で、昭和50年代にトタンによって茅葺きの屋根を保護している。特に庫裡は明治期より手を加えておらず古い様式を残している。水道がなく、不便なため現在生活等はしていない。



3：懸仏

図版②参照／時期：建武４年

・所謂御正体であり、胎蔵寺には３面が本堂西の収蔵庫に安置される。建武四年の銘があり、願主倉成道妙、大勧進金剛仏子興済以下、制作に携わる人々の様態がよく分かる。県指定有形文化財。

4：本堂前石造物群

図版②参照／時期：近世

・宝塔や庚申塔、石仏などが並んでいる。

5：熊野社参道

図版②参照／時期：－

・熊野社まで直線的な石段による参道が延びる。
・手スリが整備されるが、石段は欠落やスベリやすい箇所が存在する。

6：熊野社鳥居

図版②参照／時期：享保７年

・神額に「三社大権現」、左柱には「享保七年（1722）施主後藤太良兵衛□久」の銘文が残る。右柱には「奉寄進　鳥居一宇」の銘文が、正・背面の２面に見られる。

7：記念碑

図版②参照／時期：文久３年

・鳥居の前面に位置する、仁王像造立の記念碑である。仁王像は明治期に胎蔵寺境内へと移設されている。
・記念碑から文久三年（1863）に、仁王像が造立されたことが分かる。

8：不動明王像

図版②参照／時期：12世紀後半

・高さ約８ｍで、大日如来より浅い彫りとなる。12世紀後半頃の製作年代が考えられている。

9：大日如来像

図版②参照／時期：平安中期

・高さ約７ｍで、頭部はしっかりと彫られている。頭部の上方には、種子曼荼羅が刻まれるが、追刻と考えられている。曼荼羅はその内容から不動明王の造立時期と近いのではと考えられる。
・平安中期頃の作と考えられる。

10：熊野社拝殿

図版②参照／時期：近代

・石段を上りつめた南側に位置しており北面する。

11：熊野社本殿

図版②参照／時期：近代

・やや抉れている岩肌を方形状に成形し本殿を収めている。
・本殿右側の石灯篭には、「享保六年（1721）　松本武左衛門」の銘文が残る。

12：ミョウゲン坊跡

図版②参照／時期：－

・周囲を踏査したが、石造物等については確認できなかった。

文化財の現況・詳細（3）

13:参道鳥居

図版②参照／時期：昭和９年

・参道入口に、昭和九年銘の鳥居が残る。熊野社の神額が残る。

14:庚申塔群

図版②参照／時期：近世

・右側の2基には銘文が残るが、左側の2基は風化しており判読できなかった。

15:禊場

図版②参照／時期：－

・参道の右側には小川が流れており、鳥居付近より下ると禊場に至る。
・禊場は、川の中に１名程が座れる平らな石があり、その上で峯入り前の僧侶が、身を清める場であったと聞きとれた。
・峯入りではなく、修正鬼会とも考えられる。

16:ホラガ石

図版②参照／時期：－

・鳥居を過ぎて参道を進むと、左側にホラガ石が位置している。峯入りの時に、この石に僧侶が足を掛けてホラ貝を吹く場所である。
・現在、法面より崩落している。平成22～25年の間と思われる。

17:石祠

図版②参照／時期：昭和５年

・ホラガ石より参道を進むと左側に宅地跡が位置しており、屋敷荒神が１基残されている。
・石祠で正面に「荒熊大明神」、側面に昭和五年と彫られている。

18:宝塔残欠

図版②参照／時期：中世か

・石祠よりさらに参道を進むと、３軒の宅地へと至る。その奥の宅地付近にて、宝塔の塔身と台座と考えられる部材を確認した。

19：石造物群　図版②参照／時期：中世

・宝塔の部材より東側の斜面上に五輪塔・一石五輪塔・宝塔を確認した。
・五輪塔には梵字が彫られているものも存在している。

20：石造物群　図版②参照／時期：中世

・五輪塔群の上段に宝篋印塔・宝塔が直線的に安置されていた。

21：鍛冶屋坊跡　図版②参照／時期：近世

・庄屋屋敷と呼ばれており、現在では井戸が残るのみである。

22：板碑型墓碑　図版②参照／時期：近世

・熊野磨崖仏受付の側面において板碑型墓碑を１基確認した。

23：松本家墓地①　図版②参照／時期：元和４年

・元和四年（1618）銘の大乗妙典供養塔及び時期不明の石殿１基を確認した。

24：松本家墓地①　図版②参照／時期：享保３年

・大乗妙典供養塔の背後に享保三年（1718）銘の石塔・五輪塔・石祠・板石状の自然石を確認した。

文化財の現況・詳細（5）

25：松本家墓地②　図版②参照／時期：延宝７年

・松本家墓地①の南側下段に位置する墓地である。
・板碑型墓碑については延宝七年（1679）、笠塔婆型墓碑については宝暦六年（1756）銘がみられる。

26：石造仏　図版②参照／時期：－

・自然石に尊称不明の仏が刻まれている。

27：熊野墓地Ⅰ－Ａ区　図版③参照／時期：近世

・1700年代以降の墓碑群が位置している。
・墓碑は位牌型が主体となる。

28：熊野墓地Ⅰ－Ｂ区　図版③参照／時期：近世

・1700年代以降の墓碑群が位置している。
・墓碑は位牌型が主体となる。

29：地蔵浮彫墓碑　図版③参照／⑥の墓碑時期：延宝５年

・延宝五年（1677）の銘が残る地蔵浮彫型墓碑である。

30：熊野墓地Ⅰ－Ｃ区　図版③参照／時期：近世

・現代の累代墓が新しく建てられており、それまでの墓碑は集積されて整然と並べられている。
・位牌型墓碑が主体となる。

31：位牌型墓碑　図版③参照／⑦の墓碑時期：元禄４年

・元禄四年（1691）銘の板碑型墓碑である。

32：板碑型墓碑　図版③参照／⑨の墓碑時期：元禄10年

・元禄十年（1697）銘の板碑型墓碑である。

33：熊野墓地Ⅰ－Ｄ区　図版③参照／時期：中世

・熊野墓地内で最も古い中世段階の墓碑が展開している。
・国東塔の北東側に五輪塔を中心とした石造物40基程が残る。

34：石造宝塔（国東塔）　図版③参照／①の墓碑時期：応安８年

・Ｄ区の中央部に応安八年（1375）銘の国東塔が残る。
・県指定有形文化財である。

35：石殿型墓碑　図版③参照／③の墓碑時期：天文６年

・「天文六年（1537）五月十八日　施主敬白」銘の石殿型墓碑である。

36：石殿型墓碑　図版③参照／④の墓碑時期：天文10年

・「天文十年（1541）三月一日　道浄」銘の石殿型墓碑である。

37：熊野墓地Ⅰ－Ｅ区

図版③参照／時期：中世

・Ｄ区南側の一段高くなった地点に胎蔵寺墓地は位置している。
・Ｅ区の東側には、宝篋印塔・近世段階の無縫塔・五輪塔が位置している。

38：国東塔

図版③参照／②の墓碑時期：大永７年

・Ｅ区（胎蔵寺墓地）のほぼ中央に「法印忍秀大永七年（1527）八月十七日」銘の国東塔が残る。
・市指定有形文化財である。

39：国東塔

図版③参照／⑤の墓碑時期：天正15年

・「天正十五年（1587）浄妙融」銘の国東塔と隣接して石殿１基が残る。

40：位牌型墓碑

図版③参照／⑧の墓碑時期：元禄15年

・元禄十五年（1702）銘の位牌型墓碑である。

41：熊野墓地Ⅱ－Ｃ区

図版④参照／時期：享保7年から享保11年

・享保七年（1722）銘の位牌型墓碑や享保十一年（1726）銘の笠塔婆型墓碑が残る。

42：熊野墓地Ⅱ－Ｄ区

図版④参照／時期：享保６年

・享保六年（1721）銘や寛政二年（1790）銘の位牌型墓碑や石造物が確認できる。

寺院名	高　山　寺		寺院番号	④
所在地	西叡山（大字佐野・小田原・嶺崎）			
居住状態	無住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財	木造聖観音菩薩立像（県有形）		木造建築	
			礎石跡等	1
			石造物	4
			仏像	1
			美術品	
			古文書	
			その他	
特筆すべき文化財	・落水権現祠（写真№3）	・落水権現周辺石造物（写真№5）		
	・H地点礎石跡（写真№11）	・五輪塔群（写真№14）		
	・L地点石造物群（写真№15）			
寺院管理状況	**〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉** ・聞き取り調査及び現地踏査には、小田原地区在住の小川富太郎氏に協力して頂いた。 ・昭和59年の調査の際に土器が採集された地点（図版②A・B地点）の詳細な位置について、当時の調査に同行していた小川氏によって正確に把握することができた。B地点について小川氏によれば、以前山芋掘りをした際に多量の土器が出土したため、掘削を中止したということである。 ・落水権現の石祠前（図版②C地点）では、『オコモリ』と呼ばれる祭りを地区住民で行っていたということである。時期は9月頃で、酒などを持ち寄り、落水権現の祠の前で一晩過ごしたということである。 ・山頂付近にある現高山寺から500m程下った地点に、「千人塚」と呼ばれる礫が塚状に集積された地点が存在している。以前から「千人塚」と呼ばれていたということである。 ・現在『西叡山高山寺跡』の石柱がある地点（図版②F地点）には、大正時代頃まで建物が存在していたそうである。また、この高山寺跡から20～30mほど下った地点に湧水地が存在するということである。			
寺院史概略	・西叡山高山寺は、豊後高田市南部の西叡山の中腹に存在したとされる寺院であり、現在の高山寺とは別の位置に立地していたとされる。『豊後国志』には、「旧七堂伽藍あり。堂宇荘厳、今廃す。礎石堂存ず。」とある。 ・高山寺の名称の初見は、仁安三年（1168）の『六郷二十八山本寺目録』における「西叡山高山寺」の記載である。 ・安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』には、「高山寺　本尊薬師如来并観音菩薩」「於六所権現御寶前、二季祭五節供等」と記載されており寺院として機能していたことが想定される。 ・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には、「高山　當寺領小田原助入道押領」と記載されており、小田原氏によって寺領を押領されている。 ・正和二年（1313）の『鎮西下知状案』に残る「同山領高山法花□田」の記載や、康永三年（1344）の『田染荘糸永名惣帳案』には「高山免」と見られるが、その史料は少ない。 ・『太宰管内志』所収の『六郷山定額院主目録』には、「高山ノ養老寺院院主寶宅院ノ徒四五房分同徒山廿五ヶ所」とあり相当の規模であったことが示唆される。しかし、養老院あるいは寶宅院の位置などについては不明である。			

寺院現況及び変更点

・高山寺周辺の調査内容について以下に報告する。(図版②：高山寺現況図参照)

〈A地点〉
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』に報告されている地点であり、土器片が採取されている。現在では、造成工事により旧地形の具体的な姿は確認できない。地図上からA地点を復元すると、この平坦面の北側端部から、その下段の雑木林周辺と考えられる。この周辺において石造物や礎石跡等は確認できなかった。また、A地点からやや北側に下ったF地点周辺の雑木林一帯が、報告されているA地点に該当する可能性が高いと思われる。（写真№１）

〈B地点〉
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』に報告されている地点である。今回の調査に同行して頂いた小川氏は、昭和59年の調査に立ち会っており、B地点については位置を正確に把握することができたと考えられる。このB地点では、数段の平坦面が確認できるが、その面積は狭小である。周辺には竹林が群生しており、土器等の遺物は確認できなかった。しかし、小川氏から、以前この地点で山芋掘りをした際に多量の土器が出土したため掘るのを中止したとの話を聞くことができた。（写真№２）

〈C地点　落水権現〉
・落水権現は、B地点より西側に移動した尾根の先端部に位置している。やや広い平坦面を有しており、その北端部に北側を正面にして石祠が立地している。（写真№３）この石祠の横に、五輪塔と思われる部材や、宝塔の宝珠部材、将棋板の形をした石造物などが置かれている。（写真№４.５）石祠には享保及び天明年号が確認できるため、18世紀後半のものと思われる。この権現では、以前は『オコモリ』と呼ばれる祭りが９月頃に行われており、周辺の地区の住民が、酒などを持ち寄り、一晩を過ごしたという。
・このC地点付近にあるとされる落水観音については、今回の調査では確認できなかった。

〈D地点　千人塚〉
・現高山寺の駐車場から車道を500ｍ程下った地点の西側が千人塚と呼ばれている地点である。南側から北西方向へと緩く傾斜する立地であり、自然礫による塚状の石積が、４～６基程確認できる。崩壊しているものを含めれば、少なくとも10基以上の塚が想定される。この千人塚の西側には、高山寺への旧道が存在している。（写真№６）

〈E地点〉
・この地点は、豊後高田市郷土研究会の橋本元徳氏が昭和51年に刊行された『西叡山高山寺』中に記載された地図を参考に復元したものである。橋本氏によると、この地点には民家跡・井戸・座禅石が存在しているとされている。同行していただいた小川氏は、この民家跡や座禅石については聞いたことがないということだった。調査の結果、A地点から道路を挟んだ南側の斜面地において、大型の扁平な巨石を確認した。しかし、その周辺が造成工事を受けている事や、調査対象地点は地図上より復元・想定したものであり詳細は不明である。（写真№７）

〈F地点〉
・現在『西叡山高山寺跡』の石柱が立っている地点である。（写真№８）以前は、ここに建造物があり、大正時代までは存在していたとされる。また、昭和10年には石原巡仁氏によって仮堂が建設されたが、戦後すぐ石原氏が亡くなると建物も倒壊したとされている。小川氏によると、この地点の東側を通る車道の建設工事の際には、焼土及び炭化物などが確認されたという。
・1975年に、この周辺で調査が行われ礎石が確認されている。西叡山寺床遺跡（仮称）とされ、実測図も残されている。この礎石が仮堂に伴う礎石か、別の建物に伴う礎石かは不明である。今回の調査では、枯葉等による埋没が著しく、F地点周辺においてそれらしい遺構を確認することはできなかった。
・F地点東側の車道から20～30ｍ程東側へ斜面を下った先に湧水地が存在していたらしいと小川氏から伺ったが、確認できなかった。

〈G地点〉
・非常に緩やかな斜面地である。石垣が一部残存しており、小さな平坦面が形成されている。（写真№９）このG地点と車道の間には、清滝から続く登山道の痕跡がわずかに残されている。また、周辺ではD地点（千人塚）のような礫の集石を数基確認した。（写真№10）

〈H・I・J地点〉
・車道と清滝からの登山道の合流地点付近において、面積は狭いが６段程度の平坦面を確認した。この平坦面上から礎石跡（H）と思われる遺構を確認した。(写真№11)３基の扁平礫が、面及び軸をそろえて配置されていた。扁平礫は平坦面の北側に位置しており礎石として中央から南側へと展開するであろうが、残念ながら確認できなかった。

・礎石跡（H）から北側へ移動すると橋本氏が報告している池跡（J）がある。（写真№13）現在は、空池の状態である。
・礎石跡（H）と池跡（J）の中間地点には、清滝の方へと下る登山道がある。この登山道を下って行くと、石列により区画された場所（I）があり、近くに境界石と呼ばれる石積が確認できる。（写真№12）この石列が、どのような用途を兼ねていたのかは不明であるが、土地の境界や石垣のように土留めの役割を果たしていた可能性は十分に考えられる。また、清滝側へと登山道をさらに下ったが、その他石造物等は確認できなかった。

〈K・L地点〉
・県道34号線から、現高山寺へと向う車道へ入り、約300m程登ると右側に細い林道がある。その林道を進むと稲荷宮があり、そのすぐ先に五輪塔群（K）が位置している。（写真№14）小川氏によると、以前の圃場整備に伴い、山裾近辺の集落にあったものを一箇所にまとめたものということである。また、この五輪塔群から斜面を北西に下ると十王像他石造物群（L）が立地している。（写真№15）石像仏以外にも、五輪塔や旧堂跡の土壁などが確認できた。

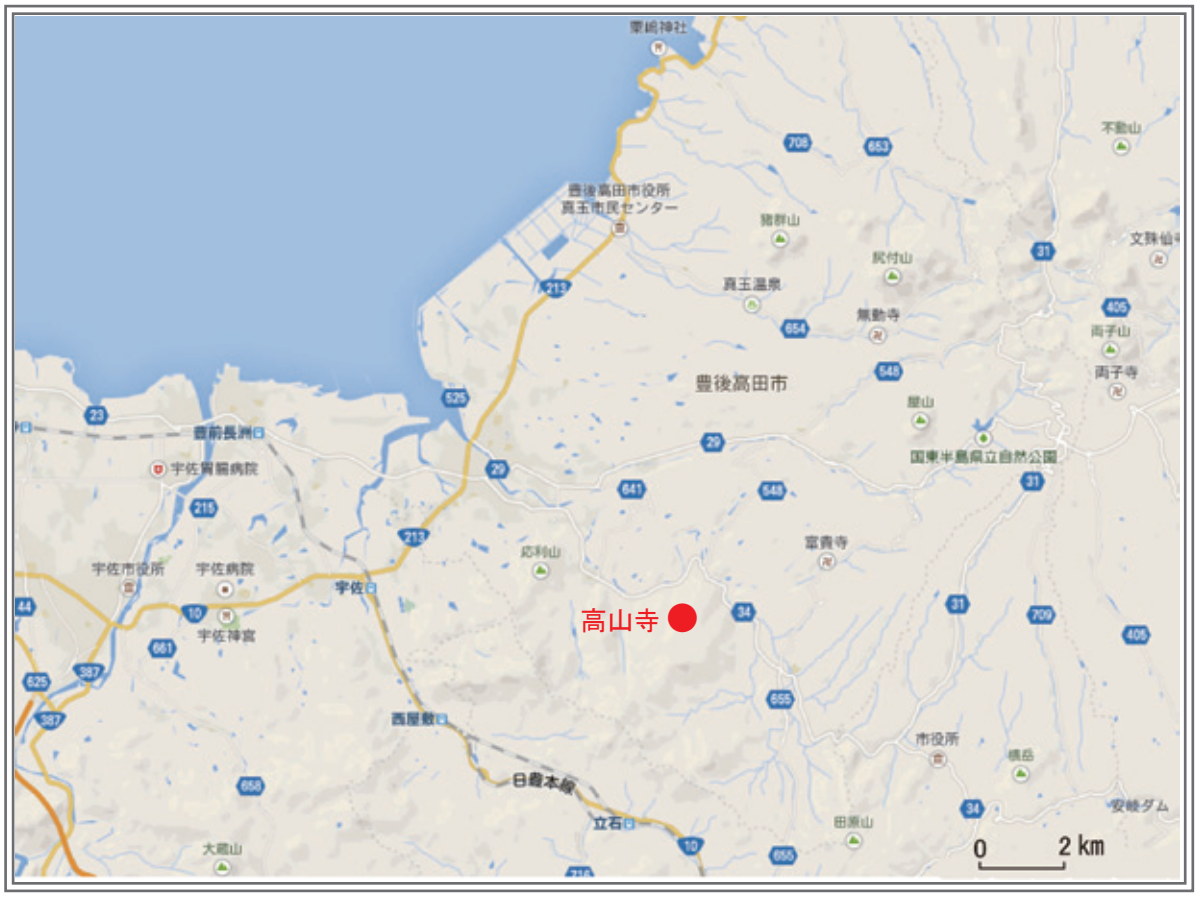
〈登山道及び河川について〉
・高山寺への明確な参道ルートを確認するために、旧参道が存在したであろう西叡山北側の山腹周辺を踏査した。山腹には、清滝からのルートも含め多数の登山道が存在しているため、どの道が旧参道のルートか、正確に判別するのは難しいように考えられる。また、石畳み道が３ヶ所存在すると記録されているが、確認できなかった。参道の確証を得るため、やや広い範囲で五輪塔などの石造物の有無を確認したが、今回の調査において図面に記載した登山道（赤破線）のルート周辺では、確認することができなかった。
・図面上に記載した河川、水路及び沢（青破線）についても、明らかに人工的に掘られ整備されたと思われる水路や、礫が地形的に落ち込んだ部分に自然堆積し、結果的に水路（沢）となっているものなど様々なものが見られる。この水路や沢周辺も踏査したが、建造物や石造物といった人工物は確認できなかった。そのため、水路周辺に関しても、高山寺やその他施設との明確な関係性は確認できない。

〈焼仏について〉
・高山寺の本尊と考えられる仏像として、薬師如来像と観音菩薩があったとされる。薬師如来像に関しては今日に伝わっていないが、観音菩薩像については、これに該当すると思われる像が小田原地区内野の観音堂に伝わっている。（写真№16・17）10世紀前半の造立と考えられる木造の観音菩薩立像で、古来高山寺に安置されていたものが、同寺の火災の際に難をのがれてこの地に到来したものと伝えられる。現在、県指定の有形文化財に指定されている。

≪主要参考文献≫
・『くにさきの世界－くらしと祈りの原風景』　豊後高田市特論編　1996
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 12 集　1993
・大分県文化財調査報告書　第 37 輯『六郷満山関係文化財総合調査概要－豊後高田市・真玉町・香々地町の部－』　大分県教育委員会　1976
・『－豊後高田市の名刹－六郷満山 65 寺を代表した西叡山高山寺』　橋本元徳　1976
・国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査概報　『豊後国田染荘』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1983

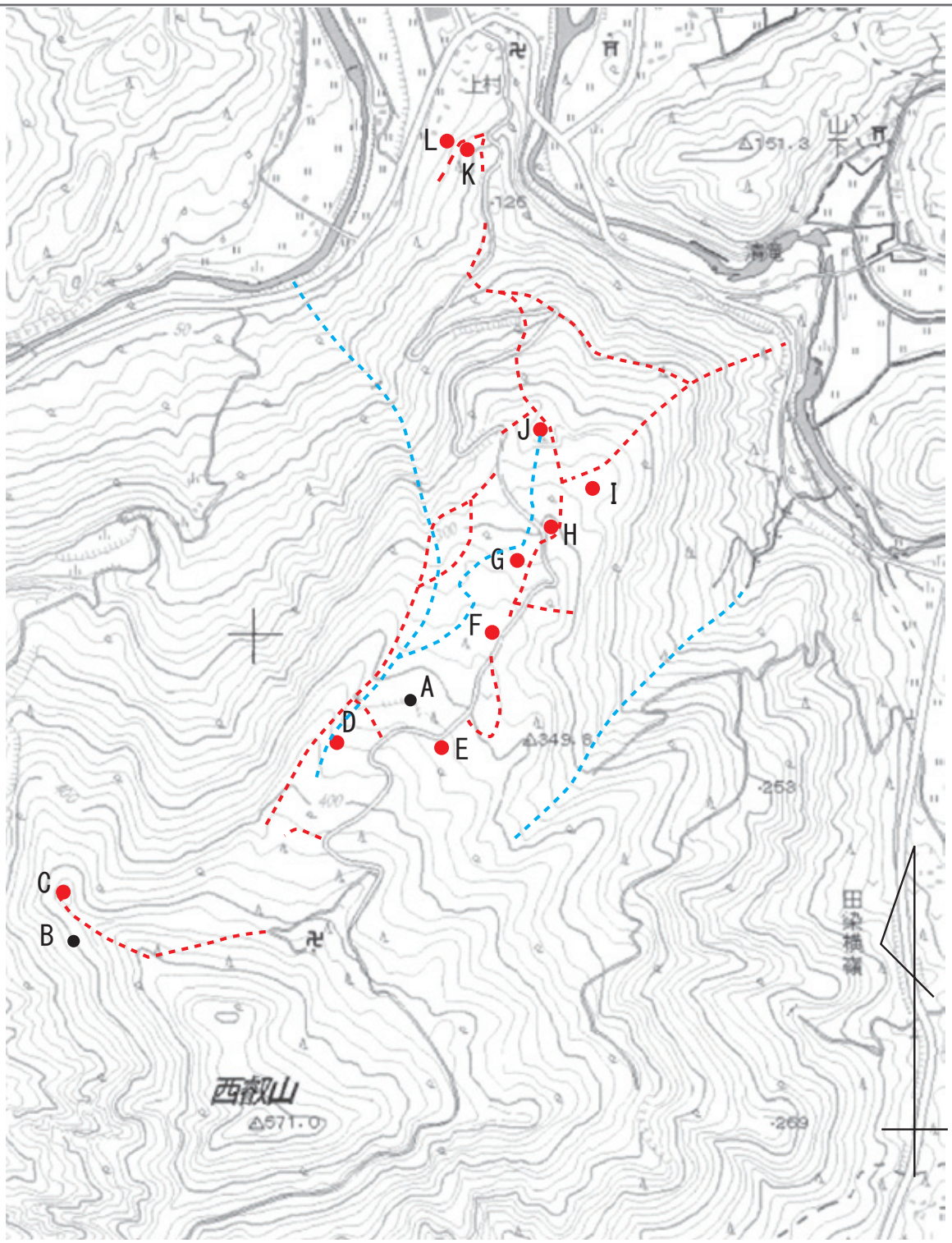
図版①　高山寺　位置図

市域位置図



詳細位置図

図版②　高山寺現況図



A.B‥昭和 59 年土器採集地点（A＝F 地点の可能性あり）①②

C・・・落水権現 ③～⑤

D・・・千人塚（石積）⑥

E・・・座禅石？⑦

F・・・「西叡山高山寺」石柱 ⑧

G・・・坊跡（石垣）⑨～⑩

H・・・礎石跡 ⑪

I・・・石列による区画 ⑫

J・・・池跡 ⑬

K・・・五輪塔群 ⑭

L・・・十王像他石像物群⑮

赤破線▪▪▪登山道　　青破線・・・河川、水路及び沢

※番号は、 写真№とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：A地点

図版②参照／時期：－

・現在は、造成工事により旧地形を把握することはできない。
・以前の報告によれば、土器が採集されたということであるが詳細な位置などは正確に把握できない。また、今回報告しているＦ地点がＡ地点である可能性がある。

3：C地点（落水権現）

図版②参照／時期：近世

・落水権現は、上記のＢ地点を通過し、さらに西側に移動した屋根部先端に立地している。周辺はやや広い平坦面を有しており、その平坦面の北端部に北側を正面にして石祠が立地している。この石祠の横には、五輪塔と思われる部材や、宝塔の宝珠部材、他にも将棋台の形をした石造物などが置かれている。祠に刻まれている銘文は、享保及び天明年号が確認できるため、18世紀後半のものと思われる。

5：落水権現周辺石造物

図版②参照／時期：近世？

・石祠周辺には、石造物の残欠が集積されている。詳細な時期などは不明であるが、石祠との関係から近世段階の可能性が考えられる。

2：B地点

図版②参照／時期：－

・今回調査に同行して頂いた小川氏によると、昭和59年の調査の際にも、現地調査に立ち会っており、Ｂ地点については位置を正確に把握することができたと考えられる。現況としては、周辺は竹林が群生しており、土器等の遺物は確認できなかった。

4：将棋石

図版②参照／時期：近世？

・落水権現の手前には、文久銘の確認できる額？と将棋石が残されている。

6：D地点

図版②参照／時期：－

・現高山寺の駐車場から車道を500m程下った地点の西側において、千人塚と呼ばれている構造物を確認した。塚状の石積が、確認できただけで４～６基程あり、崩れてしまっているものを含めれば、少なくとも10基以上の塚が立地している。立地環境は、南側から北西方向に緩く傾斜しており、塚のある範囲から北西側に延びる登山道も存在している。

7：E地点

図版②参照／時期：－

・橋本氏の報告によれば、座禅石と呼ばれる石造物や井戸などが存在していたということである。
・周辺の踏査結果、A地点から道路を挟んだ南側の斜面地において、大型の扁平な巨石を確認した。しかし、その周辺が造成工事を受けている事や、調査対象地点は地図上より復元・想定したものであり詳細は不明である。

8：F地点

図版②参照／時期：－

・現在『西叡山高山寺跡』の石柱が立っている地点である。
・以前は、ここにも建造物があったとされ、大正時代までは存在していたとされる。また、昭和10年には石原巡仁氏によって仮堂が建設されたが、戦後すぐ石原氏が亡くなると建物も倒壊したとされている。
・1975年の調査により、寺床遺跡として、礎石跡が報告されている地点でもある。

9：G地点

図版②参照／時期：－

・車道からやや奥まった林の中に入った地点であり、坊跡とされている。非常に緩やかな斜面地であり、その中には、石垣が一部残されており、小さな平坦面が形成されている。

10：G地点集石

図版②参照／時期：－

・G地点において、D地点（千人塚）のような礫の集積を確認した。

11：H地点

図版②参照／時期：－

・３つの扁平礫が、面及び軸をそろえて配置されている。扁平礫は平坦面の北側に位置しており、礎石として中央から南側へと展開するであろうが、残念ながらその痕跡は確認できなかった。

12：I地点

図版②参照／時期：－

・石列により区画された場所があり、近くに境界石と呼ばれる石積が確認できる。この石列が、どのような用途を兼ねていたのかは不明であるが、土地の境界や石垣のように土留めの役割を果たしていた可能性は十分に考えられる。

文化財の現況・詳細（3）

13:J地点

図版②参照／時期：－

・以前報告されている池跡であるが、現在は空池となっている。

14:K地点

図版②参照／時期：－

・県道34号線から、現高山寺へと向う車道へ入り、約300m程登ると右側に細い林道がある。その林道を進むと稲荷宮があり、そのすぐ先に五輪塔群が位置している。

15:L地点

図版②参照／時期：近世か？

・写真№14の五輪塔群から斜面を北西に下ると十王像他石造物群が立地している。石造仏以外にも、五輪塔や旧堂跡の土壁などが確認できた。

16:観音堂

時期：－

・現在観音菩薩像は、小田原地区の観音堂内に安置されている。

17:木造聖観音菩薩立像（高山寺焼仏）

時期：10世紀前半頃

・観音菩薩像は、両腕と足先を失い顔面から胸腹部・下半身前面にかけて焼痕が確認できる。また、現存高は192cm、榧の一材から彫出し、内刳りは全くない。丸く太い髻を結い、両頬に張りのある顔に厚めの瞼、切れ込みの深い眼窩を刻む。堂々とした体躯は、胸・腹から腰にかけて分厚い肉取りをみせ、特に下半身の量感は見事であり、鋭い衣文の彫り口とともにすこぶる古様を示している。形態的特徴から、10世紀前半の作と考えられている。

<table>
<tr><td>寺院名</td><td colspan="2">慈　恩　寺</td><td>寺院番号</td><td>⑤</td></tr>
<tr><td>所在地</td><td colspan="4">大字平野字観音堂</td></tr>
<tr><td>居住状態</td><td>有住</td><td rowspan="8">各種文化財員数</td><td>種別</td><td>個数</td></tr>
<tr><td rowspan="7">指定文化財</td><td rowspan="7">鍋山磨崖仏（国史跡）</td><td>木造建築</td><td></td></tr>
<tr><td>礎石跡等</td><td></td></tr>
<tr><td>石造物</td><td>6</td></tr>
<tr><td>仏像</td><td></td></tr>
<tr><td>美術品</td><td></td></tr>
<tr><td>古文書</td><td></td></tr>
<tr><td>その他</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="5">特筆すべき文化財</td><td>・歴代住職墓地（写真№3）</td><td colspan="3">・中世石造物群（写真№4）</td></tr>
<tr><td>・宝篋印塔（写真№5）</td><td colspan="3">・六所権現（写真№10）</td></tr>
<tr><td>・石塔群（写真№11）</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>寺院管理状況</td><td colspan="4">〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉
・寺院は住職によって境内の管理が行われている。
・境内には、六所権現・中世段階の五輪塔・宝塔残欠・宝篋印塔など多数の石造物が安置されている。平成10年度の調査写真と比較しても大きな変更点は見られない。
・六所権現や稲積社周辺は土塀が残されており、やや老朽化している印象を受ける。</td></tr>
<tr><td>寺院史概略</td><td colspan="4">・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』に本山馬城寺（伝乗寺）の末寺として稲積岩屋とあるのが初見である。
・仁安三年銘を有する「六郷二十八山本寺目録」には、稲積山慈恩寺と記載される。
・現在の稲積山慈恩寺に残された位牌・由緒書から、室町時代初期に杵築市大田の宝陀寺（臨済宗）の末寺として「伝翁智正禅師」（阿部庄右衛門尉藤原貞正）によって開山されたものであり、稲積岩屋はその前身寺院と考えられている。
・近世初頭に、真木城主の松平主殿の弟である古庄正勝が臨済宗寺院として再興したと伝えられる。
・元禄二年（1689）に描かれたものを天保七年（1836）に描き写したとされる『豊後国田染組観音堂村絵図』には、慈恩寺が記載されている。
・近世初頭の東福寺末寺について記しているとみられる「東福寺末寺簿」には、宝陀寺の末寺として慈音寺とみえる。</td></tr>
</table>

寺院現況及び変更点

・慈恩寺は境内と鍋山磨崖仏のある稲積不動堂を調査対象として現況確認調査を行った。以下、その内容を報告する。

〈慈恩寺境内及び周辺石造物〉（図版①、②：慈恩寺位置図・慈恩寺周辺地形測量図参照）

・慈恩寺（写真№１）へと向う農道の曲がり口に、五輪塔の残欠などの石造物を確認したため、図面上に追加した。水輪と地輪のみのものや、火輪と空風輪の組み合わせのもの、また、やや大型の自然石などが畑入口付近に並べられている。（写真№２）

・本堂手前南西側に歴代住職墓地が存在している。（写真№３）無縫塔を中心に墓碑が多数存在しており、戦国期とされる五輪塔・一石五輪塔・宝塔などの残欠が集積されている。（写真№４）また、戦国末期～近世初頭と考えられる宝篋印塔２基も立地している。（写真№５）

・現在、本堂手前西側に観音堂が立地している。（写真№６）この観音堂については、昭和50年頃に修理されたもので、本来は現位置より東南100ｍ程に位置していたということである。観音堂内部には、本尊である木造観音菩薩像が安置されており、左右に弘法大師像や観音像、木彫仏などが安置されている。（写真№７）報告されている石造仏６躯、庚申塔残欠、宝永五年（1708）の銘が残る鰐口（写真№８）についても変更点はみられない。

・本堂からみて境内北西側に六所権現・稲積社、戦国期～近世前半の石塔群が立地している。稲積社と呼ばれる石祠（写真№９）は、本堂の裏手に存在している。その西側にある石垣で囲った基壇上に自然石の立石が６基あり、これを六所権現（写真№10）としている。伝乗寺の六所権現も自然石を6基立石しており同じ形態を呈している。石塔群は、この六所権現よりやや西側に立地しており、無縫塔１基、板碑１基、自然石塔婆１基、延享三年（1746）と貞享元年（1684）の銘が残る石塔を１基ずつ、そして石殿を３基の合計８基の石塔物が安置されている。（写真№11）

〈稲積不動堂（鍋山磨崖仏）〉（図版①：詳細位置図参照）

・桂川に沿って走る県道34号線沿いの北側岩壁に位置している。約80段の階段を登ると鍋山の中腹岩壁に不動三尊像が半肉彫りされている。中尊の不動明王立像と脇侍の矜羯羅童子立像が右側に、左側には制吒迦童子立像が確認でき、鎌倉初期の製作と考えられる。（写真№12）（国指定史跡）

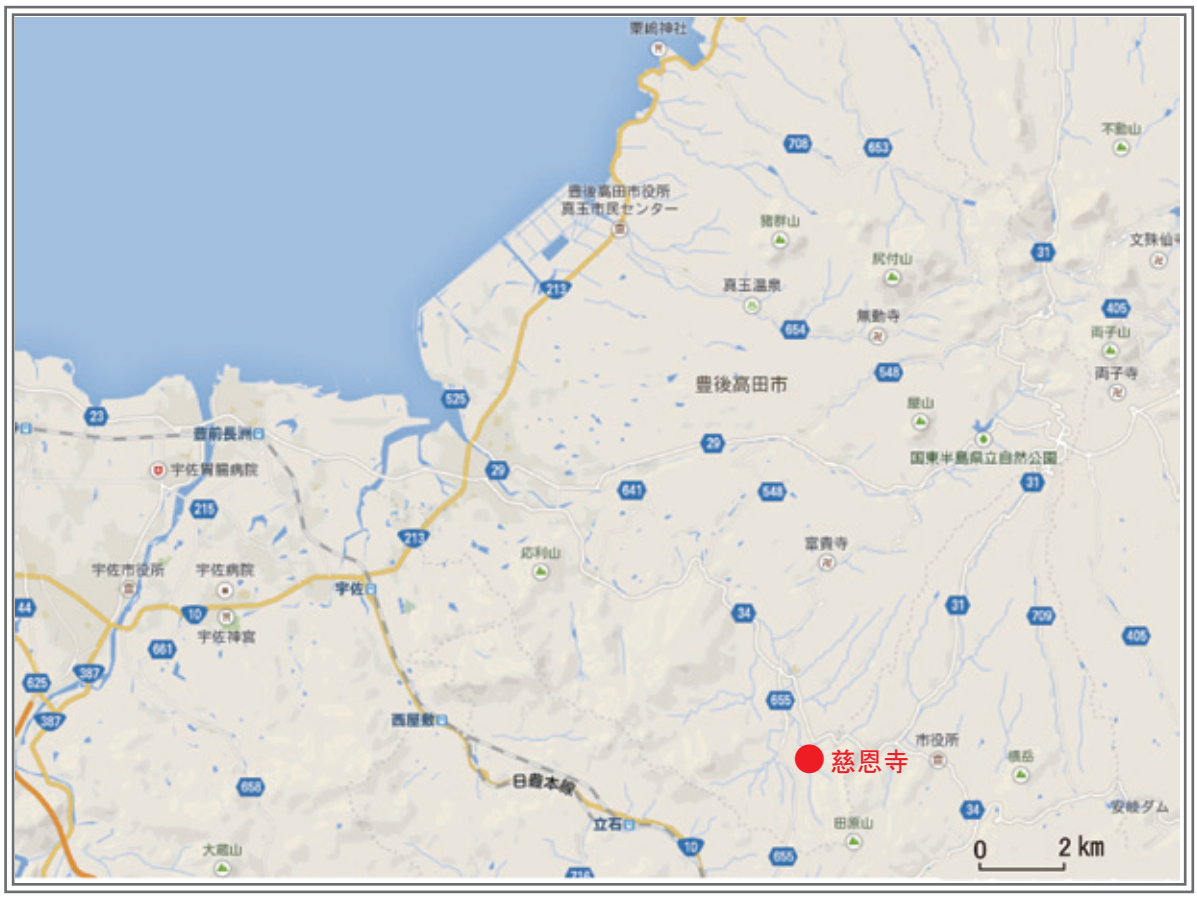
・『国東半島の山岳霊場遺跡-六郷山の寺院と信仰-』において三谷紘平氏は「稲積不動堂に隣接する田染三宮八幡社は別名稲積大明神と称し、上野盆地に水を供給する鍋山井堰の横に位置しており、磨崖仏と神社がともに水源を象徴するものと理解される。稲積山慈恩寺（稲積岩屋）は、このような水源信仰からはじまり、六郷山寺院を経て、領主の私寺ともいえる臨済宗寺院として再興されたものと考えられる。」としている。（九州山岳霊場遺跡研究会 2014）

≪主要参考文献≫

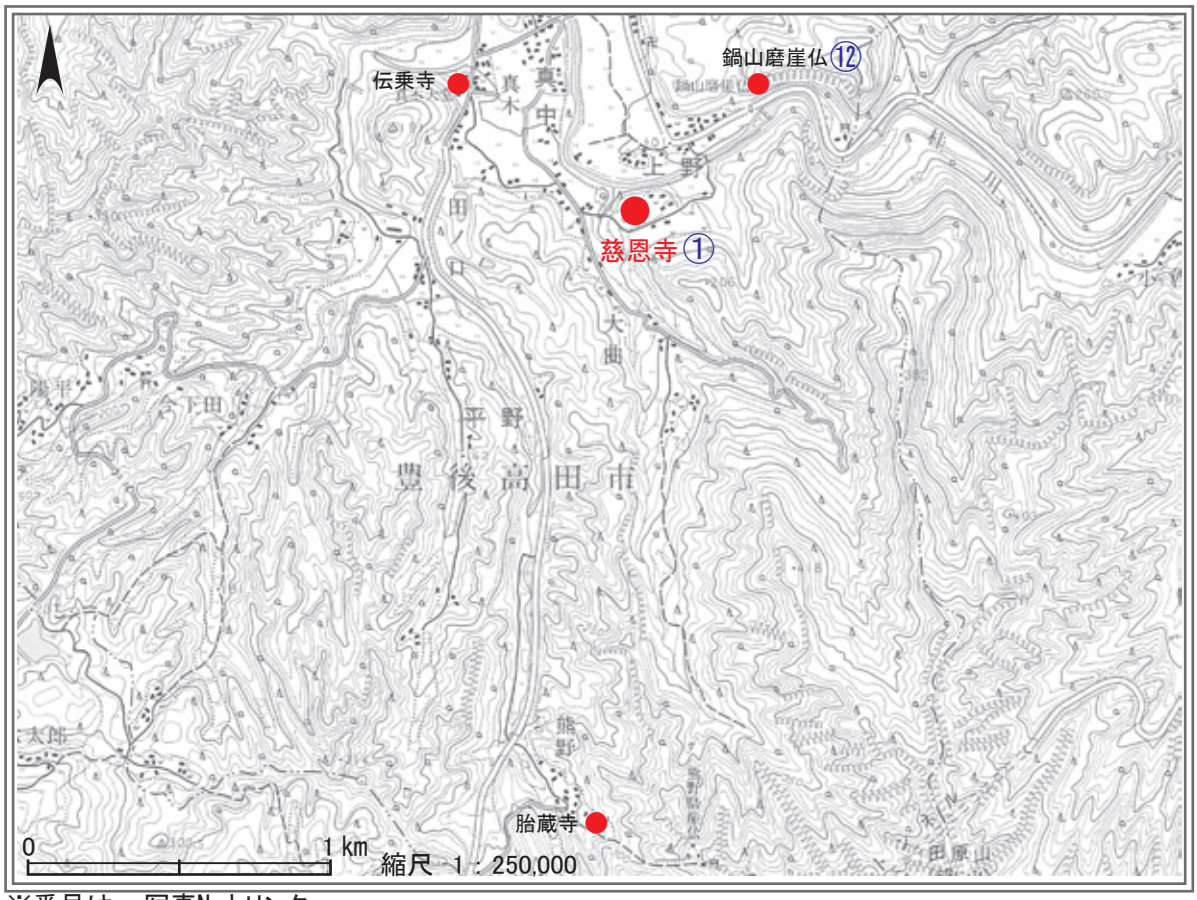
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅵ』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　報告書第 20 集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1998
・『国東半島の山岳霊場遺跡 資料集 - 六郷満山の寺院と信仰 -』 九州山岳霊場遺跡研究会 2014

図版①　慈恩寺　位置図

市域位置図



詳細位置図



※番号は、 写真No.とリンク

図版②　慈恩寺周辺地形測量図

※番号は、写真No.とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：慈恩寺全景

図版①参照／時期：－

・寺院は、上野盆地南側の桂川を挟んだ比高差約30mの高台平坦地を利用して伽藍が展開している。
・横約60m×奥行40m程のコンパクトな境内の中央に南向きの本堂が建立されている。本堂は、梁行４間×桁行８間の瓦葺きで、庫裡と一体となっている。本尊は、釈迦如来を祀っている。

2：石造物群（慈恩寺入口）

図版②参照／時期：－

・慈恩寺へ向かう農道沿いに五輪塔の残欠が集積されている。寺院と直接関係があるのかは不明である。

3：歴代住職墓地全景

図版②参照／時期：戦国末期

・本堂手前西側に無縫塔を中心に約60基をこえる墓碑が安置されている。
・戦国時代のものと思われる石塔物なども安置されている。

4：中世石造物群

図版②参照／時期：戦国末？

・歴代住職墓地の一画に戦国期と考えられる五輪塔・一石五輪塔・宝塔の残欠が集積されている。

5：宝篋印塔

図版②参照／時期：戦国末期～近世初頭

・歴代住職墓地の一画に戦国末期～近世初頭と考えられる宝篋印塔が存在している。
・このような石造物からも、戦国期末から連綿と続く墓地と考えられる。

6：観音堂

図版②参照／時期：昭和50年頃

・本堂南西側に立地している。現在の御堂は、昭和50年代に修理されたものということである。
・観音堂は、現位置から東南方向100m程に位置していたという。

文化財の現況・詳細（2）

7：堂内須弥壇

観音堂内／時期：不明

・中央の須弥壇に木造観音菩薩像が安置されており、左側に阿弥陀・観音・弘法大師像が、右には３躯の木彫仏が安置されている。

8：鰐口

観音堂内／時期：宝永５年

・観音堂内部にあり、「宝永五戊子（1708）歳閏正月十八日 奉寄進鰐口 古庄喜左衛門 同惣兵衛」の銘が確認されている。

9：稲積社

図版②参照／時期：安政６年

・本堂西側の裏手に立地しており稲積社と呼ばれる石祠である。
・石祠には「安政六年（1859）末正月吉日組頭古庄七左エ門　當村氏子中」の銘がみられる。

10：六所権現

図版②参照／時期：－

・稲積社の西側の基壇上に高さ0.6m～１m程の自然石の立石が６基立地している。これを六所権現としている。
・伝乗寺の六所権現も同様の形態をしている

11：石塔群

図版②参照／時期：戦国末～近世

・六所権現から西側に８基の石塔群が立地している。無縫塔１基・石殿３基・板碑１基・自然石塔婆１基・石塔２基である。石塔には延享三年（1746）や貞享元年（1684）銘が確認できる。
・石殿には尊像を正面に３体、左右に１体彫られたものや、正面裏面に２体を彫るものがある。また、板碑にも尊像を彫っているものもあり、その特徴から、戦国時代から近世初頭にかけての供養塔を中心とした石塔群と考えられる。

12：鍋山磨崖仏

図版①参照／時期：鎌倉初期

・鍋山の中腹岩壁に不動三尊が半肉彫りされている。中尊の不動明王立像（全長2.30m）と脇侍の矜羯羅童子立像（全長1.2m）が右側に、左側には制吒迦童子立像（全長1.2m）が確認でき、鎌倉初期の製作と考えられる。
・熊野磨崖仏と合わせて、国指定史跡に指定されている。

<table>
<tr><td>寺　院　名</td><td colspan="2">岩　　脇　　寺</td><td colspan="2">寺院番号</td><td>⑥</td></tr>
<tr><td>所　在　地</td><td colspan="5">大字嶺崎字岩脇</td></tr>
<tr><td>居住状態</td><td colspan="2">無住</td><td rowspan="8">各種文化財員数</td><td>種　別</td><td>個　数</td></tr>
<tr><td rowspan="7">指定文化財</td><td colspan="2" rowspan="7"></td><td>木造建築</td><td>1</td></tr>
<tr><td>礎石跡等</td><td>1</td></tr>
<tr><td>石造物</td><td>7</td></tr>
<tr><td>仏像</td><td>4</td></tr>
<tr><td>美術品</td><td></td></tr>
<tr><td>古文書</td><td>1</td></tr>
<tr><td>その他</td><td>1</td></tr>
<tr><td rowspan="6">特筆すべき文化財</td><td>・本堂(写真№1)</td><td>・護摩堂跡(写真№11)</td><td colspan="2">・六所権現（写真№12）</td><td>・奥の院（写真№15）</td></tr>
<tr><td colspan="2">・磨崖仏（六地蔵）（写真№16）</td><td colspan="3">・磨崖仏（尊称不明）（写真№18）</td></tr>
<tr><td colspan="2">・岩脇寺宝篋印塔（写真№19）</td><td colspan="3">・寺院所有物明細帳(明治42年と昭和15年のもの二冊)</td></tr>
<tr><td>・岩脇寺宝塔(写真№29)</td><td>・旧伊美家墓地(写真№32)</td><td>・大日如来像(写真№37)</td><td>・不動明王（写真№38）</td></tr>
<tr><td>・観音菩薩(写真№39)</td><td>・高山寺焼仏（№40）</td><td colspan="2">・鬼会の面（№41）</td></tr>
<tr><td>寺院管理状況</td><td colspan="5">〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉
・寺院及び周辺の石造物に関しては、近隣住民の方によって管理がなされている。管理は、一年交代で各家ごとに行われている。
・地区の寺院などの管理を行っている河野克己氏によると、１月と８月以外の15日には、以前は胎蔵寺住職であったが、現在は富貴寺住職によってお経があげられている。また、護摩堂周辺において鬼会を行っていたと聞いているということである。その鬼会面が本堂に木製の箱に大事に保管されている。聞き取りをおこなった河野氏は、岩脇寺との関係の深い伊美家の子孫にあたり、河野氏の祖父は伊美姓ということである。
・岩脇寺産所跡については、詳細は不明であるが、妊婦に関連した施設があったと聞いたことがあるということである。
・六所権現社については、平成25年度の現況確認調査の際に社と権現が下され、修復が行われている状況であった。平成27年３月現在では、新たな石製の祠が以前の六所権現の岩屋前の石垣右側に新たな龕を彫り安置されている。</td></tr>
<tr><td>寺院史概略</td><td colspan="5">・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』に「日野岩屋」の記載がみられ、伝乗寺末寺であること、当時は曽祢崎氏によって押領されていた事がわかる。以降は文化元年から天保十二年（1804～1841）の『六郷山定額院主目録』に記載がみられる。また、仁安三年（1168）の『六郷二十八山本寺目録』において「日野山岩脇寺」と記載がみられるが、山号・寺名がいつ頃に確立していくかは不明である。
・当寺に残されていた『寺院所有物明細帳』には、「然スルニ天正十四年国主大友ノ丙戌兵火ニ罹リ堂社悉ク焼失セリ其後中興浄眼大和尚諸人ノ信意ヲ以テ岩脇寺ヲ再建致シ」と記されており、浄眼和尚により再興されたことがわかる。また、寛政五年（1793）の寂照の代には、島原藩主松平忠頌公に願い出て、本堂の再建を行ったことなどが記載されている。</td></tr>
</table>

寺院現況及び変更点

〈岩脇寺境内周辺〉（図版②：岩脇寺周辺石造物分布図参照）

・本堂（写真№１）に関しては、以前は同一の建物を本堂と庫裡に分けて使用していたということである。昭和40年代に茅葺きの上からトタンをかけ、さらに庫裡部分を取り壊して現在の本堂に手直ししたということである。現在、庫裡部分（写真№２）だった所には、トイレが作られている。また、この庫裡の南側には納屋跡の礎石が残されているが（写真№３）、昭和初期には存在していなかったということである。

・本堂の入口付近において、手水鉢が２基（写真№７・８）置かれている。写真№７については、石臼であろうか。その他、宝塔部材もしくは無縫塔の台座と思われる石造物（写真№10）と五輪塔の火・水・地輪と宝塔もしくは無縫塔の台座と思われる部材を組み合わせたもの（写真№９）１基が置かれている。

・本堂前面には、記念碑が２基（写真№６）立地している。また、石祠跡（写真№４）は完全に消失しており、台座の石組みのみが残されている。

・鐘楼（写真№５）は、石祠跡の北東側に立地しており、その内部には不動・観音・地蔵の石像が約20躯程置かれている。同様の石像が奥の院の手前の崖面（写真№42）に30躯程確認されているが、以前の報告では88躯置かれていると記載されている。理由は不明であるが、鐘楼内に移動したものと考えられる。

・護摩堂跡（写真№11）は、本堂の北東側に残されており、昭和20年頃までは存在していたということである。この護摩堂跡で明治37年頃まで鬼会が行われていたようであり、その前面に河川が流れていることから天念寺や弥勒寺などのように禊場が存在していた可能性も考えられる。

◎A. 六所権現（写真№12. 13）

・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』に掲載されている写真には、六所権現の本殿を確認することができるが現在では認められない。平成25年度の現況確認調査において聞き取り調査を行ったところ、老朽化のため一時的に撤去し、修理もしくは石製の祠に変更する予定ということであった。平成27年３月の時点において、新たに六所権現社として石造の祠が岩屋下段の岩肌を彫り込んだ龕内に安置されており、河野氏によれば平成27年２月15日に新たに地区住民の方とお祀りをしたということである。

・現在岩屋内には、板石を重ねたものなど少量の石造物が確認できる程度である。

◎B. 石祠（写真№14）

・明治25年の銘が確認でき、その近くには文久元年（1861）の石灯篭が存在している。

◎C. 奥の院（写真№15）

・岩肌に沿う形で堂が存在しており、奥の院手前の崖面（写真№42）には、不動・観音菩薩像が約30体ほどが安置されている。以前の調査では88躯と報告されているが、約20躯程が鐘楼内に移動されている。『寺院所有物明細帳』（昭和15年）には、昭和６年に持ち込まれたとの記載がみられる。

◎D. 磨崖仏（六地蔵）（写真№16）

・劣化が著しく、尊像を確認するのが難しい印象を受ける。『寺院所有物明細帳』（明治42年）に記載が確認できる。

◎E. 弘法大師像（写真№17）

・周辺の磨崖仏と比較すると残存状況が良好であり、造られた時期も新しいと考えられる。

◎F. 磨崖仏（尊像不明）（写真№18）

・六地蔵磨崖仏と比較しても風化が著しく、尊像を確認するのが難しい。位置的には、弘法大師像の南側壁面に存在している。

◎G. 岩脇寺宝篋印塔（写真№19）

・相輪・笠部を欠いており、それを補うように五輪塔の空風火輪が置かれている。塔身には、応永三十三年（1426）の銘が確認できる。

◎H. 石祠（稲荷）（写真№20）

・六所権現へ続く参道脇の崖面を掘り窪めて、石祠が置かれている。寛政五年（1793）の銘が確認でき、『寺院所有物明細帳』（明治42年）によると「稲荷神社」ということである。

◎I. 板石（写真№21）

・崖面に板状の自然石が立てられている。銘などは確認できず、枯葉等に埋没している。

◎J. 五輪塔残欠合わせ（写真№22）

・上から水輪・火輪・水輪・地輪の組み合わせで置かれている。

◎K. 稲荷大明神（写真№23）

・丘陵側にある『明治三十四年』の銘のある祠であり、岩面を掘り込んだ石段がわずかに確認できる。

◎L. 六所権現鳥居（写真№24）
・安政六年（1859）銘が残される。その側面には元治二年（1865）銘の石灯篭が存在している。

◎M. 石祠（写真№25）
・六所権現へ続く参道入り口付近に石祠が１基存在している。

◎N. 一石五輪塔（写真№26）
・河野氏によると、山側斜面から流れ込んだ土砂内に埋没していたものを掘り出して安置したものということである。

◎O. 岩脇寺産所跡（写真№27）
・現況では、聞き取り調査に協力して頂いた河野克己氏の倉庫が立地している。妊婦に関連のある施設があったとの口伝が残されている。

◎P. 石祠
・民家裏側に石祠が１基存在している。寺院との直接の関係は不明である。

◎Q. 石祠
・岩脇寺の所在する地区への入口付近に石祠が１基立地している。

◎R. 石祠（写真№28）
・岩脇寺宝塔の東北側に１基の石祠が立地している。

◎S. 岩脇寺宝塔と五輪塔群（写真№29）
・岩脇寺の南側に位置する芹川氏宅の倉庫裏において鎌倉末～南北朝期の作とされる宝塔が１基立地している。総高136㎝で、五輪塔形のものである。また、周辺には多くの中世後半の時期と考えられる五輪塔の残欠が確認できる。

◎T. 石祠
・岩脇寺宝塔のすぐ東側に石祠が１基存在している。周辺には五輪塔の残欠も多数確認することができる。

◎U. 石祠　V. 伊美政男氏宅（岩脇寺の仮寺院）（写真№30. 31）
・岩脇寺が水害などを受けた際に、仏像及び関係品が持ち込まれ、緊急時の寺として機能していたと報告されている。現在は空き家になっており、敷地内はやや荒廃している。祠もその敷地内において確認できた。

◎W. 旧伊美家墓地　X. 現伊美家墓地　Z：伊美家墓地（写真№32. 33）
・現在の墓地へ続く里道沿いに、旧伊美家墓地が存在しており、河原石を組み合わせた配石墓及び２基の墓碑が立地している。２基の墓碑は、その正面を平野側ではなく、石垣が構築されている斜面側に向けている。西叡山のある方向、もしくは西方を向くためと考えられている。その中の1基は、岩脇寺を再建した淨眼和尚の墓碑である。
・Xの位置に現在の伊美家の墓地が立地している。
・現伊美家墓地を過ぎ、山裾へ進むと近世段階の伊美家墓地が存在している。墓地群の中でも初期の墓碑と考えられるものは、その正面を旧墓地と同様に西側に向いているものがある。それ以降は南側となる。また、正徳四年（1714）に没した澄賢和尚の無縫塔も確認できる。

◎Z. 一石五輪塔（写真№34）
・山頂から20m程西南に移動した地点で、新たに一石五輪塔を１基確認した。周辺の踏査も行ったが、その他石造物を確認することはできなかった。

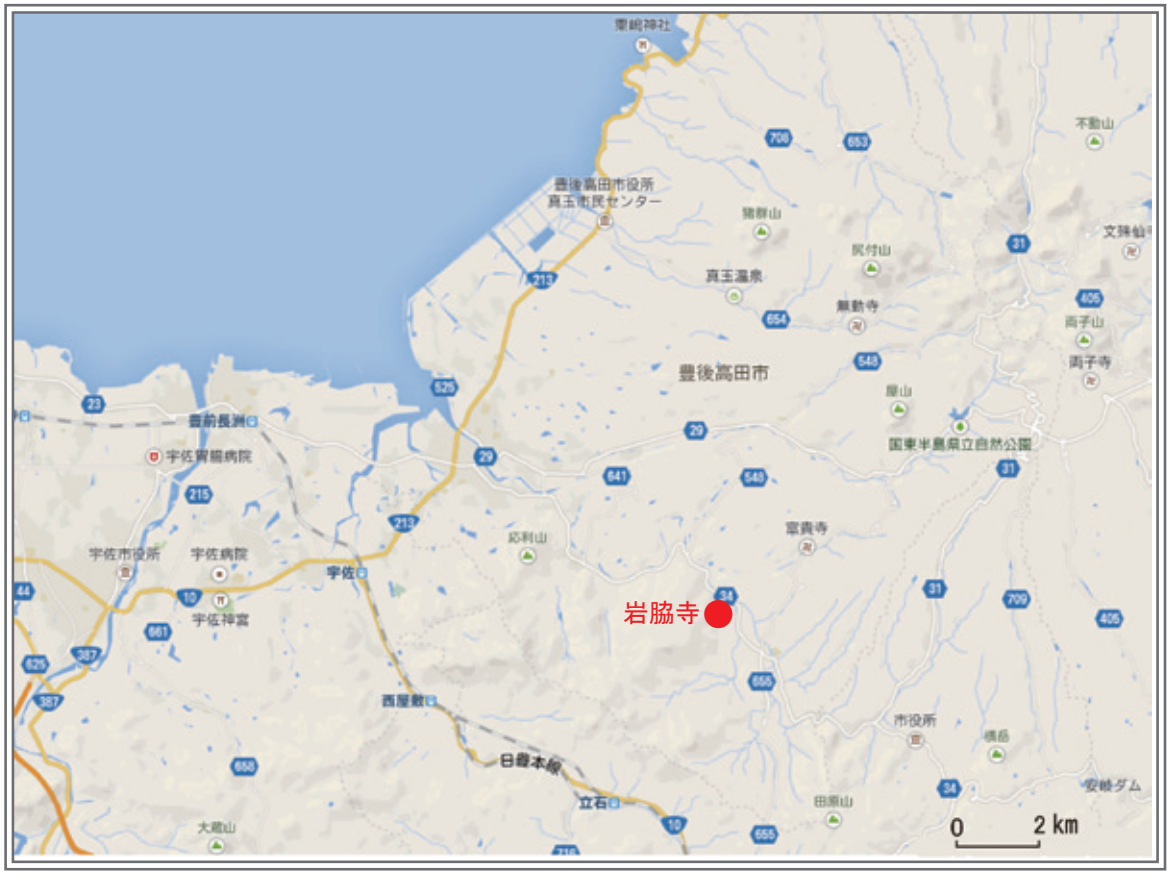
◎A'. 金毘羅宮（写真№35）　石灯篭（写真№36）
・山頂において金毘羅宮の石祠を２基確認した。以前の図面では、３基存在したような表現であるが、東側の祠は確認することが出来ず、石灯篭１基をその位置で確認した。

〈仏像及び鬼会面〉
・現在、本堂内中央に本尊である大日如来坐像（写真№37）、右手に不動明王立像（写真№38）、左手に木造観音菩薩坐像（写真№39）及び、高山寺焼仏とされる仏像（写真№40）が安置されている。また、やや大きめの木箱に荒鬼面が３面と鈴鬼面２面が大切に保管されている。（写真№41）

≪主要参考文献≫
・『豊後国田染荘の調査』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第３集 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 17 集 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1996
・『くにさきの世界ーくらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996
・『六郷満山関係文化財総合調査概要ー豊後高田市・真玉町・香々地町の部ー』大分県文化財調査報告書 第 37 輯 大分県教育委員会 1976

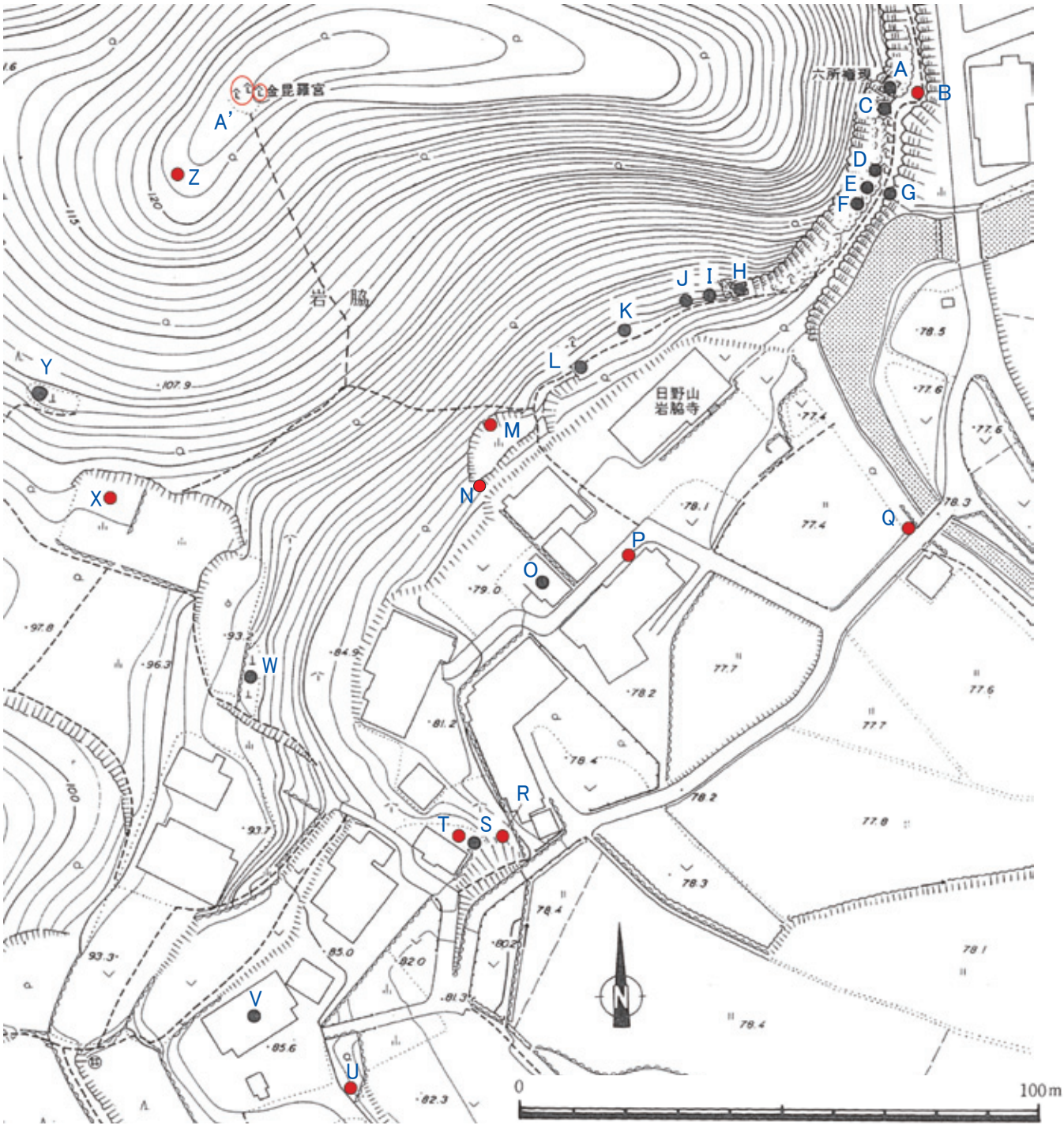
図版①　　岩脇寺　位置図

市域位置図



詳細位置図

図版②　岩脇寺 周辺石造物分布図



A　六所権現 ⑫ ⑬
B　石祠 ⑭
C　奥の院 ⑮ ㊷
D　磨崖仏（六地蔵） ⑯
E　弘法大師像 ⑰
F　磨崖仏（尊像不明） ⑱
G　岩脇寺宝篋印塔 ⑲
H　石祠（稲荷） ⑳
I　板石 ㉑
J　五輪塔残欠 ㉒
K　稲荷大明神 ㉓
L　六所権現鳥居 ㉔
M　石祠 ㉕
N　一石五輪塔 ㉖
O　岩脇寺産所跡 ㉗
P　石祠
Q　石祠
R　石祠 ㉘
S　岩脇寺宝塔と五輪塔群 ㉙
T　石祠
U　石祠 ㉚
V　伊美政男氏宅 ㉛
W　旧伊美家墓地 ㉜
X　現伊美家墓地
Y　伊美家墓地 ㉝
Z　一石五輪塔 ㉞
A'　石祠・石灯篭 ㉟

番号は、写真No.とリンク
● 平成 25 年度追加調査分

文化財の現況・詳細（1）

1：岩脇寺本堂

図版②参照／時期：明治42年以前

・明治42年作成の『寺院所有物明細帳』に記載が残る。昭和40年代に茅葺きの上にトタンを架け、同一建物であった庫裡部分を取り壊したという。
・『明細帳』には「本堂梁行三間桁行五間」と見える。

2：庫裡跡

図版②参照／時期：明治42年以前

・明治42年作成の『寺院所有物明細帳』に記載が残る。昭和40年代に取り壊されたという。
・『明細帳』には「庫裡梁行三間桁行六間」と見える。

3：納屋跡

図版②参照／時期：明治42年以前

・明治42年作成の『寺院所有物明細帳』に記載が残る。昭和初期には、存在しなかったという。
・『明細帳』には「納屋梁行二間桁行五間半」と見える。

4：石祠跡

図版②参照／時期：近世

・基礎部分のみが残存している。
・岩脇寺の仮寺院とされる伊美政男氏宅に移転されたという。
・石祠（写真№30）が該当するものであろうか。

5：鐘楼

図版②参照／時期：明治42年～昭和15年の間

・明治42年作成の『寺院所有物明細帳』に記載が無く、昭和15年作成の『寺院所有物明細帳』には記載される事から、この間での建立であろう。

6：記念碑

図版②参照／時期：近代

・石祠跡に隣接する。
・岩脇寺に、上田壱反壱畝拾壱歩及び金参百圓を寄付した碑である。

7：手水鉢2　図版②参照／時期：近代

・手水鉢として報告しているが、石臼とも考えられる。

8：手水鉢1　図版②参照／時期：近代

・本堂入口の左側に位置する。

9：五輪塔　図版②参照／時期：近世か

・本堂入口の左側に位置する。
・複数の石造物の部材を集積している。

10：宝塔　図版②参照／時期：近世か

・宝塔もしくは無縫塔の台座であろうか。

11：護摩堂跡　図版②参照／時期：近世か

・明治42年作成の『寺院所有物明細帳』に記載が残る。昭和20年代まで存在していたという。
・『明細帳』には「護摩堂梁行四間桁行四間」と見える。

12：六所権現　図版②参照／時期：建武４年以前

・本殿が存在していたが、現在は下段に祀られている。
・岩屋は、建武四年の注文案において「日野岩屋」の名称を確認できるため、それ以前には成立していたものと考えられる。

13：六所権現社

図版②参照／時期：－

・現在、六所権現の祠は、石造のものに作り直され、岩屋下段の岩面に龕を設け祀られている。

14：石祠

図版②参照／時期：明治25年

・六所権現の前面に位置する。側面に明治二十五年の銘が残る。
・石祠には隣接して石灯篭が残り「文久三年（1861）大力村大野寿右ェ門基親」の銘がみられる。

15：奥の院

図版②参照／時期：近代

・岩肌に沿うように建てられる。

16：磨崖仏（六地蔵）

図版②参照／時期：近世か

・明治42年作成の『寺院所有物明細帳』に「六地蔵菩薩　巌面六個」と記載される。
・現在、風化が激しく尊像の確認が難しい状態である。

17：弘法大師像

図版②参照／時期：近世

・残存状況は良好である。

18：磨崖仏（尊称不明）

図版②参照／時期：近世か

・明治42年作成の『寺院所有物明細帳』に「仏像　巌面六個」と記載される。
・現在、風化が激しく確認が難しい状態である。

19：岩脇寺宝篋印塔

図版②参照／時期：応永33年

・塔身以下の残存で、上部には五輪塔の空風火輪が置かれる。
・塔身に「応永三十三年（1426）九月十八日　右伏請三宝証明諸天門」の銘が残る。

20：石祠（稲荷）

図版②参照／時期：寛政5年

・側面に「寛政五年（1793）、願主當山現主寂照敬白」の銘が残る。
・明治42年の『明細帳』には、稲荷神社と記載される。

21：板石

図版②参照／時期：－

・崖面に板状の自然石が立てられる。縦約１ｍ、幅約40㎝で、銘はみられない。

22：五輪塔残欠

図版②参照／時期：近世

・五輪塔の各部材を積み上げたものである。

23：稲荷大明神

図版②参照／時期：明治34年

・稲荷大明神であり、石祠には明治三十四年の銘が残る。

24：六所権現鳥居

図版②参照／時期：安政6年

・「安政六年（1859）、村正　渡辺源兵衛源知、別當　教成院豪真法印、石工大力村大野寿右衛門」等の銘が残る。
・南側には石灯篭があり元治二年（1865）の銘が残る。

文化財の現況・詳細（5）

25：石祠

図版②参照／時期：近世

・岩肌上に位置しており、銘等の確認はできていない。

26：一石五輪塔

図版②参照／時期：中世

・埋没していたが、掘り出して安置したと聞き取りができた。

27：岩脇寺産所跡

図版②参照／時期：近代

・「ヘヤ」と呼ばれており、かつては岩脇寺の産所であったと伝えられている。

28：石祠

図版②参照／時期：近世

・岩脇寺宝塔の北東側に位置している。銘は確認できない。

29：岩脇寺宝塔

図版②参照／時期：鎌倉末～南北朝初期

・高さ約136cm、水輪には顕教四仏の種子が薬研彫りされる。
・宝塔の周辺には、中世末期の五輪塔や一石五輪塔が集積される。

30：石祠（伊美氏宅）

図版②参照／時期：近世

・岩脇寺の鐘楼に隣接して石祠跡が位置している。この上の祠は伊美政男氏宅に移転されたと伝えられている。この祠がそれであろうか。

31：岩脇寺の仮寺院

図版②参照／時期：近代

・伊美政男氏宅は、高所に位置しており、緊急時の仮寺院として機能していたという。
・現在は空き家となっている。

32：旧伊美家墓地

図版②参照／時期：近世

・斜面の狭い空間に、河原石を組んだ配石墓がみられる。その中に、墓碑が2基残るが、その正面を斜面側に向けている。西側の西叡山もしくは西方を向いていると考えられている。

33：伊美家墓地

図版②参照／時期：近世

・位牌型墓碑が中心となる。その中でも初期の墓碑には、正面を旧墓地と同じく西側を向くものもある。それ以降は南側を向いている。
・墓地には、正徳四年（1714）に没した澄賢の無縫塔もみられる。

34：一石五輪塔

図版②参照／時期：中世か

・金毘羅宮の西南側に位置している。

35：金毘羅宮

図版②参照／時期：近世

・山頂に石祠が2基みられる。

36：石灯篭

図版②参照／時期：近世

・金毘羅宮の前面に位置している。

37：大日如来坐像

図版②参照／時期：近世か

・木造の大日如来坐像である。

38：不動明王立像

図版②参照／時期：近世か

・木造の不動明王立像である。

39：観音菩薩坐像

図版②参照／時期：近世か

・木造の観音菩薩坐像である。
・1970年の岩野勝氏の報告では、愛敬寺本尊の観音像とされている。しかし、その由来などの詳細は不明である。また、現在ではこの観音像が愛敬寺の本尊であるとの話も伝えられていない。（豊後高田市における六郷山寺院の信仰と経済的考察について 地図並写真　岩野勝　1970）

40：高山寺焼仏

図版②参照／時期：不明

・欠損の激しい木造仏である。高山寺で祀られていた仏像と伝わっている。

41：鬼会の面

図版②参照／時期：近世

・岩脇寺では毎年旧暦正月11日に鬼会が行われていたが、明治37年頃に廃絶してしまった。
・江戸時代前期の古面と中期頃の新面が残されている。（豊後国田染荘の調査Ⅰ　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986）

42：奥の院手前の岩屋

図版②参照／時期：近世

・不動・観音菩薩像が約30躯程安置されているが、以前の調査では88躯と報告されている。本堂前の鐘楼内に約20躯程が移動されている。

寺院名	観音寺		寺院番号	⑦
所在地	大字真中字小崎			
居住状態	無住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財	観音寺跡（国文景）		木造建築	
			礎石跡等	2
			石造物	5
			仏像	
			美術品	
			古文書	
			その他	
特筆すべき文化財	・宝篋印塔残欠（写真№5）	・Ⅰ区基壇遺構（写真№7）		
	・堂跡（礎石跡）（写真№8.9）	・妙□墓碑（写真№12）		
	・息雲墓碑（写真№13）	・宝塔（写真№14）		
	・観音寺五輪塔群（写真№15）			
寺院管理状況	**〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉** ・平成25年度の現況確認調査において、観音寺跡の石造物及び周辺の踏査を行った。周辺に民家などが存在せず、現在どのような管理体制にあるのかは不明である。以前の調査に比べ、現地の荒廃が進んでいるような印象を受ける。			
寺院史概略	・後世の作であるが仁安三年の『六郷二十八山本寺目録』に記載される「中津尾山観音寺」に該当する可能性が考えられる。この中津尾の名称については、建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』に記載された「中津尾岩屋　鞍懸山末寺也」と同一と思われる。 ・観音寺が文献史料で確認できる初見は、文和二年（1353）の「比丘尼くうゑん」による田原宝陀寺への寄進状である。この寄進状には「比丘尼くうゑん」の父親が田染春基である可能性が示唆される一文が存在しており、田染氏の氏寺的存在の可能性を裏付ける。 ・享徳二年（1453）には、宇佐宮神官永弘栄佐によって末次名内の６反30代が寄進されている。 ・長禄三年（1459）には、田染栄忠により寺領の造営を行ったとされる。 ・観音寺跡に残る墓碑の中には「息雲」の名前が確認できる。この「息雲」については、後期田染氏の直系である建栄と推定されている。よって、少なくとも天正年代の建栄の段階においても観音寺が田染氏ときわめて深いかかわりのある寺院であったと考えられる。 ・1932年の『田染村志』によれば、「観音寺址は、田染大字真中字下中村に在り。本尊は十一面観音なりき。中興の開祖は空心元有居士にして、正徳四年午の三月示寂す」と記載され、江戸時代中期頃に再興されたものと考えられる。 ・『豊後国田染荘の調査Ⅰ』や『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ』によれば、三間四面の堂跡や天正年間の墓碑・宝塔・五輪塔等の存在から田染氏の氏寺的存在と推定されている。			

寺院現況及び変更点

〈観音寺全体〉

・道路に面した入口（写真№１）から、30m程山へ入ると、獣避けのフェンスがある。そのフェンス入口付近で石塔物の塔身部材１点を確認した。（写真№２）宝塔もしくは国東塔の部材と考えられる。さらにそこから20m程登ると観音寺跡の平坦面がある。その地点から、西南側に25m程フェンスに沿って移動した所に近世墓地群があり、この墓地群の一角において五輪塔１基、無縫塔１基の各部材を確認した。（写真№３.４）元禄15年のものを除けば、享保年間以後のものであり、空心元有の再興時に住みついた人々がいた可能性が考えられる。

・息雲墓碑がある石塔群（Ⅲ区）から南西に８ｍほど離れた地点で、倒壊している宝篋印塔を１基確認した。（写真№５）時期など詳細については不明である。

〈観音寺全体〉（図版②：観音寺跡現況図参照）

・遺構は水田面との比高が約20mの山腹を削って造成した20m×20m程の広さの平坦面に存在している。現状は杉の植林地になっている。

◎Ⅰ区

・敷地の東隅にあり、高さ50～60㎝、１辺が４ｍ程の土壇である。東側二辺は露頭した凝灰岩の崖面に接している。『豊後国田染荘の調査Ⅰ』によれば、大型国東塔の塔身残欠が存在していると報告され、大型の供養塔が立地していた可能性が示唆されている。現状において、大型の礫の散布は確認できるが、明確な国東塔の塔身残欠と思われる部材は確認できない。Ⅰ区において、１点塔身部材と考えられる部材を確認したが、苔の付着や風化が著しく、正確には断定できない。（写真№６）また、以前の調査に比べ東南側の斜面からの流入土が多く埋没している印象を受ける。（写真№７）

◎Ⅱ区

・中央部やや山寄りに位置し、小礎石が遺存している。南側に入口の踏石とみられる５枚の平石が並んでいることから、正面を南側に向けた三間堂であったと考えられる。堂跡の礎石に関しても、やや埋没しており、東側の礎石については、樹木の根の下に入り込んでいる状態である。（写真№８.９）

◎Ⅳ・Ⅴ区

・北側の礫（Ⅳ区）（写真№10）及び扁平礫（Ｖ区）（写真№11）に関しては、 礫の集積が確認でき、目立った変更点はみられない。

〈観音寺石塔配置図〉（図版②：Ⅲ区拡大図参照）

・以前の調査で記されている礫及び石塔物はすべて確認することができた。しかし、これらの礫及び石塔物も倒木や堆積土などによる埋没が目立つ。以下図面に記されている番号に沿って現況及び変更点を報告する。

１　妙□墓碑

・表面最上部に月輪に入った梵字と五輪塔が彫られ、水輪部に「妙□」、その左右に「天正丙戌」と「七月十三日」と刻まれると報告されているが、現状では風化が著しく確認することはできない。（写真№12）

２　墓碑（安置場所）、３　息雲墓碑

・図面上の破線２は、本来３の墓碑（息雲墓碑）が、１の妙□墓碑の北西側に並置されていた痕跡であるが、現在は確認できない。３の息雲墓碑については、全長112㎝を測る。こちらも１妙口墓碑と同様に表面最上部に月輪に入った梵字があり、その下に五輪塔が彫られている。水輪部に「息雲」、左右に「天正癸末」・「七月十六日」と刻まれている。「息雲」に関しては、後期田染氏の直系建栄と推定されている。現況として、墓碑には苔の付着などが目立ち、銘文や五輪塔などは確認できない状況である。（写真№13）

A、B地点

・A、B地点に関しては、以前の調査によると「玉砂利を敷いた直径１ｍほどの凹みが２個連続しており、遺骸を埋葬したものとみられる。」と報告されている。現況として、A地点に関しては、倒木や枯葉により埋没しており、その痕跡などは確認できなかった。B地点も同様に埋没している状況であるが、石列に関しては確認することができた。

４　宝塔

・基礎・壺形塔身・笠・露盤・請花・宝珠からなる宝塔である。このうち、笠と露盤、請花と宝珠は一体の作りになっている。凝灰岩製で、総高117㎝を測る。また、塔身部に地蔵菩薩像が彫られており、「宗方」「天正九辛巳　三月十三日」の銘が刻まれる。

５　五輪塔

・空風輪が消失している。また、この五輪塔と４　宝塔の間に、相輪の部材の残欠が崩落している。（写真№14＝４　宝塔と５　五輪塔）

６　五輪塔、７　五輪塔

・６は、劣化が進んでおり、北西側にやや傾いている。５と同様に空風輪が消失している。７は、各部材が組まれた状態で残されている。（写真№15＝６、７　五輪塔）

８　五輪塔、９　五輪塔

・８は水輪のみ確認できる。周辺に火輪が２基存在しているため、どちらかが8と同一個体の部材と考えられる。９は、空風輪部材が消失している。（写真№16＝８、９五輪塔）

10　五輪塔

・北側に倒壊しており、火輪付近に空風輪と思われる部材が３点集中している。（写真№17）

11　五輪塔

・五輪塔群の中で一番西側に位置している。水輪を乗せる外周に蓮弁を彫出している。（写真№18）

※７と８の間に火輪と思われる部材が２点存在しており、１基は８の五輪塔と同一個体のものと考えられるが、もう１点に関しては、セット関係が不明である。そのため、本来であれば７基～８基程の五輪塔が存在していた可能性がある。

その他

・『豊後国田染荘の調査Ⅰ』では、大応寺に残る浮彫五輪塔碑が観音寺旧在として報告されている。「重巖　天正十五丁亥（1587）正月」の銘が残る。

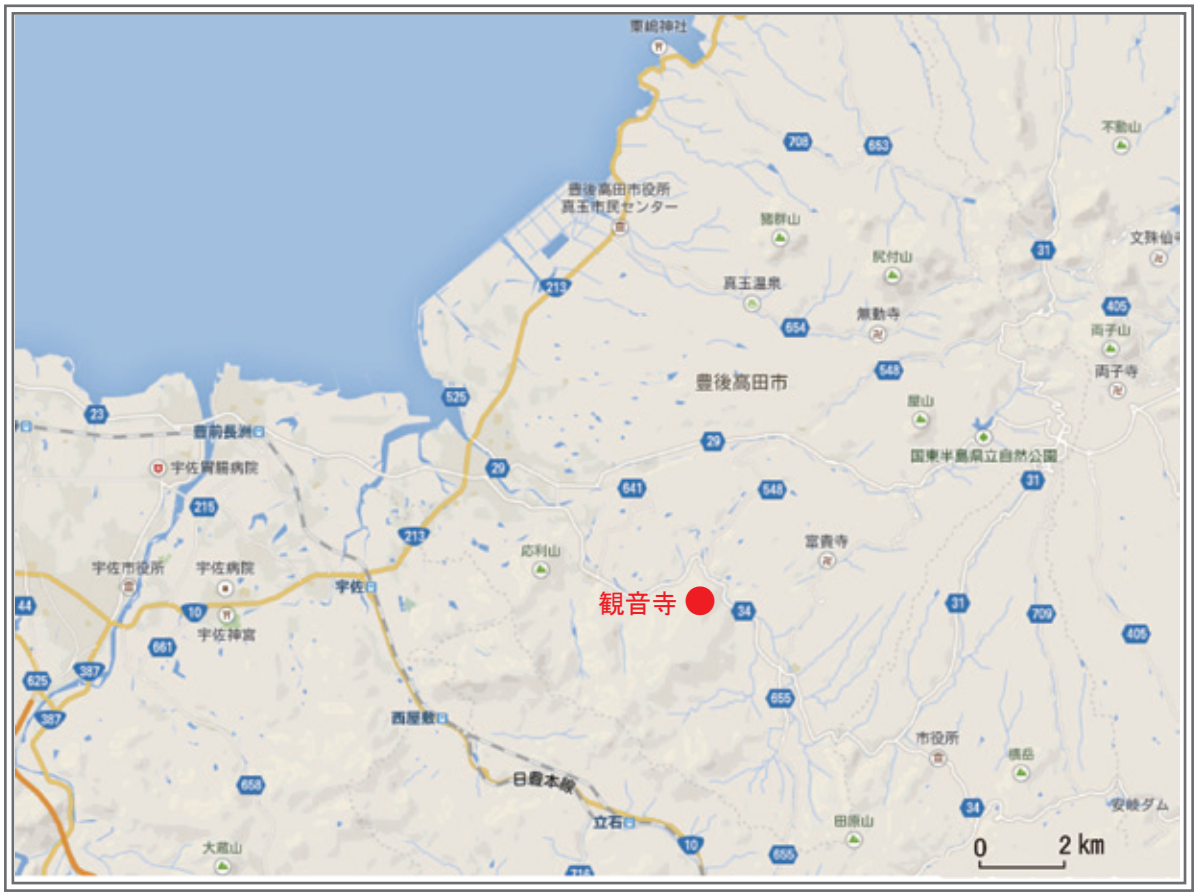
≪主要参考文献≫

・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ』大分県立歴史博物館報告書第５集　大分県立歴史博物館　2001

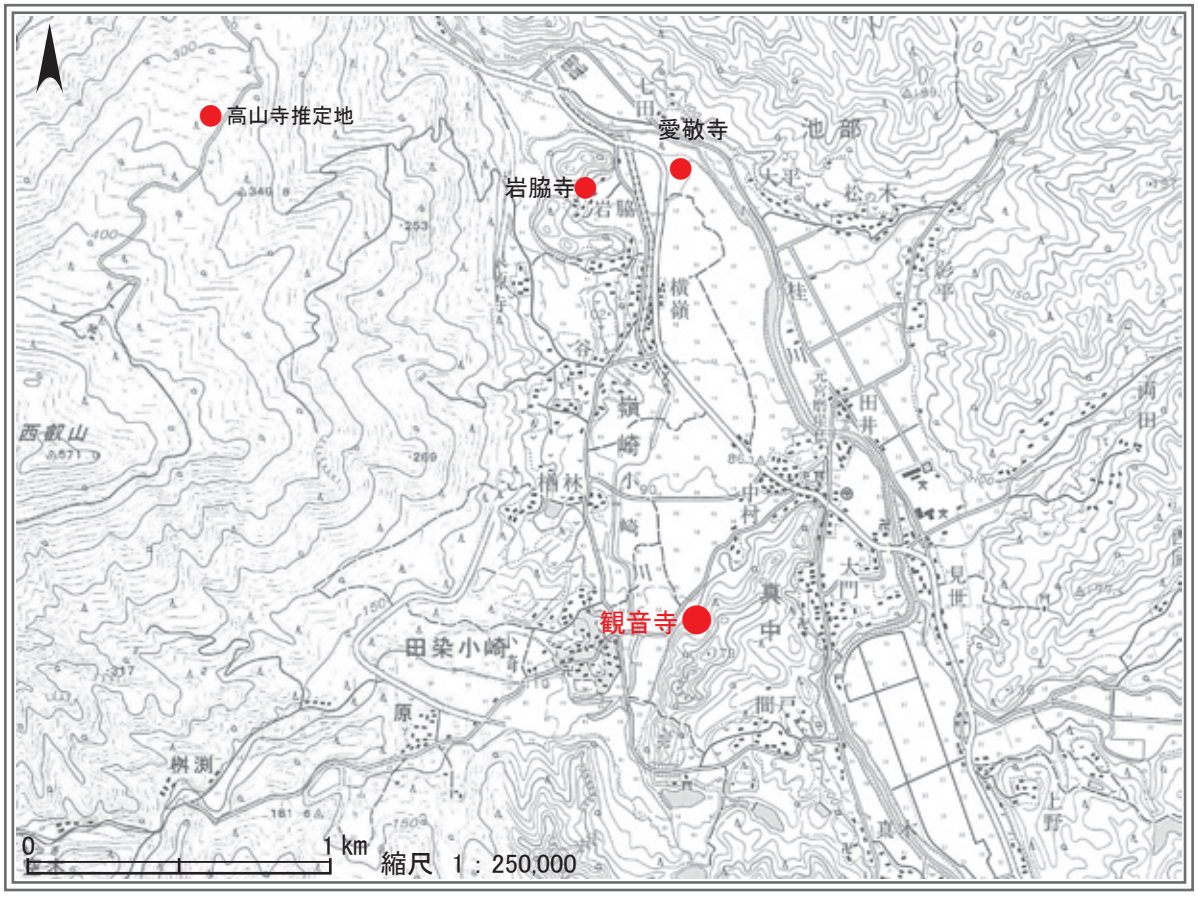
・『豊後国田染荘の調査Ⅰ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第３集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986

図版①　観音寺　位置図

市域位置図



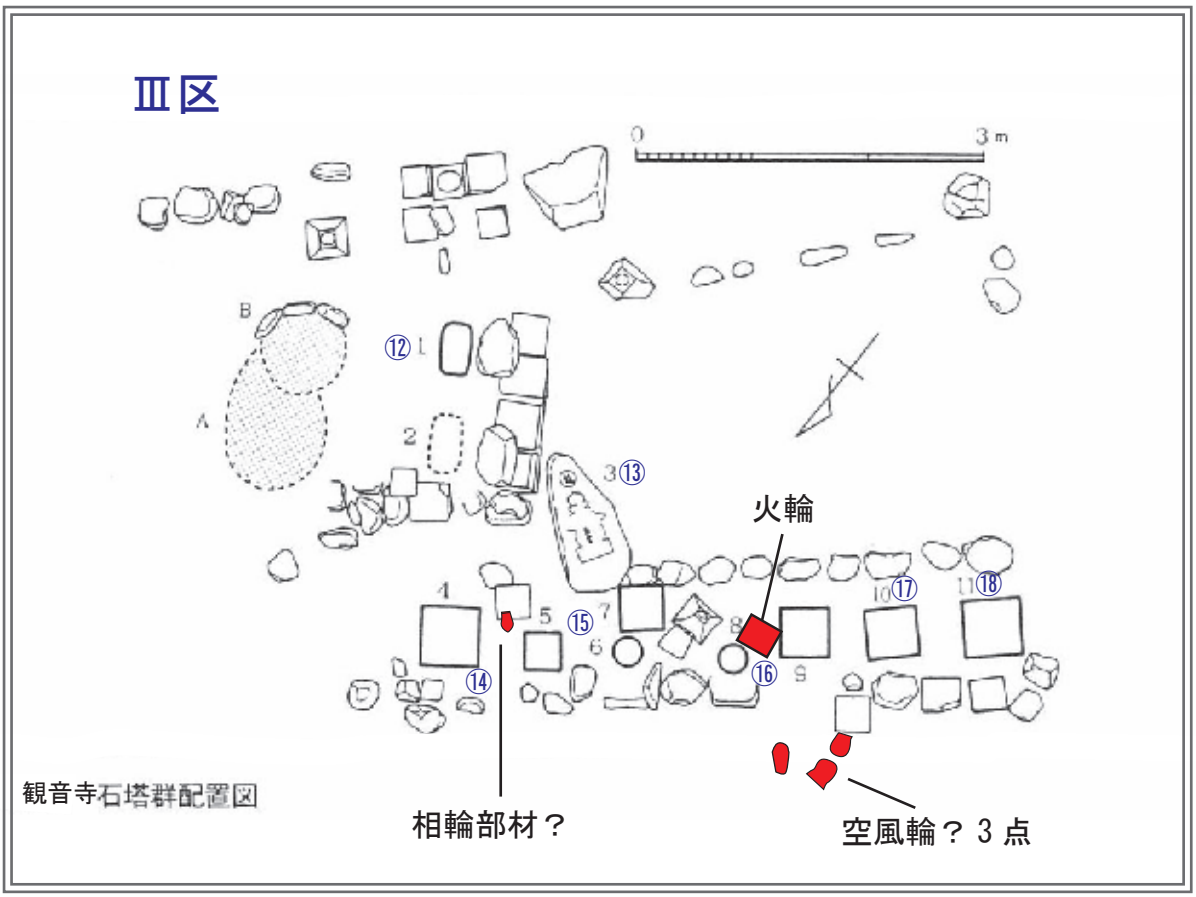
詳細位置図



図版②　観音寺現況図・Ⅲ区拡大図

観音寺跡現況図

Ⅲ区拡大図



※番号は写真No.とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：観音寺入口

図版②参照

・農道から山裾へ進入するような形で、観音寺跡へ向かう参道が続いている。

2：塔身部材残欠

図版②参照／時期：－

・観音寺跡へ向かう参道入り口付近に、国東塔か宝塔の塔身と思われる部材が存在している。銘などは確認できず時期も不明である。

3：近世墓地

図版②参照／時期：元禄以降

・元禄銘の１基を除き、享保～天保にかけての墓地である。
・空心元有の再興以後、周辺に居住した人々がいた可能性が考えられる。

4：無縫塔

図版②参照／時期：近世以降？

・近世墓地の一画に無縫塔の部材を確認した。時期は不明である。
・周辺に近世墓地が展開していることからも、同時期の可能性が考えられる。

5：宝篋印塔残欠

図版②参照／時期：－

・観音寺跡地の南西約８ｍにおいて、宝篋印塔が倒壊する形で１基存在している。
・枯葉などにより埋没しており、荒廃している印象を受ける。

6：Ⅰ区塔身残欠

図版②参照：Ⅰ区／時期：－

・国東塔の塔身部材として報告されている。
・現況では詳細な確認はできず、その可能性が考えられる石造部材を１点確認した。

7：Ⅰ区（基壇遺構）

図版②参照：Ⅰ区／時期：－

・基壇遺構と報告されているⅠ区である。やや大型の礫などは確認できるが、国東塔の塔身残欠と思われる明確な部材は確認できなかった。
・現状においても、一辺４ｍ程で高さ60cm程の土壇が確認できる。

8：Ⅱ区礎石跡①

図版②参照：Ⅱ区／時期：正徳４年頃

・南側に踏石と考えられる平石が存在しているため、南向きの御堂だったと考えられる。
・柱筋が若干異なる礎石があることから、建て替えがあったものと推測される。

9：Ⅱ区礎石跡②

図版②参照：Ⅱ区／時期：正徳４年頃か

・写真右側に入口と考えられる踏石が確認できる。
・「田染村志」に正徳四年（1714）に中興したとの記載があるため、その頃に建てられた可能性が考えられる。

10：Ⅳ区礫集積地

図版②参照：Ⅳ区／時期：－

・寺院跡の北側に礫の集積している地点がある。寺院との関係は不明である。

11：Ⅴ区礫集積地

図版②参照：Ⅴ区／時期：－

・Ⅳ区同様に礫が集積されている。Ⅳ区に比べてやや扁平で大型の礫が集積されているようであるが、寺院との関連は不明である。

12：1妙口墓碑

図版②参照：Ⅲ区／時期：天正14年

・表面最上部に月輪に入った梵字と五輪塔が彫られる。
・水輪部に「妙□」、その左右に「天正丙戌（1586）」・「七月十三日」と刻まれると報告されているが、現状では風化が著しく確認することはできない。

13：３　息雲墓碑　図版②参照：Ⅲ区／時期：天正11年

・全長112㎝で、表面最上部に月輪に入った梵字があり、その下に五輪塔が彫られる。
・水輪部に「息雲」、左右に「天正癸末（1583）」・「七月十六日」と刻まれている。
・「息雲」は、後期田染氏の直系である建栄と推定されている。
・墓碑には苔の付着などが目立ち、銘文や五輪塔などは確認できない状況である。

14：４　宝塔、５　五輪塔　図版②参照：Ⅲ区／時期：天正９年

・写真奥が凝灰岩製の４宝塔で、手前が５五輪塔である。宝塔は基礎状に二段の造り出しや、塔身部の上下の出枘、笠下面の水切りなど全体的に丁寧な作である。塔身正面には、光背形に彫り窪めた中に地蔵菩薩像を彫出している。「宗方　天正九辛己（1581）三月十三日」の銘が残る。
・この宝塔と五輪塔の間に、相輪と考えられる部材が一点確認できる。

15：６、７　五輪塔　図版②参照：Ⅲ区／時期：－

・６は、劣化が進んでおり、北西側にやや傾いている。５と同様に空風輪が消失している。
・７は、各部材が組まれた状態で残されている。
・周辺に各五輪塔の部材が散乱している。

16：８、９五輪塔　図版②参照：Ⅲ区／時期：－

・８は水輪のみ確認できる。周辺に８と同一個体の部材と考えられる火輪が２基みられる。
・９は、空風輪部材が消失している。地輪に連弁を彫出しているのが確認できる。

17：10五輪塔　図版②参照：Ⅲ区／時期：－

・倒木により、北側に倒壊している。周辺に空風輪が集積しているため、６や９などの他の五輪塔の内、空風輪が消失しているものの部材である可能性が考えられる。

18：11五輪塔　図版②参照：Ⅲ区／時期：－

・五輪塔群の中で一番西側に位置している。水輪を乗せる外周に連弁を彫出している。笠部など、やや欠損部分が目立つ。

<table>
<tr><td>寺　院　名</td><td colspan="2">愛　敬　寺</td><td>寺院番号</td><td>⑧</td></tr>
<tr><td>所　在　地</td><td colspan="4">不明</td></tr>
<tr><td>居住状態</td><td>無住</td><td rowspan="8">各種文化財
員　数</td><td>種　別</td><td>個　数</td></tr>
<tr><td rowspan="7">指定文化財</td><td rowspan="7"></td><td>木造建築</td><td></td></tr>
<tr><td>礎石跡等</td><td></td></tr>
<tr><td>石造物</td><td></td></tr>
<tr><td>仏像</td><td></td></tr>
<tr><td>美術品</td><td></td></tr>
<tr><td>古文書</td><td></td></tr>
<tr><td>その他</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="5">特筆すべき
文化財</td><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>寺院
管理状況</td><td colspan="4">〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉
・烏目山愛敬寺の推定地については、横嶺の沖積地に残る「烏免」の小字から、その周辺であろうと推測されている。しかし、応永二十四年（1417）の「田染荘段銭結解状案」には、「烏山免」と記載されており、「烏免」周辺は愛敬寺の寺領であったとも考えられる。
・愛敬寺の前身は「烏目岩屋」であり、その名称から、推定地は沖積地ではなく、西叡山中腹に残る岩屋のいずれかであろうと考えられている。
・岩脇寺の聞き取り調査に協力して頂いた河野氏夫妻に話を伺ったが、圃場整備にともない寺院に関連する遺構などは消失してしまっているだろうということであった。</td></tr>
<tr><td>寺院史概略</td><td colspan="4">・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には「一・・・烏目岩屋　馬城寺末寺也、・・・」とあり、仁安三年の『六郷二十八山本寺目録』においても六郷山本山分末寺の一つとして「烏目山愛敬寺」と記載されている。
・応永二十四年（1417）の「田染荘段銭結解状案」には、「六郷分」として「五百文　烏山免」と記載されており烏目岩屋の事と推測されている。
・『豊後国六郷山巡礼手引』によると「五十弐番　同庄之内横峯村同領　無住　一　烏目岩屋　本尊観世音菩薩」とある。この事から、かなり早くの段階に無住になったものと推測される。</td></tr>
</table>

寺院現況及び変更点

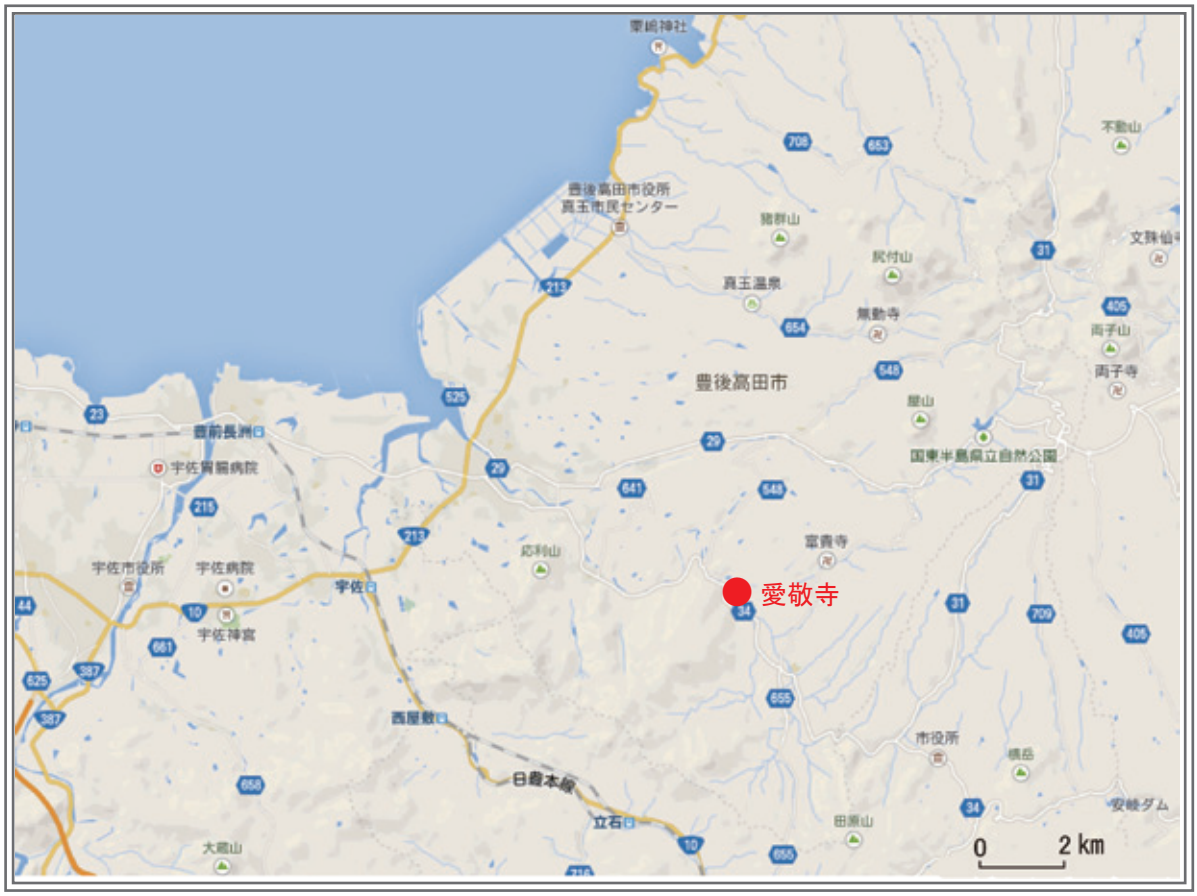
・現在愛敬寺に関連すると思われる遺構及び石造物は確認できなかった。（写真№１・２）
・愛敬寺の推定地周辺で、時期は不明であるが、石祠及び鳥居の残欠と思われる石造物を確認した。しかし、この石造物も周辺の圃場整備に伴う移動が考えられ、愛敬寺との直接的な関連は不明である。（写真№３）
・岩野勝氏によれば、岩脇寺に安置される観音菩薩坐像が、愛敬寺の本尊として報告されている。しかし、その由来や詳細は不明であり、岩脇寺にも現在この観音像が愛敬寺本尊であるとの話は伝えられていない。（写真№5）（『豊後高田市における六郷山寺院の信仰と経済的考察について地図並写真』1970　岩野勝）

≪主要参考文献≫

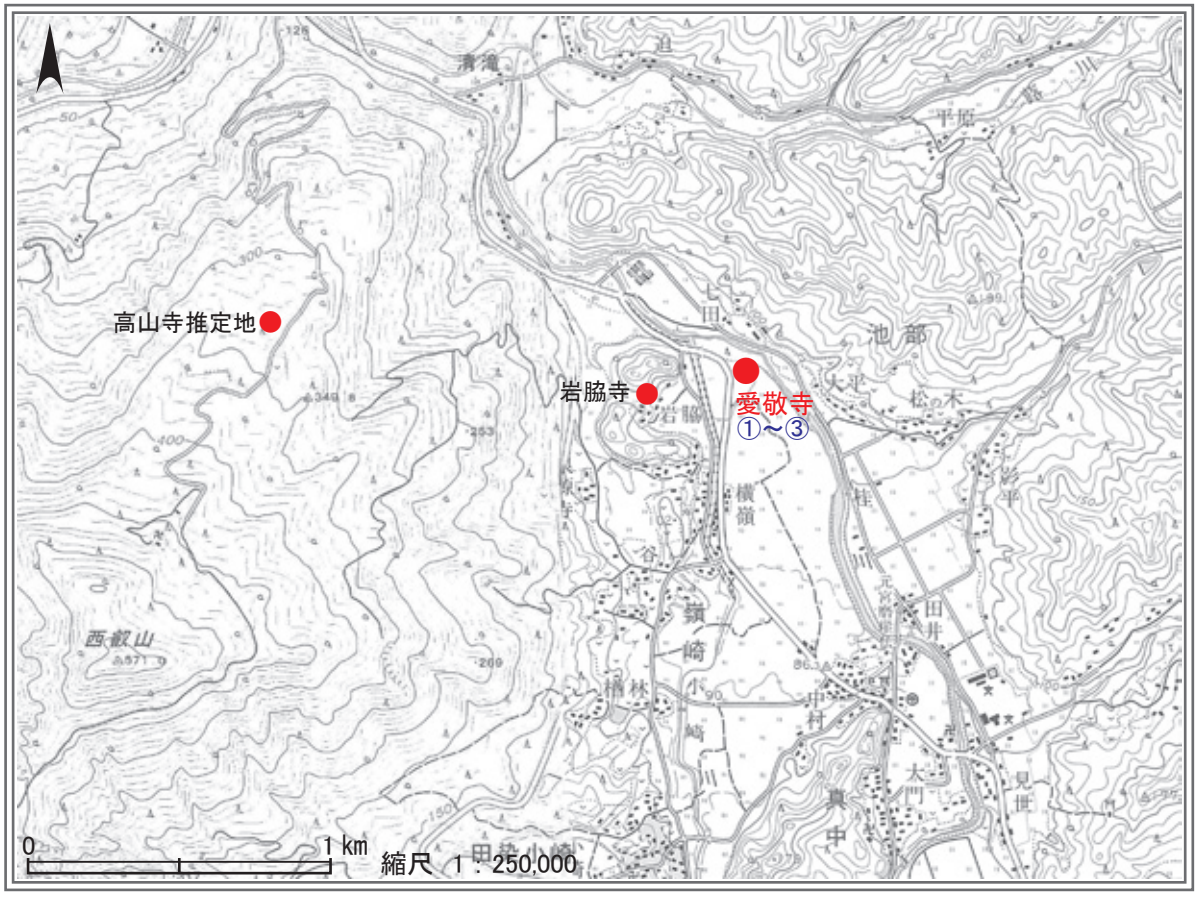
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ』　大分県立歴史博物館報告書第５集　大分県立歴史博物館　2001

図版①　　愛敬寺　位置図

市域位置図



詳細位置図



※番号は写真No.とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：推定地全景

図版①参照／時期：－

・沖積地は池部・横嶺条里遺跡であり、1町方格の地割が残されていた。その北端に烏免の小字がみられる。

2：推定地全景

図版①参照／時期：－

・現在は、圃場整備に伴い条里地割は残されていない。周辺においても寺院に関連する石造物等は確認できない。

3：推定地西側の石祠

図版①参照／時期：近世

・愛敬寺推定地の道路を挟んだ西側に石祠が1基立地している。近世のものと推察され、寺院との直接の関係は不明である。

4：推定地より西叡山を望む

図版①参照／時期:－

・西叡山に残る無名の岩屋の一つが烏目岩屋（愛敬寺）となる可能性がある。

5：観音菩薩坐像

時期：－

・岩脇寺の本堂に安置される木造の観音菩薩坐像である。
・1970年の岩野勝氏の報告では、愛敬寺本尊の観音像とされている。しかし、その由来などの詳細は不明である。また、現在ではこの観音像が愛敬寺の本尊であるとの話も伝えられていない。（豊後高田市における六郷山寺院の信仰と経済的考察について 地図並写真　岩野勝　1970）

<table>
<tr><td>寺院名</td><td colspan="2">清　滝　寺</td><td>寺院番号</td><td>⑨</td></tr>
<tr><td>所在地</td><td colspan="4">大字蕗字山ノ下</td></tr>
<tr><td>居住状態</td><td>無住</td><td rowspan="8">各種文化財員数</td><td>種別</td><td>個数</td></tr>
<tr><td rowspan="7">指定文化財</td><td rowspan="7"></td><td>木造建築</td><td></td></tr>
<tr><td>礎石跡等</td><td></td></tr>
<tr><td>石造物</td><td>3</td></tr>
<tr><td>仏像</td><td>1</td></tr>
<tr><td>美術品</td><td></td></tr>
<tr><td>古文書</td><td></td></tr>
<tr><td>その他</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="5">特筆すべき文化財</td><td>・享保銘墓碑（写真№10）</td><td colspan="3">・焼仏（写真№14）</td></tr>
<tr><td>・近世石造仏群（写真№16～23）</td><td colspan="3">・奥の院岩屋（写真№24）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>寺院管理状況</td><td colspan="4">〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉
・寺院は近隣住民によって管理されているが、近年は高齢化が進み難しくなってきているということである。よって、清滝寺内の御堂に安置していた仏像類を、集落近くの山神社内に新たな御堂を造り、こちらに一括して安置しているということである。
・安東数義氏によると、寺院背後の東西に延びる尾根には石造物が点在しているということである。また、山頂付近には、『奥の院』と呼ばれる箇所が存在していたそうである。奥の院へ続く山道は、崖面を這いつくばって登るような険しいものだったということである。
　上記の聞き取り調査から、尾根上の踏査を行い、奥の院及び石造物集中地点について確認した。奥の院については、撮影した写真を安東氏に見て頂き、間違いないことを確認した。
・参道から御堂が立地している平坦面に関しては、雑草や裏山からの礫の崩落などがみられ、荒廃が著しい印象を受ける。</td></tr>
<tr><td>寺院史概略</td><td colspan="4">・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には本山末寺とされ、「限東迫、限西マイ淵、限南サクラノ尾立、限北山下美尾」と寺域が記されている。
・江戸時代の『豊後国六郷山巡礼手引』には、「五十三番 横嶺村 清滝岩屋（無住）、五十四番 石倉山清滝寺」とある。共に本尊観世音菩薩と記載されているが、現在、新しく建てられた御堂内に焼仏と思われる仏像と、その他、近世段階と思われる石造仏が確認できるだけである。
・江戸時代後期には無住化したものと推測される。</td></tr>
</table>

寺院現況及び変更点

・清滝寺は大字蕗字山ノ下の山裾に位置しており、周辺に小規模な集落が展開している。（写真№.１）当寺においては、Ⅰ～Ⅳ区の寺院を形成する平坦面と、寺院周辺の現況について報告する。

〈Ⅰ区〉（図版②：清滝寺実測図参照）
・民家に続く農道から石段の参道が形成されており、左側に手水鉢、弘法大師像及び大師像の寄進碑などが位置している。（写真№.２）

〈Ⅱ区〉（図版②：清滝寺実測図参照）
・Ⅰ区から石段を上がると南北約10m×東西約20～25m程の平坦面が石垣によって形成されており、倉庫及び墓地などが立地している。（写真№.３）そこから、さらに上へ登ると、岩が露出している場所があり、その裏へ回り込むような形で参道が続いている。

〈Ⅲ区〉（図版②：清滝寺実測図参照）
・Ⅲ区入口（写真№.４）には、幅約３m程の緩やかな石段が組まれている。また、その右側には境内から続く水路が走っている。
・Ⅲ区内に入ると、直ぐ左側に礫群があり、石碑等の台座と思われる石造物が１基存在しており、コケの付着などが目立つ。（写真№.５）また、このⅢ区も石垣により形成されている。
・御堂（写真№.６）については、近年管理が難しくなってきているということで荒廃が進んでおり、建築部材の腐食、土壁の漆喰の崩落が見られる。現在御堂内部（写真№.７）には仏像などは安置されていない。御堂の裏側は、岩壁が露出しており、崩落石なども目立つ。（写真№.８）
・御堂向って左側に記念碑が１基建てられている（写真№.９）

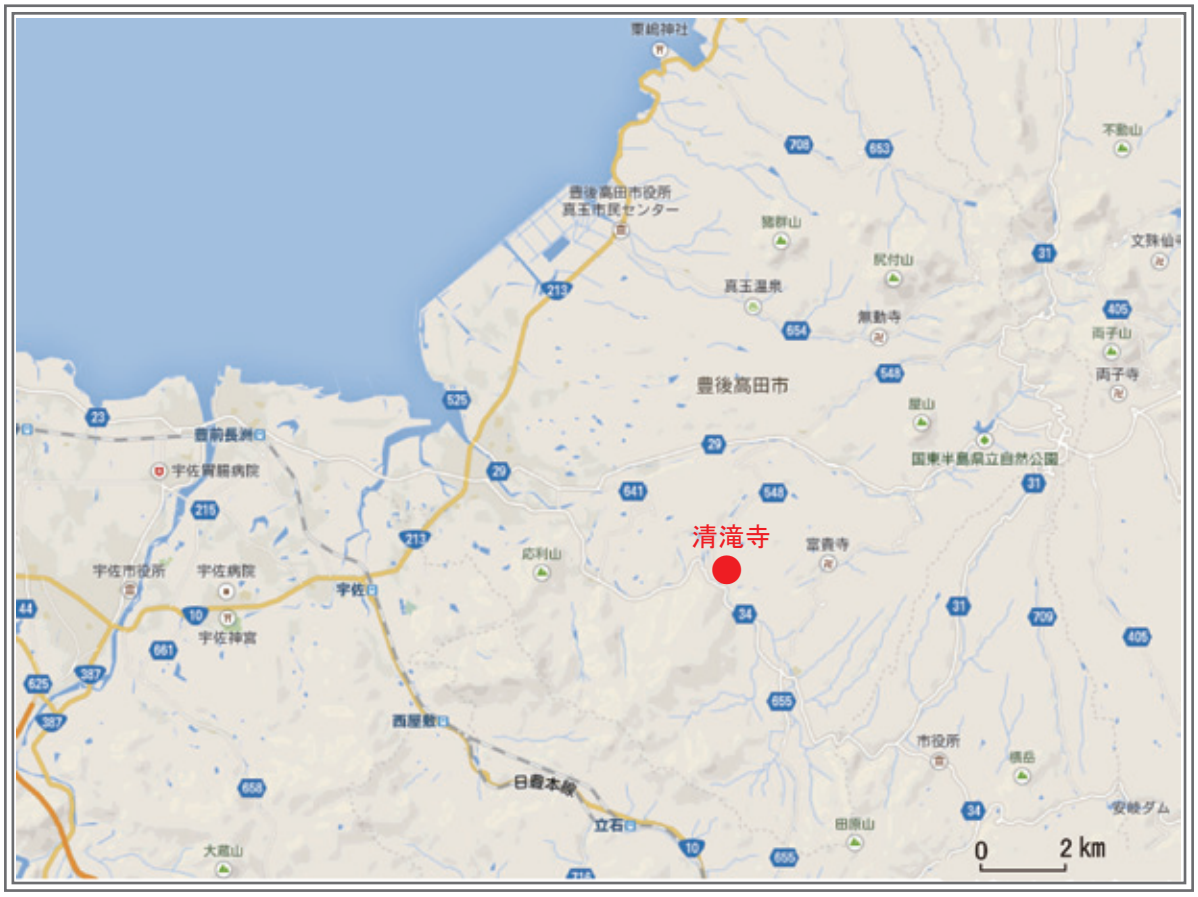
〈Ⅳ区〉（図版②：清滝寺実測図参照）
・Ⅳ区において、五輪塔？の火輪部材と、石塔か無縫塔の台座部材を組み合わせたものを１基、享保年銘が刻まれた墓碑が１基、一石五輪塔１基を確認した。（写真№.10）また、この石塔群から北西側に斜面を登ると石祠が２基（写真№.11）位置している。確認した限りでは、中世段階まで遡るような石祠ではないと思われる。

〈参道入り口周辺〉（図版①：詳細位置図参照）
・以前報告されている御堂内に祀られていた焼仏については、４年程前に清滝寺の東側に立地する山神社の隣に小堂を建て、清滝寺境内周辺にあった石造仏と一緒に、すべて降ろし、安置したということである。小堂内部には、十王像（石造）、地蔵像（石造）、木造仏などがあり、木造仏に関しては、風化が著しく、やや炭の付着した箇所を確認した。そのため、この木造仏が以前報告されている焼仏の可能性が高いと思われる。（写真№.12.13.14）
・清滝寺の立地している集落横を流れる小川沿いに、五輪塔２基、石祠１基、石幢龕部もしくは石殿と考えられる部材が集積されている箇所が存在している。（写真№.15）
・聞き取り調査により、『奥の院』及び奥の院へ続く山道に『石造仏』が存在していた可能性が考えられたため、清滝寺の西側山頂付近の踏査を行った。奥の院へ続く山腹において、岩面が露出し岩屋のような形状を呈している箇所が数箇所確認できた。その内部に七箇所に分けて40躯程の石造仏が存在している。（写真№.16～23）江戸時代の『豊後国六郷山巡礼手引』にみられる「清滝岩屋」の可能性が考えられる。
・石造仏群から急傾斜を北側へ向かって登ると、山頂手前に石を組んで作られたような小規模な岩屋が存在している。（写真№.24）安東氏によると、この周辺が『奥の院』と呼ばれていたということである。山頂周辺の踏査を行ったが、関連する石造物などは確認できなかった。また、安東氏は山頂付近に競馬場が存在していたと聞いたことがあると話してくれた。

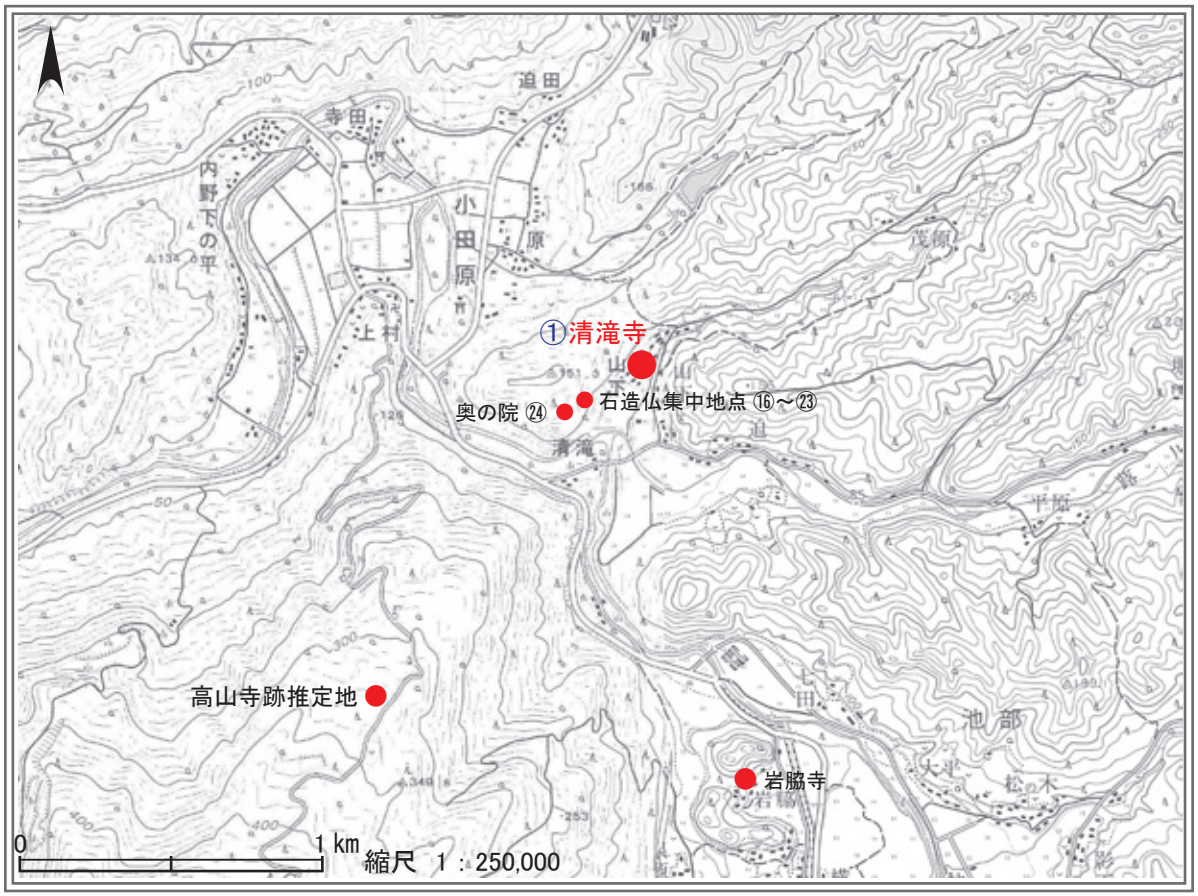
≪主要参考文献≫
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ』大分県立歴史博物館調査報告書第５集　大分県立歴史博物館　2001

図版①　清滝寺　位置図

市域位置図

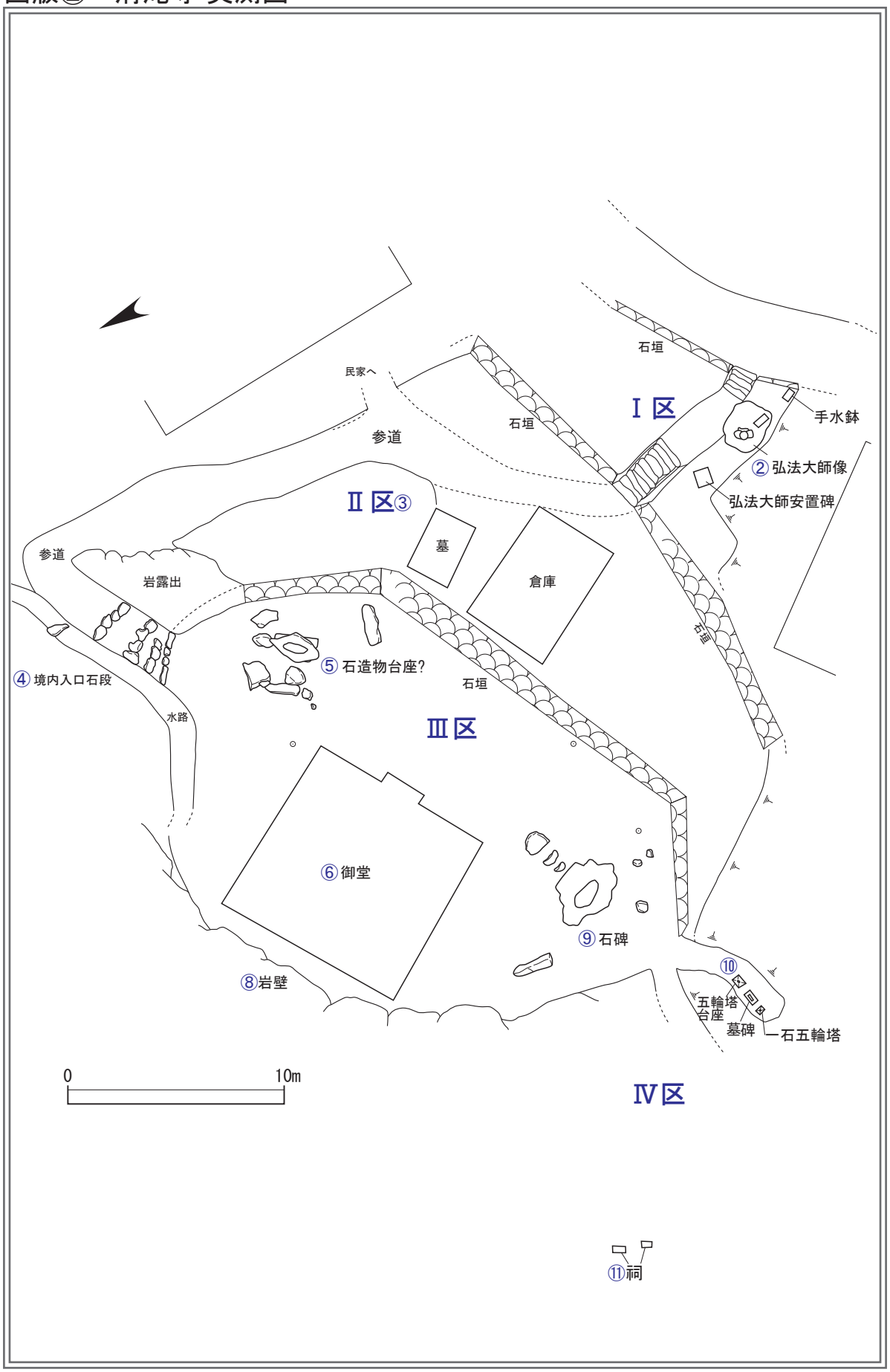


詳細位置図



※番号は、 写真№.とリンク

図版②　清滝寺 実測図



※番号は、 写真No.とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：清滝寺全景　図版①参照／時期：－

・集落が形成されている山裾の上段に立地している。境内から山裾を西側へ進むと、石造物の集中している地点と以前は奥の院と呼ばれていた小規模な岩屋が残る。

2：Ⅰ区 石造物　図版②参照：Ⅰ区／時期：近世以降？

・写真左側から、手水鉢、寄進碑、弘法大師像、記念碑の順に位置している。

3：Ⅱ区現況　図版②：Ⅱ区／時期：現代

・境内（Ⅲ区）の一段下に形成されている平坦面であり、現在は倉庫と現代墓が立地している。周辺の踏査を行ったが石造物などは確認できない。

4：境内入口（Ⅲ区）　図版②参照：Ⅲ区／時期：－

・幅約３ｍ程の緩やかな石段が形成されている。写真右側には、石段に沿う形で水路が設けられている。

5：台座部材？　図版②参照：Ⅲ区／時期：－

・境内の左手側に１ｍ程の礫の集積がみられ、その中心部分に記念碑等の台座と思われる石造物が存在している。銘などは確認できず、詳細は不明である。

6：本堂　図版②参照：Ⅲ区／時期：—

・管理が行えていないため、土壁の崩落や建築部材の腐食が目立つ。

文化財の現況・詳細（2）

7：本堂内現況

Ⅲ区堂内／時期：－

・現在、堂内には仏像は安置されておらず、集落付近の新しく建てられた御堂に安置されている。また、佛具などは堂内に残されている。

8：御堂裏側岩面

図版②参照：Ⅲ区／時期：－

・御堂の裏側は崖面となっており崩落石が目立つ。

9：Ⅲ区記念碑

図版②参照：Ⅲ区／時期：現代

・境内西側において、約２ｍ×３ｍの範囲に、巨石を組み合わせた記念碑が立地している。

10：Ⅳ区石造物群

図版②参照：Ⅳ区／時期：近世

・五輪塔の火輪部材と石塔か無縫塔の台座が組み合わされて置かれており、一石五輪塔も確認できる。また、中央に享保年の銘が確認できる墓碑も存在している。

11：石祠

図版②参照：Ⅳ区／時期：近世

・Ⅳ区の墓碑から北西側へ山の斜面地を登ると石祠が２基安置されている。風化具合などから、時期的に新しいものと考えられる。

12：現御堂

図版③参照／時期：現代

・住民の高齢化が進み、境内や御堂の管理が難しくなったため、周辺に点在する石造仏と合わせて、管理するために４年程前に建てられたものである。

文化財の現況・詳細（3）

13:現御堂内

現観音堂内／時期：中世～近世？

・堂内には、地蔵像や十王像などの石造仏と一緒に、以前報告のある焼仏と思われる木造仏も確認できる。

14:焼仏

現観音堂内／時期：－

・写真№13でみられる木造仏であるが、ごく微量に炭の付着している部分が確認できるため、以前の報告に記載のある焼仏と考えられる。

15:周辺石造物

図版①参照／時期：近世か

・清滝寺の立地する集落の小川沿いに石造物が集積されている箇所がある。写真左側から五輪塔が２基、中央に石幢もしくは石殿と思われる部材があり、一番右手には石祠が１基ある。

16:石造仏①

図版①参照／時期：近世

・石造仏が安置されている最も西側に２躯の石造仏が確認できる。本来は、この地点から奥の院へと登る参道が存在していたと考えられるが、現在は倒木などにより確認することが困難な状況である。

17:石造仏②

図版①参照／時期：近世

・岩面が剥離し、崩落した隙間に３躯の石造仏が安置されている。写真右側の弘法大師像は、顔の部分が欠損している。
・石造仏①の東側に位置する。

18:石造仏③

図版①参照／時期：近世

・石造仏の展開する中央部に巨石が重なりあっている箇所が存在している。その左側に２躯の石造仏が確認できる。
・石造仏②の東側に位置する。

19：石造仏④

図版①参照／時期：近世

・岩屋のように、巨石の下が空洞になっており、多数の石造仏が安置されている。石造仏の展開する中央部に位置している。
・石造仏③の東側に位置する。

20：石造仏⑤

図版①参照／時期：近世

・小規模な天然の岩屋を利用し、その中に確認できるだけで10躯程の石造仏を安置している。
・石造仏④の東側に位置する。

21：石造仏⑥

図版①参照／時期：近世

・石造仏が展開する最も東側に存在している石造仏群である。
・この石造仏⑤と⑥の間から石造仏⑦へ降りることができる。

22：石造仏⑦

図版①参照／時期：近世

・９躯程の石造仏が確認できる。

23：石造仏集中地点　全景

図版①参照／時期：近世

・写真右側のような岩面が露出しており、その前に広がる平坦面が参道として使用されていたと考えられる。

24：奥の院　岩屋

図版①参照／時期：中世？

・清滝寺の西側山頂付近において、小規模な岩屋を確認した。聞き取り調査を行った安東数義氏によるとこの周辺を「奥の院」と呼んでいたということである。
・岩屋内に遺物等は確認できず、周囲においても関連する石造物などは確認できない。

寺院名	宝　壽　坊		寺院番号	⑩
所在地	大字小崎周辺			
居住状態	無住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財			木造建築	
			礎石跡等	
			石造物	
			仏像	1
			美術品	
			古文書	
			その他	
特筆すべき文化財	・釈迦如来坐像（写真№6）			
寺院管理状況	〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉 ・広範囲で踏査を行ったが、寺院に関連する明確な遺構や遺物は確認できない。			
寺院史概略	・宝壽坊は、安貞二年の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』や建武四年の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には記載がなされていない。 ・近世の作とされる仁安三年の『六郷二十八山本寺目録』には、「本山分　末寺宝壽坊」と記載される。 ・元禄二年（1669）の状況を天保七年（1836）に書き写した真木村絵図に添付された明細帳には、「寺一軒　保寿房　禅宗」とある。この保寿房が宝壽坊と同一となる可能性がある。			

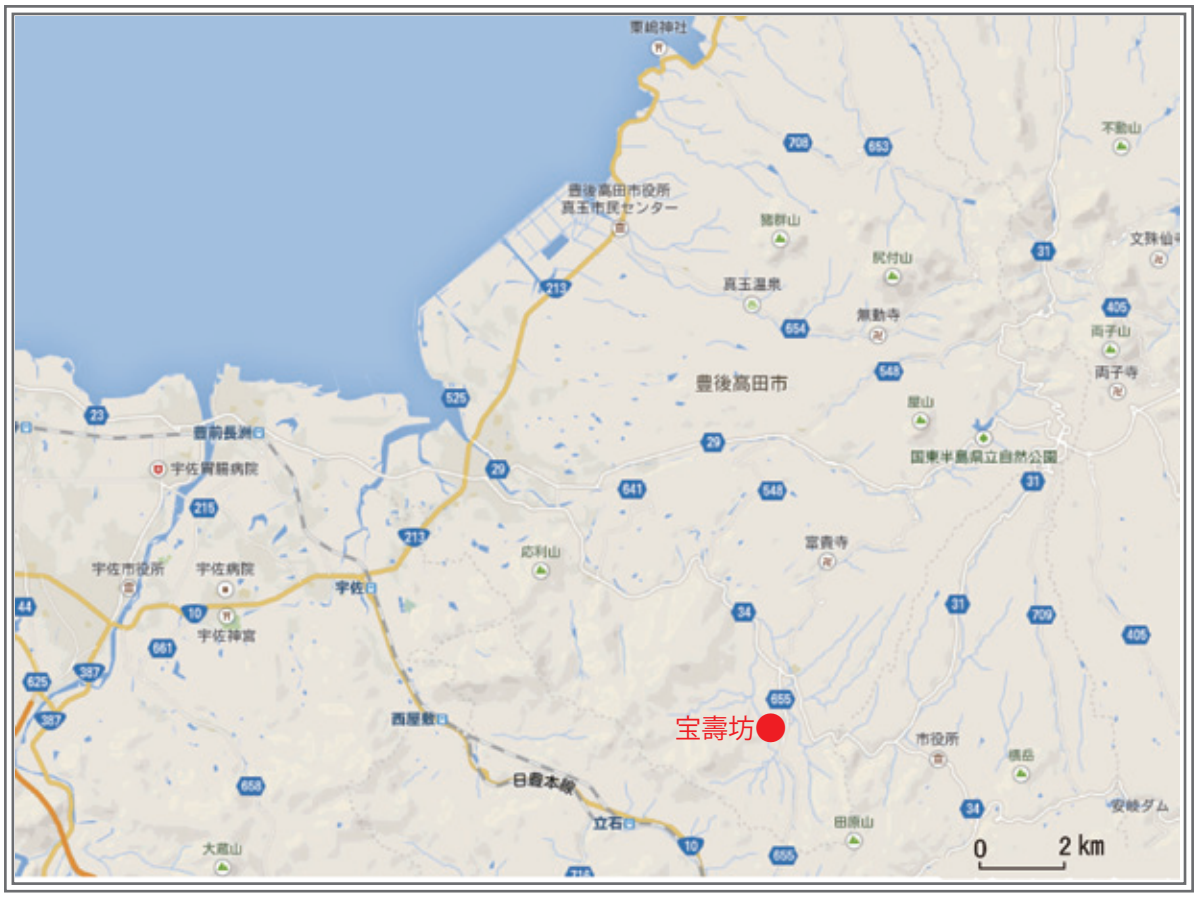
寺院現況及び変更点

・『豊州御領覚書』には、真木村に「保寿庵　禅宗　豊後杵築領上沓掛村宝陀寺末」とあり、絵図の村明細帳を含めると、江戸後期に真木村には保寿房（庵）と号する禅宗の寺が存在したことが知られる。この保寿房（庵）が、宝壽坊と同一となる可能性が高い。
・保寿房（庵）の所在地について、真木村絵図には大堂のみが寺として描かれ、明細帳の「寺一軒　保寿房」との記載から保寿房が大堂を指す可能性がある。もしくはその周辺と思われる。
・1932年の『田染村志』には「保寿房（庵）」は記載されていないが、「宝壽坊」について「田染村大字眞中字眞木に在り。亦満山本山分末寺の一つなり。養老年間の開創にして嘗て満山長講所傳乗寺の坊中なりき。今は唯地名にその名を止むるのみ」とある。『田染村志』が刊行された当時、真木に地名として「宝壽坊」が残っていたのであろうが、現在では認められない。
・『田染村志』には、「宝壽坊」の他に「寶珠院」と号する寺院が紹介される。それによれば「龍護山寶珠院跡は田染村大字峯崎字池ノ内に在り。開山は隠渓和尚にして、本尊は観世音菩薩とす」とある。この宝珠院に関しては、『六郷二十八山本寺目録』を基にした六郷山寺院主要分布図には、本山分末寺として「宝珠院」という記載があり、「宝壽坊」と混在している。
・『田染村志』においては、「宝壽坊」と「宝珠院」は明確に区別されているが、「保寿房（庵）」・「宝壽坊」・「寶珠院」の関連については、今後史料の増加を待って検討する必要があろう。
・平成25・26年度の調査においては、真木大堂周辺及び『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ』に記載されている「宝珠院」周辺地域を対象として行った。以下、その内容を報告する。
・宝珠院については、『田染村志』に「大字峯崎字池の内に在り」と記載されているが、小崎地区にその推定地が残されている。小崎村絵図には推定地に堂と２軒の民家が描かれており、戦前まで民家は存在していたという。推定地付近は、近年道路建設が実施され大きく改変されている。その道路の西側に、やや拓けた平坦面が在り石垣及び石祠1基を確認した。『豊後国田染荘の調査Ⅰ』には、「石垣・礎石残る。石仏龕、五輪塔」と記載がある。しかし、私有地であるため、遠景からの写真撮影のみを行った。また、石垣も報告されているものか断定はできない。（写真№２～４）
・小崎の「原のお堂」（写真№５）には、宝珠院の廃絶後に木造釈迦如来坐像（写真№６）が移されて合祀されている。「大永七年（1527）九月二十日」の墨書銘が残る。地元では「フウシュウインの仏様」と呼ばれているが、宝珠院がなまったものと考えられている。

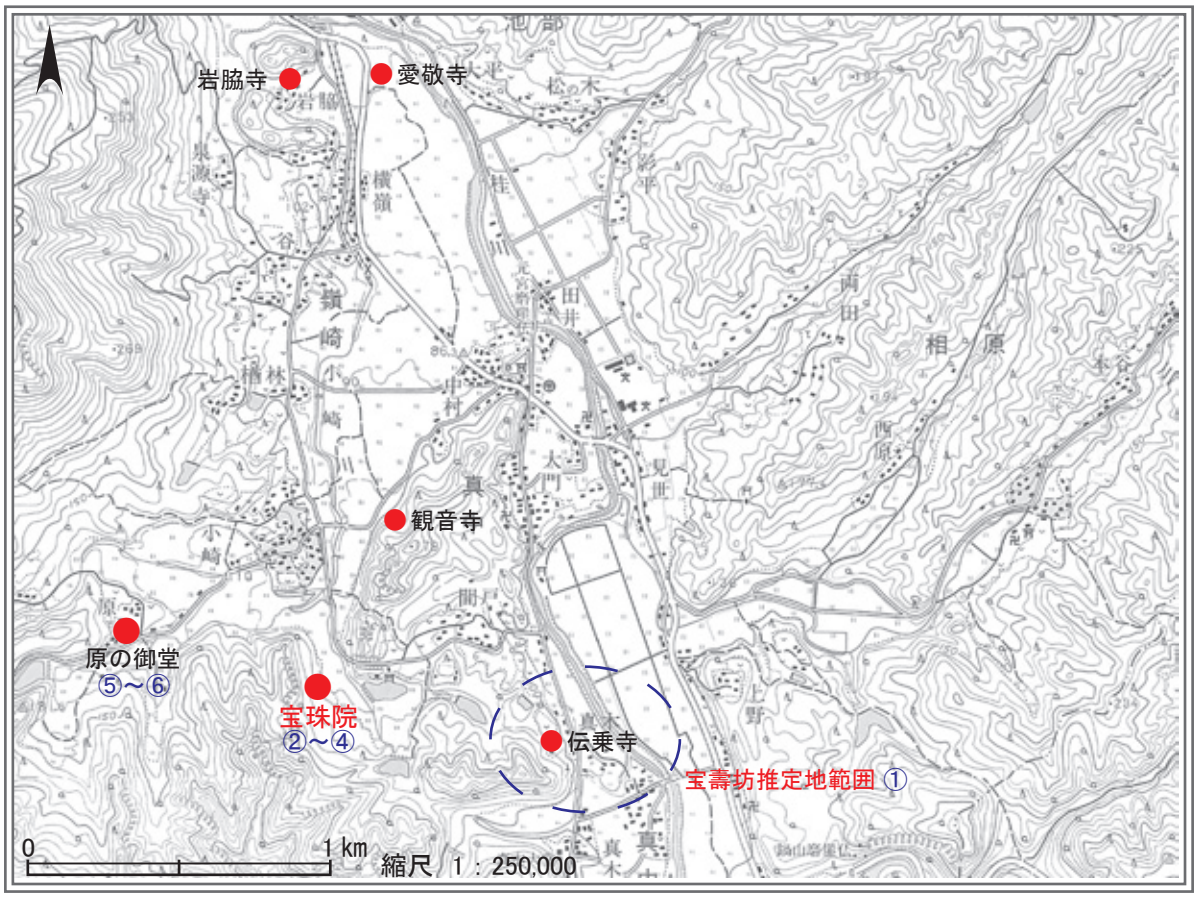
≪主要参考文献≫
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ』大分県立歴史博物館調査報告書第２集　大分県立歴史博物館　1999
・綾部栄徳　「真木大堂の仏像」『会報　田染』第 24 号　平成 21 年秋　2009

図版①　　宝壽坊　位置図

市域位置図



詳細位置図



※番号は写真№とリンク

文化財の現況・詳細（1）

1：真木大堂周辺遠景

図版①参照／時期：－

・昭和初期には「宝壽坊」は地名として残っていたようであるが、現在は不明である。

2：宝珠院推定地遠景

図版①参照／時期：－

・写真左側の大岩の下段付近の踏査を行ったが明確な遺構は確認できない。

3：宝珠院推定地全景

図版①参照／時期：－

・近年整備された道路に面する地点に宝珠院推定地がある。
・石垣などが残されており、建造物が存在した可能性が考えられるが、関連性は不明である。

4：石祠及び周辺状況

図版①参照／時期：－

・推定地付近に近世と推測される石祠が立地しているが、私有地であるため、詳細は不明である。

5：原のお堂

図版①参照／時期：－

・小崎地区の原のお堂に、宝珠院の木造釈迦如来坐像が合祀されている。

6：釈迦如来坐像

図版①参照／時期：大永７年

・宝珠院より合祀された木造の坐像で、「フウシュウインの仏様」と地元では呼ばれている。フウシュウインは、宝珠院がなまったものと考えられている。
・「大永七年（1527）九月二十日」の墨書銘が残る。

寺院名	間戸寺		寺院番号	⑪
所在地	大字真中間戸二ツ岡1244番地			
居住状態	無住	各種文化財員数	種別	個数
指定文化財	間戸二層塔（市有形）		木造建築	
			礎石跡等	
			石造物	2
			仏像	1
			美術品	
			古文書	
			その他	1
特筆すべき文化財	・間戸宝篋印塔（写真№3）	・穴井戸観音（写真№5）		
	・土塁跡（写真№18）			
寺院管理状況	**〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉** ・間戸台地上の集落を中心として、北側に穴井戸観音、南側に『田染村志』が間戸寺跡とする推定地があり、西南側に二層塔等の石造物が位置している。 ・穴井戸観音では、参道の石段がやや荒廃しているが、それを補うように東側に新参道が整備されている。			
寺院史概略	・安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』には「間戸岩屋」と記載されている。この目録から、本尊は薬師如来で法華不断経や薬師講、六所権現では二季祭五節供が行われていたことが分かる。よって、間戸寺には、これらの行事を行う僧侶や堂宇の存在が考えられ、広い範囲を寺域としていたとされる。 ・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には、「間戸寺　大折山末寺也　彼寺領小田原助入道押領」と記載される。 ・応永二十四年（1417）の『田染荘段銭結解状案』には、「六郷分」として「一貫五百文　間戸寺」と記載されており、この頃までは六郷山寺院として活動していたことが確認できる。 ・中世末になると天文十四年（1545）の『永正惟定契約状』や同年の『田染建栄書状』に「間戸寺秋吉駿河守」なる人物名が記載されるが、間戸寺と関連のある人物とみられている。よって、間戸寺としては16世紀中頃までその存在が認められるが、応永二十四年以降も六郷山寺院として存続してきたかは明らかではない。その後、16世紀後半以降から江戸時代初期にかけて廃絶したものと考えられる。 ・宝暦五年（1755）の『豊前豊後六郷山百八十三ヶ所霊場記』には、 「第三十五番　田染村間戸 朝日山間戸寺　本尊　薬師　無住 札納所　朝日山岩屋 此ノ岩穴深ク松明ツケテ入見ルベシ」 との記載が残る。朝日山岩屋は、岩穴深ク松明ツケテの記述から、穴井戸観音と思われる。 ・田染村大庄屋河野家の記録である『水鏡』には、天保八年（1837）の峯入りの行程が記述されており、田染組の間戸寺に２泊していることが分かる。			

寺院現況及び変更点

・間戸寺は『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ』によると「『田染村志』では、田染村大字真中字間戸二ツ岡一弐四四番地に比定している」と報告されている。間戸寺の寺域は、穴井戸観音から二層塔が存在する台地までを含めた広範囲で想定されている。これまでの調査成果をふまえ、当該地を踏査した。

〈間戸台地〉

・現在、間戸の集落や二ノ宮八幡が位置する台地上である。台地上の穴井戸観音入口（写真№１）より進むと、間戸生活改善センターの敷地内に、宝篋印塔１基と石祠１基（写真№２.３）が位置している。また、集落の民家の庭先に五輪塔残欠を含めた石祠が位置している。

〈穴井戸観音〉

・間戸集落より北へ向かうと菖蒲園を通り穴井戸観音入口の石段へと至る。この入口の案内標識の傍に江戸時代の墓碑が１基倒れているが、原位置であるかは不明である。石段（写真№４）を登りつめた所の御堂（写真№５・６）及び前庭部の石造物群（写真№７～10）は、前回の報告書の記載通りであった。御堂左側にある「うそつきの岩」（写真№11）背後の斜面には、一石五輪塔（写真№12）が祀られている。
・御堂左手より背後の洞窟内に入るが、1976年の報告書に記載のある「六所権現（小さな自然石）」については、確認することが出来なかった。仁聞の隠れ水（写真№13）の横に立つ石がそれであろうか。

〈間戸二層塔〉

・穴井戸観音の入口より西側へ100ｍ程下った左側に整地された駐車場があり、その南西奥に間戸二層塔（写真№14・15）が位置している。また、報告書に記載はないが、二層塔の周辺には石造物群がみられる。原位置を保っていないと思われるが、南側の斜面に向かって五輪塔２基、国東塔１基（現代）、一石五輪塔１基（写真№16）が配置されている。

〈二宮八幡社〉

・間戸二層塔の西側に隣接している。二ノ宮八幡の手水鉢は、巨石を刳り貫いたもので、穴井戸観音のある山から運んできたと地元の方に聞き取ることができた。

〈二ツ岡1244番地〉

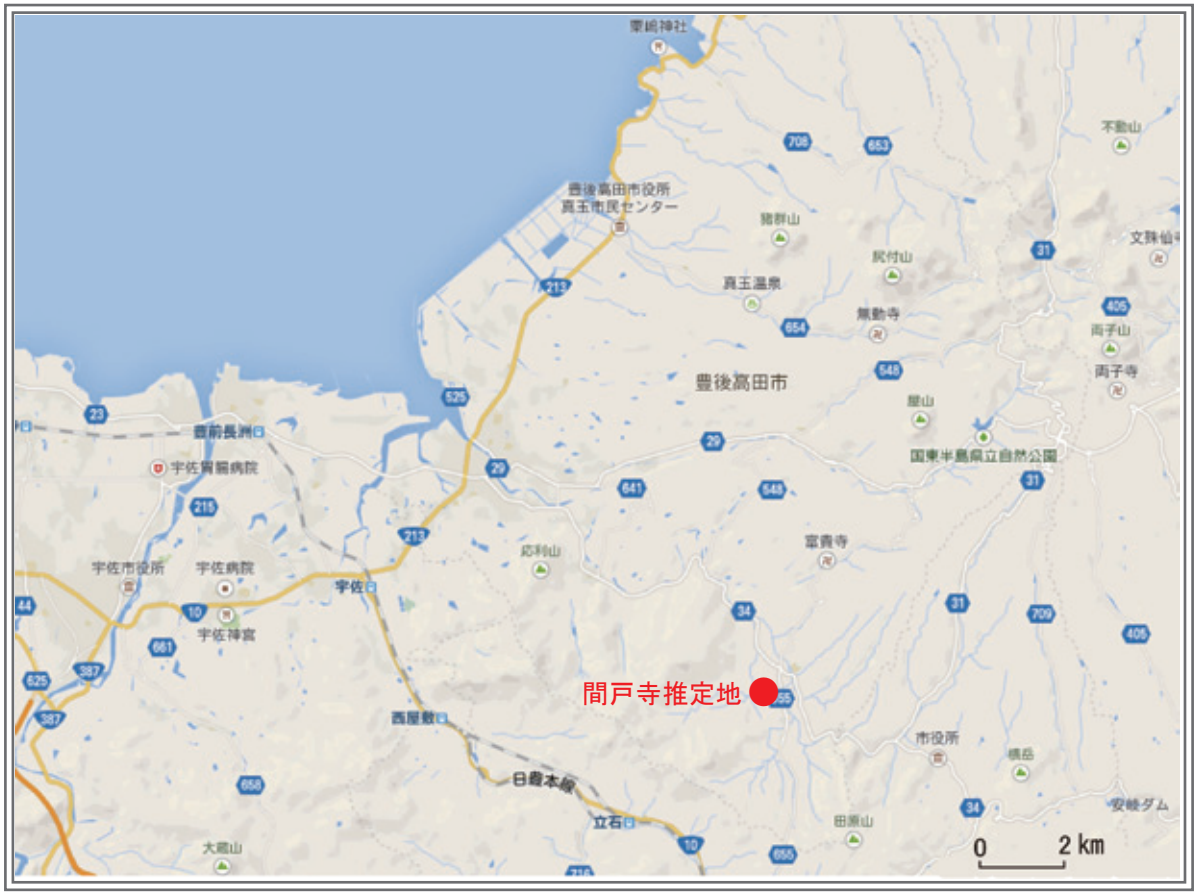
・『田染村志』において間戸寺の跡地として記載されている地点（写真№17）である。間戸台地の南側、谷状地形を挟んだ尾根上となる。推定地は現在、平坦で山林となっている。この平坦面を囲むように東側と南側において高さ80㎝程の土塁（写真№18）を確認した。この推定地では、石造物や遺物は確認できなかった。

≪主要参考文献≫

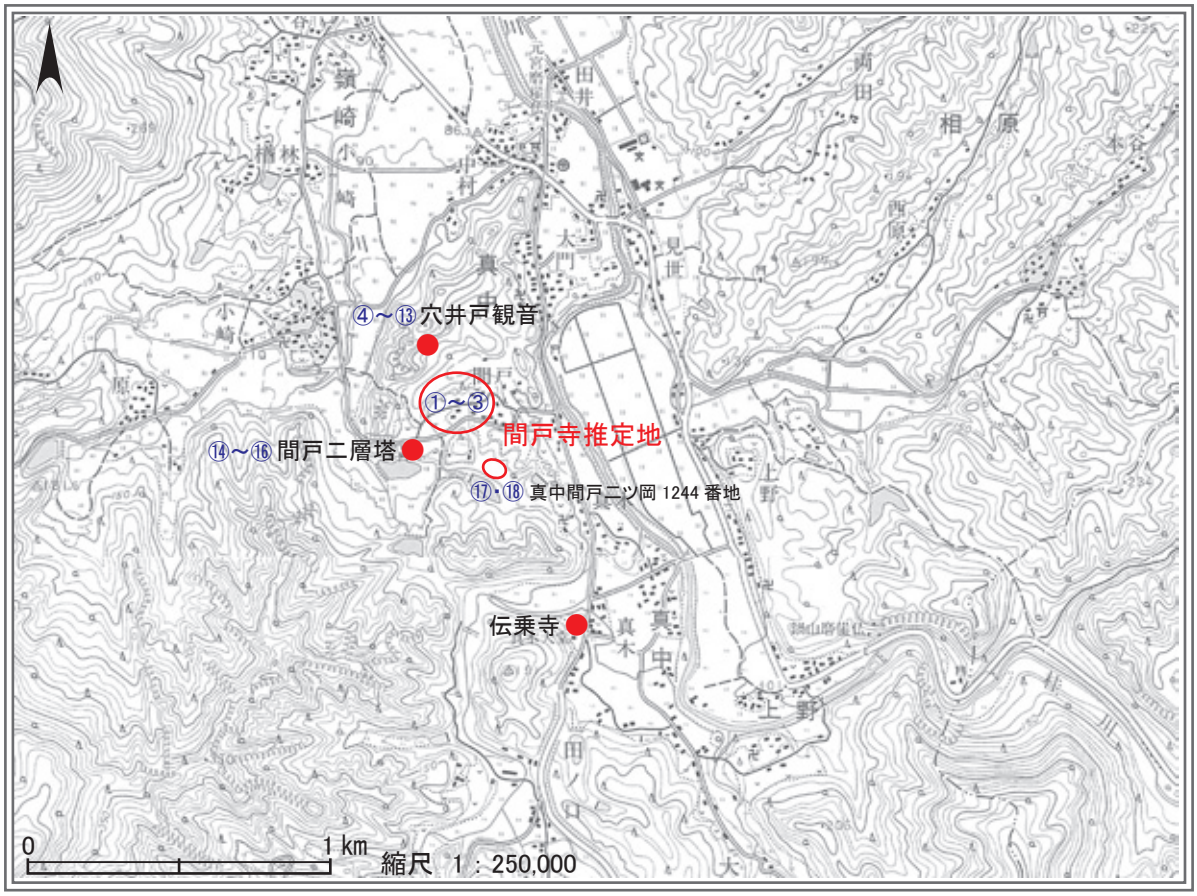
・『豊後国田染荘の調査』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第３集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986
・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ』 大分県立歴史博物館調査報告書第２集　大分県立歴史博物館　1999
・『くにさきの世界－くらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編　豊後高田市　1996
・『六郷満山関係文化財総合調査概要－豊後高田市・真玉町・香々地町の部－』 大分県文化財調査報告書　第37輯　大分県教育委員会　1976

図版①　間戸寺　位置図

市域位置図



詳細位置図



文化財の現況・詳細（1）

1：間戸台地

図版①参照／時期：現代

・間戸台地上が候補地の一つである。正面に穴井戸観音、左側に二ノ宮八幡が位置している。

2：宝篋印塔・石祠

図版①参照／時期：中世・近世

・間戸生活改善センターの敷地内に宝篋印塔・石祠が残される。石祠内には、弘法大師像が安置される。

3：宝篋印塔

図版①参照／時期：中世か

・相輪の九輪を欠いている。
・移転したものであるが、本来の位置は不明である。

4：穴井戸観音参道

図版①参照／時期：近世

・直線的な石段が残る。
・近年、車道が整備されている。

5：御堂

図版①参照／時期：近世

・御堂は２間×３間で、洞窟の前面に位置する。

6：堂内

図版①参照／時期：近世か

・石造観音菩薩立像、木造観音菩薩立像及び木造尊名不詳仏２躯が安置される。

7：石造物群

図版①参照／時期：近世

・御堂の前面に、石灯篭が位置している。宝暦九年（1759）や文化十年（1813）の銘が残る。

8：石造物群

図版①参照／時期：近世

・御堂右側の岩肌に、狛犬や一石五輪塔・石造仏が残る。
・一石五輪塔は中世、石造仏は近世であろう。

9：石造仏

図版①参照／時期：近世

・御堂右側の岩肌を掘り込んで小さな龕を形成している。
・石造仏は近世であろう。

10：弘法大師像

図版①参照／時期：近世

・御堂の左側前面の巨石上に位置している。

11：うそつき岩

図版①参照／時期：－

・弘法大師像の位置する巨石と、その外側の巨石の間に崩落した大石が挟まれている。
・大石の下を通ると、うそつきの頭上に崩落すると聞き取りができた。

12：一石五輪塔

図版①参照／時期：中世

・うそつき岩の背後に位置している。
・空風輪を欠いているが、形態的特徴から中世段階まで遡るものであろうか。

文化財の現況・詳細（3）

13:仁聞の隠れ水

図版①参照／時期：－

・御堂背後の洞窟内に湧水がみられる。その傍らには、石造の観音像が祀られている。

14:二層塔周辺

図版①参照／時期：中世

・二宮八幡の東側に二層塔や五輪塔が位置している。
・周辺は整備されており、石造物群は集積された可能性がある。

15:間戸二層塔

図版①参照／時期：南北朝期

・蓮華座や台座・基礎二段も含めて現存しており、ほぼ完形と思われる。

16:一石五輪塔

図版①参照／時期：中世

・空風輪部を欠いているが、中世であろうか。

17:間戸寺推定地

図版①参照／時期：－

・『田染村志』に間戸寺は大字真中間戸二ツ岡1244番地に所在していたと記載される。
・現在、推定地は平坦で石造物や遺物は確認できない。ただ、西側隣接地を含めた範囲で土塁が確認できる。

18:土塁跡

図版①参照／時期：中世か

・推定地を囲むように土塁が巡る。
・土塁の残存高は約80㎝である。